

靈界物語 第四九卷 眞善美愛 子の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四九卷』愛善世界社

2004(平成16)年11月07日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 神示の社殿 しんじ しやでん

第一章 地上天國 ちじやうてんこく（一―二七五）

第二章 大神人 だいしんじん（一―二七六）

第三章 地鎮祭ぢちんさい（一二七七）

第四章 人情にんじやう（一二七八）

第五章 復命ふくめい（一二七九）

第二篇 立春薰香りつしゆんくんかう

第六章 梅うめの初花はつはな（一二八〇）

第七章 剛がう膽たん娘むすめ（一二八一）

第八章 スマート（一二八二）

第三篇 曉山げうざんの妖雲えううん

第九章 善ぜん幻げん非び志し（一二八三）

第一〇章 添書てんしよ（一二八四）

第一一章	水吞同志 <small>すてんどうじ</small>	〔一二八五〕
第一二章	お客さん <small>きやく</small>	〔一二八六〕
第一三章	胸の轟 <small>むね とどろき</small>	〔一二八七〕
第一四章	大妨害 <small>だいばうげん</small>	〔一二八八〕
第一五章	彗星 <small>すゐせい</small>	〔一二八九〕

第四篇 鷹魅糞倒ようみふんたう

第一六章	魔法使 <small>まはふつかひ</small>	〔一二九〇〕
第一七章	五身玉 <small>いづみたま</small>	〔一二九一〕
第一八章	毒酸 <small>どくさん</small>	〔一二九二〕
第一九章	神丹 <small>しんたん</small>	〔一二九三〕
第二〇章	山彦 <small>やまびこ</small>	〔一二九四〕

〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕  
〕

靈界物語も漸く累計四十九冊に達しました。本巻も着手日數三日間にて完成することを得ました。この時東京の某新聞紙上に天城山麓の八丁池に惡龍六百年以前より潛伏してに祟りを成すを以て法華宗の僧が退治せむと其筋へ出願したりとの記事があつたので、直に國家の一大事と考へ靈眼にて洞察するに惡龍どころか魚族一尾も居ない。只腹部に髭題目を赤斑にあらはした蠚蟪がウヨウヨして居るのみであつた。實に世の中と云ふものは妙なものである。こんな事を大本の人間の口からでも云はうものなら、それこそ大變なことになつたかも知れない。法華經の狂勢には感ずるの外はない。綾部の井上會長より左記の花句が届きました。だから御紹介しておきます。

やみにひそむ枉津の神もまつるはむ

言靈の幸月の光に

あまぎさんのほとりはつちやういけ  
天城山畔八丁池 聞説千年潜怪螭  
いづれのひかつしえんいでんがいこう  
何日了縁出崖口 月光澄徹水透迤

いよいよ本巻より初稚姫の大活動に入りました。迂餘曲折波瀾重疊の物語。現  
幽神三界に於ける宇宙の真相は本輯十二巻の上に展開さるる事となります。信者  
未信者の區別なく、愛讀あつて洪大なる神徳に浴し玉はむことを希望する次第で  
あります。ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十二年一月十六日

於伊豆湯ヶ島温泉

湯本館

王仁識

### 總説

本巻は波斯國境産土山の聖地伊祖の館より、印度國ハルナの都の大黒主を言向  
和し満天下の禍害を除き五六七の神政を地上に布かむと瑞の御靈神素盞鳴尊數多  
の宣傳使を派遣し給ふ内にも、最も有名なる女宣傳使初稚姫が未だ十七歳の花の

姿甲斐々々しく數千里の旅を續けて大業を遂行し、大神の御前に復命せむと征途に上り玉ふ途中、妖怪變化に出會し猛犬スマートに救はれ、河鹿峠を無事に越え祠の森の大神の社に參拜さるるや父空助に變化して居た妖魅は畏縮して遠く山の彼方に遁走する處まで口述してあります。又治國別宣傳使の薰陶を受けて三五教に歸順したるウラナイ教の内事取締りなりし丑寅婆アさまが、治國別命の添書を以て伊祖の館へ修業兼參拜の途中高姫に出會し、面白き問答を交換する有様は、目に見えるやうに現はされてあります。一旦改心の曙光を認められ、生田の森の神司と選まれ乍ら、東助を戀ひて、遙々産土山に來たり、東助に彈かれ自暴自棄の結果祠の森にて又もや野望を企つる改惡物語は本巻の主要點ともいふべきものです。又珍彦夫婦が神丹を文珠菩薩より與へられ、高姫の毒手を免るる處や、受付の滑稽な場面も又一讀の價値あることと信じます。

豆州湯ヶ島温泉湯本館臨時教主館において療養湯治の閒を以て口述を了りました。

大正十二年一月十九日

王仁識



# 第一篇 神示の社殿

## 第一章 地上天國（一二七五）

天地萬有一切を愛の善と信の眞に基いて、創造し玉ひし皇大神を奉齋したる宮殿の御舎を、地上の天國と云ふ。而して大神の仁慈と智慧の教を宣べ傳ふる聖場を靈國といふ。故に大本神諭にも、綾の聖地を地の高天原と名付けられたのである。

天國とは決して人間の想像する如き、宙空の世界ではない。大空に照り輝く日月星辰も皆地球を中心とし、根據として創造されたものである以上は、所謂吾人の住居する大地は靈國天國でなければならぬ。人間は其肉體を地上において發育せしめ、且其精靈をも馴化し、薰陶し、發育せしむべきものである。而して高天原の眞の密意を究むるならば最奥第一の天國も亦中間天國、下層天國も、靈國も

すべて地上に實在する事は勿論である。只形體を脱出したる人の本體即ち精靈の住居する世界を靈界と云ひ、物質的形體を有する人間の住む所を現界といふに過ぎない。故に人間は一方に高天原を藏すると共に一方に地獄を包有してゐるのである。而して靈界、現界即ち自然界の間に介在して、其精靈は善にもあらず、惡にもあらず、所謂中有界に居を定めてゐるものである。

すべての人間は、高天原に向上して靈的又は天的天人とならむが爲に、神の造り玉ひしもので、大神よりする善の徳を具有する者は、即ち人間であつて、又天人なるべきものである。要するに天人とは、人間の至粹至純なる靈身にして、人間とは、天界地獄兩方面に介在する一種の機關である。人間の天人と同様に有してゐるものは、其内分の齊しく天界の影像なることと、愛と信の徳に在る限り、人間は所謂高天原の小天國である。而して人間は天人の有せざる外分なるものを持つてゐる。其外分とは世間的影像である。人は神の善徳に住する限り、世間即ち自然的外分をして、天界の内分に隸屬せしめ、天界の制役するままならしむる時は、大神は御自身が高天原にいます如くに其人間の内分に臨ませ玉ふ。故に大

神は人間が天界的生涯の内にも、世間的生涯の中にも、現在し玉ふのである。故に神的順序ある所には必ず大神の御靈ましまさぬことはない。凡て神は順序にましますからである。此神的順序に逆らふ者は決して生き乍ら天人たることを得ないのである。

教祖の神諭に……十里四方は宮の内……と示されてあるのは、神界に於ける里數にして、至善至美至信至愛の大神のまします、最奥第一の天國たる神の御舎は殆ど想念の世界よりは、人間界の一百方里位に廣いといふ意味である。吾々人間の目にて僅かに一坪か二坪位な神社の内陣や外陣も、神界即ち想念界の徳の延長に依つて、十里四方或は數百里數千里の天國となるのである。福知舞鶴外圍ひと云うてあるのは、所謂綾の聖地に接近せる地名を假つて、現界人に分り易く示されたものであつて、決して現界的地名に特別の關係がある譯ではない。只小さき宮殿（人間の目より見て）の中でも……即ち宮の内でも神の愛と神の信に觸れ、智慧證覺の全き者は、右の如く想念の延長に仍つて、際限もなく、聖く麗しく、且廣く高く見得るものである。すべて自然界の事物を基礎として考ふる時は斯の

如き説は實に空想に等しきものの如く見ゆるは當然である。併し乍ら靈的事物の目より考ふれば、決して不思議でも、不合理でもない。靈的事象の如何なるものなるかを、能く究め得るならば、遂に其真相を掴むことが出来るのである。併し自然界の法則に従つて肉體を保ち、且肉の目を以て見ることを得ざる靈界の消息は到底大神の直接内流を受入るるに非ざれば、容易に思考し得可らざるは、已むを得ない次第である。

故に、神界の密意は靈主體從的の眞人にあらざれば、中魂下魂の人間に對し、いかに之を説明するも、容易に受け入るる能はざるは當然である。只人間は己が體内に存する内分に仍つて、自己の何者たるかを能く究めたる者に非ざれば、如何なる書籍をあさる共、如何なる智者の言を聞く共、如何に徹底したる微細なる學理に依る共、自然界を離れ得ざる以上は、容易に靈界の消息を窺ふことは出来ないものである。太古の黄金時代の人間は何事も、皆内的にして、自然界の諸事物は其結果に依つて現はれし事を悟つてゐた。夫れ故直様に大神の内流を受け、能く宇宙の真相を辨へ、一切を神に歸し、神のまにまに生涯を樂み送つたのであ

る。然るに今日は最早白銀、赤銅、黒鐵時代を通過して、世は益々外的となり、今や善もなく眞もなき暗黒無明の泥海世界となり、神に背くこと最遠く、何れも人の内分は外部に向ひ、神に反いて、地獄に臨んでゐる。それ故足許の暗黒なる地獄は直に目に付くが、空に輝く光明は之を背に負ふてゐるから、到底神の教を信ずることは出来ないのである。茲に天地の造主なる皇大神は、嚴の御靈、瑞の御靈と顯現し玉ひ、地下のみに眼を注ぎ、少しも頭上の光明を悟り得ざりし、人間の眼を轉じて、神の光明に向はしめむとして、豫言者を通じ、救ひの道を宣べ傳へたまうたのである。

斯の如く地獄に向つて内分の開けてゐる人間を高天原に向はしめたる状態を、天地が覆ると宣らせ玉ふたのである。

要するに忌憚なく言へば、高天原とは大神や天人共の住所なる靈界を指し、靈國とは神の教を傳ふる宣傳使の集まる所を言ひ、又其教を聞く所を天國又は靈國といふのである。而して天國の天人團體に入りし者は、祭祀をのみ事とし、靈國の天人は神の教を傳ふるを以て神聖なる業務となすのである。故に最勝最貴の智

慧證覺に仍つて、神教を傳ふる所を第一靈國と云ひ、又最高最妙の愛善と智慧證覺を得たる者の集まる靈場を最高天國といふのである。故に現幽一致と稱へるのである。

人間の胸中に高天原を有する時は、其天界は人間が行爲の至大なるもの、即ち全般的なるものに現はれるのみならず、其小なるもの即ち個々の行爲にも現はるべきものなるを記憶すべきである。故に『道の大原』にも、大精神の體たるや至大無外至小無内とある所以である。抑も人間の人間たる所以は、自己に具有する愛其者にある。自然の主とする所の愛は即ち其人格なりといふ事に基因するものである。何故なれば、各人主とする所の愛は、其想念及行爲の最も微細なる所にも流れ入つて之を按配し、至る所に於て、自分と相似せるものを誘出するからである。而して諸々の天界に於ては、大神に對する愛を以て第一の愛とするのである。高天原にては如何なる者も大神の如く愛せらるるものなき故である。故に高天原にては、大神を以て一切中の一切として之を愛し之を尊敬するのである。大神は全般の上にも、個々の上にも流れ入り玉ひて、之を按配し之を導いて、

大神自身の影像を其上に止めさせ玉ふを以て、大神の行きます所には悉く高天原が築かれるのである。故に天人は極めて小さき形式に於ける一個の天界であつて、其團體は之よりも大なる形式を有する天界である。而して諸團體を打つて一丸となせるものは高天原の最大形式をなすものである。

綾の聖地に於ける神の大本は大なる形式を有する高天原であつて、其教を宣傳する聖く正しき愛信の徹底したる各分所支部は、聖地に次ぐ一個の天界の團體であり又、自己の内分に天國を開きたる信徒は、小なる形式の高天原であることは勿論である。故に靈界に於けるすべての團體は、愛善の徳と信眞の光と、智慧證覺の度の如何によつて、同氣相求むる相應の理に仍り、各宗教に於ける一個の天國團體が形成され、又中有界地獄界が形成されてゐるのも、天界と同様、決して一定のものではない。され共大神は天界中有界地獄界をして一個人と見做し、之を單元として統一し玉ふ故に如何なる團體と雖も、嚴の御靈瑞の御靈の神格の中より脱出することは出来ない、又之を他所にして自由の行動を取ることとは許されないのである。

高天原の全體を統一して見る時は、一個人に類するものである。故に諸々の天人は其一切を擧げて、一個の人に類する事を知るが故に彼等は高天原を呼んで、大神人といふのである。綾の聖地を以て天地創造の大神の永久に鎮まります最奥天國の中心と覺り得る者は、死後必ず天國の住民となり得る身魂である。故に斯かる天的人間は聖地の安危と盛否を以て、吾身體と見做し、能く神界の爲に、愛と信とを捧ぐるものである。

高天原の全體を一の大神人なる單元と悟りし上は、すべての信者は其神人の個體又は肢體の一部なることを知るが故である。靈的及天的事物に關して、右の如き正當なる觀念を有せざる者は、右の事物が一個人の形式と影像とに従つて配列せられ和合せらるることを知らない。故に彼等は思ふやう、人間の外分をなせる世間的、自然的、事物即ち是人格にして、人は之なくんば人の人たる實を失ふであらうと。故に大神人の一部分たる神の信者たる者が斯の如き自愛心に捉はれて、孤立的生涯を送るに至らば、外面神に従ふ如く見ゆると雖も、其内分は全く神を愛せず、神に反き、自愛の爲の信仰にして、所謂虚偽と惡との捕虜となつたもの



である。斯の如き信仰の情態に在る者は決して神と和合し、天界と和合することは出来ない。恰も中有界の人間が、第一天國に上つて、其方向に迷ひ、一個の天人をも見ることを得ず、胸を苦め、目を眩して喜んで地獄界へ逃行く様なものである。

人間の人間たるは決して世間的物質的事物より成れる人格にあらずして、其能く眞を知り、能く善に志す力量あるに仍ることを知るべきである。此等の靈的及び天的事物は即ち人格をなす所以のものである。而して人格の上下は、其人の智性と意思との如何に仍るものである。

大本神諭に……燈臺下は眞暗がり、結構な地の高天原に引寄せられ乍ら、肉體の欲に靈を曇らせ、折角寶の山に入り乍ら、裸跣足で怪我を致して歸る者が出来るぞよ。これは心に欲と慢心とがあるからであるぞよ。云々……と示されあるを考ふる時は、折角神の救ひの綱に引かれ乍ら、其偽善の度が餘り深きため、心の眼開けず、光明赫灼たる大神人のあます方向さへも、靈的に見ることを得ず、何事もすべて外部的觀察を下し、おのが邪惡に充ちたる心より神人の言説や行爲を

批判せむとする偽善者や盲聾の多いには大神も非常に迷惑さるる所である。凡て人間は、暗冥無智なる者なることを悟り、至善至美至仁至愛至智至正なる神力に信従し、維れ命維れ従ふの善徳を積むに非ざれば、到底吾心内に天界を開き、神の光明を認むることは不可能である。吾身内に天國を啓き得ざる者は到底顯界幽界共に安樂なる生涯を送ることは出来ないのは當然である。故に現界にて同じ殿堂に集まり、神を讚美し、神を拜禮し、神の教を聽聞する、其状態を見れば、同じ五六七殿の内に行儀よく整列して居る様に見えてゐる、又物質界より見れば確實に整列してゐるのは、事實である。併し其想念界に入つて能く觀察する時は、其靈身は靈國にあるもあり、又天國の團體にあつて聽聞せるもあり拜禮せるもあり、或は中有界に座を占めて聞き居るもあり、又全く神を背にし地獄に向つてゐるものもある。故に此物語を拜聽する人々に仍つて、或は天來の福音とも聞え、神の救ひの言葉とも聞え、或は寄席の落語とも聞え、或は拙劣な浪花節とも感じ、又中有界に彷徨ひたる偽善者の耳には不謹慎なる物語にして、決して神の言葉にあらざらず、瑞月王仁の滑稽洒脱の思想が映寫して、物語となりしものの如く感じ、

冷笑侮蔑の念を起し、之に對する者もあり、或は筆録者の放逸不羈の守護神に感じて、口述者の靈が神の言葉と自ら信じ、編纂せしものの如く感ずる者もあり、或は其言を怪亂狂妄悉皆汚穢に充ちたる醜言暴語となして耳を塞ぎ逸早く逃げ歸るものもある。之は靈界に身をおいて、各人が有する團體の位地より神を拜し、且物語を聽く人の状態である。故に此物語は上魂の人には實に救世の福音なれ共、途中の鼻高や下劣なる人間の耳には最も入り難きものである。又無垢なる小兒と社會の物質欲に超越したる老人の耳には能く沁み渡り、且理解され易きものである。こは小兒と老人は其心無垢の境涯に在つて、最奥の靈國及天國と和合し相應し居るが故である。

(大正一二・一・一六 舊一一・一一・三〇 松村眞澄録)

## 第二章 大神人(一二七六)

前節に述べたる如く、靈國や天國の諸團體に籍をおいたる天人及地上の天人即ち神を能く理解せし人間の精靈は、即ち地上の天人なるを以て、人間肉體の行爲に留意することなく、其肉體を動作せしむる所の意思如何を觀察するものである。故に人間の吾長上たると吾下僕たるとを問はず、其行爲に就て善惡の批判を試むるが如き愚なことは、決してせない。天人の位地に進んだものは、其人格を以て意思に存し、決して行爲其物にあらざる事を洞察するが故である。其智性も亦人格の一部分なれ共、意思と一致して活動する時に限つて人格と見なすのである。意思は愛の情動より起り、智性は信の眞より發生するものである。故に愛のなき信仰は決して人格と見なすことは出来ない。愛は即ち第一に神を愛し、次に隣人を愛する正しき意思である。只神を信ずるのみにては到底神の愛に觸れ、靈魂の幸福を得ることは不可能である。愛は愛と和合し、智は智と和合す。神に心限りの淨き寶を奉り、或は物品を奉納するは所謂愛の發露である。神は其愛に仍つて人間に必要なものを常に與へ玉ふ。人間は其與へられたるものに仍つて生命を保ち、且人格を向上しつつあるのである。神は無形だとか、氣體だとか、無形又

は氣體にましますが故に決して現界人の如き物質を要求し玉はず、金錢物品を神に獻つて神の歡心を得むとするは迷妄の極なり、只神は信仰さへすればそれで可い、其信仰も科學的知識に仍つて認め得ない限りは、泡沫に等しきものだ。故に神を信ずるに先だち科學的原則の上に立脚して、而して後信すべきものだ……など唱ふる者は、すべて八衢人間にして、其大部分は神を背にし光明を恐れ、地獄に向つて内底の開ける妖怪である。

靈國天國の天人が天界を見て一個の形式となすのは、其全般に行わたつてのことではない。如何なる證覺の開けた天人の眼界と雖も、高天原の全般を測り知ることとは出来ない。されど天人は數百又は數千の天人より成れる團體を遠隔の位地より見て、人間的形式をなせる一團と感ずる事がある位なものである。故に未だ中有界に迷へる八衢人間の分際としては到底、天人の善徳や信眞や證覺に及ばないことは無論である。

斯の如く如何なる天人と雖も、高天原の全體を見極め、神の經綸を熟知し、且他の諸團體を詳しく見聞し能はざる位のものであるに、自然界の我利我欲にひた

り、自愛と世間愛のみを以て最善の道德律となし、善人面をさげ、漸く神の方向を認めたる位の八衢人間が到底神の意思の測知し得らるべき道理はないのである。天國の全般を總稱して大神人と神界にては稱へらるる理由は、天界の形式は凡て一個人として統御さるるからである。故に地の高天原は一個の大神人であり、其高天原を代表して愛善の徳と信眞の光を照らし、暗に迷へる人間に智慧と證覺を與へむとする靈界の擔當者は、即ち大神人である。神人の大本が大本の神人か：と云ふべき程のものである。之は現幽相應の理より見れば、決して架空の言でもない。又一般の信徒は所謂一個の大神人の體に有する心臓、肺臓、頭部、腰部、其他四肢の末端に至る迄の各個體である。

天界を大神は斯の如く一個人として、即ち單元として之を統御し玉ふのである。故に人間は宇宙の縮圖といひ、小天地と云ひ、天地經綸の司宰者と云ふ。人間の身體は、其全分にあつても、其個體に在つても、千態萬様の事物より組織されたるは、人の能く知る所である。即ち全分より見れば、肢節あり、氣管あり、臟腑あり、個體の上より觀れば、纖維あり、神經あり、血管あり、かくて肢體の内に

肢體あり、部分の中に部分あれ共、一個人として活動する時は、單元として活動するものである。故に個體たる各信者は一個の單元體たる大神人の心を以て心となし、地上に天國を建設し、地獄界の片影をも留めざらしむる様、努力すべきものである。大神が高天原を統御し玉ふも亦之と同様である。故に地上の高天原たる綾の聖地には、大神の神格にみたされたる聖靈が豫言者に來つて、神の神格に仍る愛善の徳を示し、信眞の光を照らし、智慧證覺を與へて、地上の蒼生をして地的天人たらしめ、且又地上一切をして天國ならしめ、靈界に入りては、凡ての人を天國の歡喜と悅樂に永住せしめむが爲に努力せしめ玉ふたのである。其單元なる神人を一個人の全般と見做し、各宣傳使信者は個體となつて、上下和合し、賢愚一致して此大神業に参加すべき使命を有つてゐるのである。

斯の如くして圓滿なる團體の形式を造り得る時は即ち全般は部分の如く、部分全般の如くにて其兩者の相違點は、只其分量の上のみに存するばかりである。今日の聖地に於ける状態は、すべて個々分立して活躍し、全體は分體と和合せむとしてなす能はず、分體たる個人は各自の自然的觀察を基點として、思ひ思ひに

光に反き愛に遠ざかり、最も秀れたる者は中有界に迷ひ、劣れる者は地獄の團體に向つて秋波を送る者のみである。故に此等の人間は大神の聖場、地の高天原を汚す所の惡魔の影像であり、且個人としては偽善者である。偽善者なる者は時として善を語り、又善を教へ、善を行へども、何事につけても自己の愛を先にするものである。大神の御神格及高天原の状態、愛の徳及信の道理竝に高天原の將來などに付いて、人に語り傳ふること、最深く、天人の如く、聖人君子の如く、偶には見ゆるものあり、又其口にする所を心言行一致と云つて、行爲に示さむとし、能く其行ひを飾つて、人の模範とならむとする者あれ共、其人間が實際に思惟する所のものは必ずや人に知られむ爲、或は褒められむ爲にする者が多い。此等は未だ偽善者の中でも今日の處では、餘程上等の部分にして、俗眼より見れば眞に神を理解し、言心行の一致の清き信者と見得る者である。次に今綾の聖地に於ける最上等の部分に屬する人の心性を靈眼によつて即ち内的觀察に仍つて見る時は、未だ天界の消息にも詳ならず、其自愛及世間愛と雖も、未だ徹底せず、天人の存在を半信半疑の態度を以て批判し、或は死後の生涯などに就て語る共、只



眞理しんりに明あかき哲人てつじんと人ひとに見みられむが爲ために、眞實しんじつに吾心わがこころに攝受せつじゆせざる所ところを、能よく知しれるが如ごとくに語り傳つたふる位くらゐが上等じやうじゆうの部分ぶぶんである。而しかして口くちには極きはめて立派りつぱなことを言いつても、其手足そのてあしを動うごかし、額ひたひに汗あせし、以もつて神かみに對たいする眞心まごころを實行じつかうせない者ものが大だい多數たすうである。斯この如ごとき人ひとは神かみの教をしへを傳つたへ、又または神かみに奉仕ほうしする祭官さいくわんなどは、俗事ぞくじに鞅掌おつしやうし或あるひは田園でんえんを耕たがやし、肥料ひれうなどの汚穢物をゑぶつを手てにするは、所謂いはゆる神かみを汚けがすものと誤ごか解いしてゐる八衢人やちまたにんげん間まや、或あるひは怠惰たいだの爲ため、筋肉勞働きんにくらうどうを厭いとうて、宣傳使せんでんし又または祭官さいくわんの美び名いにかくるる横着者わうちやくものである。此等これらは何れも神かみの前まへにあつて、天人てんにんの一人ひとりをも靈的れいてきに認みとむることなく、又また體的たいてきにも感かんずる能あたはず、遂つひには神佛しんぶつを種たねにして、自利じりを貪むさぼる地獄道ぢごくだうの餓鬼がきとなつてゐる者ものである。かくの如ごとき心性しんせいを以もつて神かみの教をしへを説とき、神かみに近ちかく奉仕ほうしするは、全まく神かみを冒瀆ぼうとくする罪人ざいにんである。

斯かくの如ごとき人間にんげんは神かみの言葉ことばを賣藥ばいやくの能書位のうがきくらゐに心得こころえ、何事なにごとをも信しんぜず、又また自己じこを外ほかにして徳とくを行おこなふの念ねんなく、人ひとの見みざる所ところに於おいて善ぜんをなすことを忌いみ、惡あくを人ひとの前まへに祕ひし、善ぜんは如何いかなる小ちひさきことと雖いへども、必かならず人ひとの前まへに現あらはさむことを願ねがふ。

故ゆゑに彼等かれらがもし萬一まんいち善ぜんなる行おこなひをなしたりとせば、それは皆みな自己じこの爲ためになす所ところあ

るによる。又他人の爲に善を行ふことあれば、それは他人及世間より聖人或は仁者と見られむことを願ふに過ぎない。斯の如き人のなすことはすべて自愛の爲である。自愛は所謂地獄の愛である。

心ならずも五六七殿に此物語を聞きに来てゐる偽善者も偶にはあるやうだ。それは折角晝夜艱苦して口述編纂した『靈界物語』を毎夜捧讀して、靈界の消息を、迷へる人々に説き示さむとする口述者の意思を無視したと思はれてはならないから……といふ位な考へで、厭々聞きに来る人もあるのである。決して左様な御氣遣は無用である。何程内底の天に向つて閉塞したる人々の身魂に流入し或は傳達せむとするも、到底駄目である。故にどうしても此物語の氣にくはぬ人は、かかる偽善的行爲を止めて、所主の愛に仍り、身魂相應の研究を自由にされむことを希望する。決して物語の聽聞や購讀を強るものではない。

經の神諭は拜聽すると、涙が出る様だが、緯の物語を聞くと少しも眞味な所がなく、可笑しくなつてドン・キホーテ式の物語か又は寄席氣分のやうだと云つてゐる立派な人格者があるさうだ。之れも身魂相應の理に仍るものだから、如何と

もすることは出来ない。併し乍ら悲しみの極は喜びであり、喜びの極は悲しみであることは自然界學者もよく稱ふる所である。而して悲しみは天國を閉ぢ歡びは天國を開くものである。人間が他愛もなく笑ふ時は決して悲しみの時ではない、面白可笑しく歡喜に充ちた時である。神は歡喜を以て生命となし、愛の中に存在し玉ふものである。赤子が泣いた時は其母親が慌てて乳を吞ませ、其子の笑顔を見て喜ぶのは即ち愛である。吾子を泣かせ、又は悲しましめて快しと思ふ親はない。神の心はすべて一瞬の間も、人間を歡喜にみたしすべての事業を樂しんで營ましめむとし玉ふものである。此物語が眞面目を缺いて笑はせるのが不快に感ずる人あらば、それは所謂精神上に缺陷のある人であつて、癡狂者か或は偽善者である。先代萩の千松の言つたやうに……お腹がすいてもひもじうない……といふ虚偽虚飾の態度である。かくの如き考へを捨てざる限り、人は何程神の前に禮拜し、神を讚美し、愛を説くと雖も、到底天國に入ることは出来ない。努めて地獄の門に押入らむとする癡呆者である。

凡て綾の聖地に、神の恵に仍つて引つけられたる人、及此教に信従する各地の

信者は、すべて大神の神格の中にあるものである。然るに燈臺下暗しとか云つて、之を認め得ざるものは天人（人間と同様の形態）の人格を保つことは出来ないものである。富士へ来て富士を尋ねつ富士詣で……と云ふ様に、富士山の中へ入つて了へば、他に秀れて尊き靈山たることを知らず、普通の山と見ゆるものである。併し遠くへだてて之を望む時は、實に其清き姿は雲表に屹立し、鮮嶽清山を壓して立てる其崇高と偉大さを見ることを得る様に、却て遠く道をはなれ、教に入らざりし者が、色眼鏡を外して見る時は、其概要を知り全般を伺ふことが出来る様に、却て未だ一言も教を聞かず、一步も圈内に足をふみ入れざる人の方が其真相を知る者である。又大神は時によつて一個の天人と天國にては現じ玉ひ、現界即ち地の高天原にては一個の神人と現じ玉ふ。されど斯の如く内分の塞がった人間は神人に直接面接し且其教を聴き乍ら、之を普通の凡夫とみなし、或は自分に相當の人格者又は少しく秀れたる者となし、或は自分より劣りし者となして、之を遇するものである。かくの如き人間は八衢所か、已に地獄の大門に向つて、爪先を向けてゐるものである。眞の智慧と證覺とを缺いた者は、總て地獄に没入する

より道はない。故にかかる人間は天人又は神人の目より見る時は、何程形態は立派に飾り立て、何程人品骨格はよく見えても、殆ど其内分は人間の相好が備はつてゐないのである。彼等は罪惡と虚偽とに居るを以て、従つて神の智慧と證覺に反いてゐる。恰も妖怪の如く餓鬼の如く、其醜状目も當てられぬばかりである。斯の如き肉體の人間を稱して、神界にては生命といはず、之を靈的死者と稱ふるのである。又は娑婆亡者或は我利我利亡者ともいふ。

斯の如き大神の愛の徳に離れたる者は生命なるものはない。而して大神の愛又は神格に離れた時は、何事もなし能はざるものである。故に大本神諭にも……神の守護と許しがなければ、何事も成就せぬぞよ。九分九厘いつた所でクレンとかへるぞよ。人間がこれ程善はないと思ふて致して居ることが、神の許しなきものは皆惡になるぞよ。九分九厘で手の掌がかへり、アフィンと致すぞよ……と示されてあるのを伺ひ奉つても、此間の消息が分るであらう。人間は自然界の自愛に仍つて、或程度までは妖怪的に、情性的に出來得るものだが、決して有終の美をなすことは出來ない、今日自愛と世間愛より成れる、すべての銀行會社及其他の諸

團體の實状を見れば、何れも最初の所期に反し、其内部には、魑魅魍魎の徘徊跳梁して、妖怪變化の巢窟となり、目もあてられぬ醜状を包藏してゐる。そして強食弱肉優勝劣敗の地獄道が、遺憾なく現實してゐるではないか。

現代に於ても心の直なる者の胸中に見る所の神は、太古の人の形なれ共、自得提の智慧及罪惡の生涯に在つて天界よりの内流を裁斷したる者は斯の如き本然の所證を滅却し了せるものである。斯かる盲目者は見る可らざる神を見むとし、又罪惡の生涯にて所證を滅却せし者は、神を決して求めない者である。故に現代の人間は神にすぎる者と雖も、すべて天界よりの内流を裁斷したる者多き故に、見る可らざる神を見むとし、又物質欲のみに齷齪して、本然の所證を滅却した地獄的人間は、神の存在を認めず、又神を大に嫌ふものである。すべて天界よりして先づ人間に流入する所の神格其者は實に此本來の所證である。何となれば、人の生れたるは、現界の爲にあらず、其目的は天國の團體を圓滿ならしむる爲である。故に何人も神格の概念なくしては天界に入ることとは出来ないのである。

高天原及天國靈國の團體を成す所の神格の何者たるを知らざる者は、高天原の

第一關門にさへも上ることを得ない。かくの如き外分のみ開けたる人間がもし誤つて天國の關門に近付かむとすれば、一種の反抗力と強き嫌惡の情を感じざるものである。そは天界を攝受すべき彼の内分が未だ高天原の形式中に入らざるを以て、すべての關門が閉鎖さるるに仍るからである。もし強て此關門を突破し、高天原に進み入らむとすれば、其内分はますます固く閉ざされて如何ともす可らざるに至るものである。信者の中には無理に地の高天原に近付き來り、神に近く仕へ親しく教を聞いてからますます其内分が固く閉ざされて、心身混惑し、信仰以前に劣りし精神状態となり、且又其行ひの上に非常な地獄的活動の現はるるものがあるのは此理に基くのである。大神を否み、大神の神格に充されたる神人を信ぜざる者は、凡てかくの如き運命に陥るものである。人間の中にある天界の生涯とは即ち神の眞に従ひて、棲息せるものなることを知悉せる精神状態をいふのである。惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・一六 舊一一・一一・三〇 松村眞澄録)

### 第三章 地鎮祭（一二七七）

今を去る事三十五萬年の昔、波斯の國ウブスナ山脈の頂上に地上の天國を建設し、神素盞鳴大神はここに神臨し玉ひて、三五教を開かせ玉ひ、數多の宣傳使を養成して地上の國土に群棲する數多の人間に愛善の徳と信眞の光を與へ、地上に天國を建設し玉はむとし、八岐大蛇や醜狐、邪鬼の身魂を清め天地の間には一點の虚偽もなく、罪惡もなきミロクの世を開かむと尊き御身を地上に降し、肉體的活動を續け玉ひしこそ、實に尊さの限りである。此時印度の國ハルナの都に八岐大蛇の惡靈に其身魂を占領されたるバラモン教の神司大黒主は數多の宣傳使を從へ、右手に劍を持ち左手にコーランを携へて、大自在天大國彦命の教を普く天下に宣傳し無理無體に劍を以て其道に歸順せしめむとなしつつあつた。さうしてバラモン教の信條は生を輕んじ、死を重んじ、現肉體を苦しめ損ひ破り出血なさしめて之を修行の蘊奥となす所の暗迷非道の邪教である。數多の人間は此教に苦しめられ、阿鼻叫喚の聲、山野に滿ち其慘狀聞くに堪へざれば、至仁至愛の大神は



其神格の一部を地上に降し神素盞鳴尊と現はれて中有界や地獄界に迷へる精靈及び人間を救ふべく、此處に地上の靈國、天國を築かせ玉ふたのである。之に加ふるにコーカス山を始め土耳其のエルサレム、及び自轉倒島の綾の聖地や天教山や其外各地の靈山に靈國を開き、宣傳使を降して之が任に當らしめ給うた。玉國別は大神の命を奉じ宣傳使として道公、伊太公、純公の三人の從者を従へ、ウブスナ山の聖場を後にして河鹿峠の峻坂を越え、懷谷に暴風を防ぐ折しも山猿の群に襲はれて目を傷つけ漸く祠の森に辿り着き、ここに治國別の宣傳使一行と出會し、眼病の平癒するまで特別の使命によつて大神の御舎を建設する事となつた。祠の森には杉、檜、松其他立派の用材が惟神的に立竝んでゐた。此河鹿峠は常に風烈しく、且つ山一面の岩石にて大木は育たず、僅に二三尺ばかりの瘦せこけた古木が岩石の間を點綴するに過ぎない。然るに此河鹿山の一部なる祠の森は谷と谷との懷に當り、あまり烈風の害もなく地味亦比較的肥たれば、斯くも樹木の繁茂して相當に廣き森林をなしてゐたのである。

國照姫の神勅により、愈大神の神殿を建設する事となり、玉國別總監督の許に

五十子姫、今子姫、道公、純公、伊太公及びバラモンの軍人なりしイル、イク、サール、ヨル、テル、ハル及び晴公、珍彦、静子、楓等晝夜の別なく忌鋤忌斧を以て木を伐り倒し、土ひき均し、地盤を固めて愈神殿建築の準備に着手する事となつた。此時浮木の森の陣營にありしランチ將軍、片彦將軍以下は何れも三五教に歸順し、數多の軍卒は四方八方に散亂し此邊りは漸く平和に歸したれば、其國人は是全く三五の神の恵みと打喜び其神恩に報ずるためとて祠の森の神殿建設に對し金額を獻じ、或は獻勞をなすもの四方より集まり來り、實に淋しき此谷間は鋤の音、忌鋤、忌斧の音、竝びに石搗歌や人の歡び聲にて充され、猪、猿等の獸は遠く逃げ去りて影をも留めなくなつた。

道公は土木の主任者となり工事監督の任に當つた。然し玉國別が總監督たる事は前述の通りである。石搗の歌は盛に木精に響き來る。その歌、

高天原に現れませる 皇大神の御言もて  
神素盞鳴の大神は ウブスナ山の聖場に

齋苑いその館やかたを建たて玉たまひ  
普あまねく世よびと人を救すくはむと

珍うづの教をしへを遠をちこち近ちかに  
開ひらかせ玉たまふぞ有ありがた難たき

玉國たまくに別の宣せんでん傳し使し  
神かみの御言みことを蒙かうむりて

寒さむけき冬ふゆの初はつぞら空そらを  
沐もくうしつぷう雨う櫛い風かぜ厭いとひなく

河鹿かじかたうげ峠とうげに來きて見みれば  
聞ききしにまさる荒あらい風かぜ

一ひと歩あしさへも進すすみ得えず  
懷ふところ谷だにに身みを寄よせて

風かぜの過すぐるを待まつ間うちに  
思おもひもかけぬ山やま猿ざるに

右みぎの眼まなこを破やぶられて  
苦くるしみ玉たまふ悲かなしさよ

尊たふとき神かみの御使みつかひが  
斯かかる艱なやみに會あひますは

全まつた神かみの戒いましめか  
但ただしは何なにかのお仕組しぐみか

互たがひに顔かほを見合みあはせて  
神かみの心こころを量はかりかね

中ちゆう有ゆうに迷まよふ折をりもあれ  
治國はるくに別の宣せんでん傳し使し

現あらはれまして宣のらすやう  
玉國たまくに別の宣せんでん傳し使し

貴方あなたは神かみのお仕組しぐみで  
艱なやみに遭あはせ玉たまひなむ

心を安けく平らけく

思召されと宣りつつも

慰め玉ふ時もあれ

五十子の姫や今子姫

遙々ここに来りまし

國照姫の神懸

傳へ玉ひし言の葉は

祠の森に皇神の

瑞の御舎仕へまし

高天原に宮柱

太しく建てて世の人を

普く救ひ曲神の

進路を防ぎまつれよと

其神言を畏みて

上津岩根に搗固め

下津岩根に搗こらし

石切り開き土均し

信徒どもが寄り合ひて

暑さ寒さも打忘れ

身もたなしらに仕へ行く

此有様は天國の

天人どもも歡ぎつつ

業を喜ぶ如くなり

神世の元に還りなば

天は高しと云ふけれど

天は極めて近くなる

天地和合のミロクの世

神人共に楽しみて

常世の春を迎へなむ  
早く身魂を研けよと

宣らせ玉ひし三五の  
嚴の靈の御神勅

今日のあたりに現はれて  
實にも尊き限りなり

ア、諸人よ諸人よ  
此世に人と生れ來て

尊き神の神業に  
汗をたらしして仕ふるは

これに過ぎたる功德なし  
生きては地上の神となり

死しては清き天界の  
珍の團體に加はりて

至喜と至樂の生涯を  
樂しむ身魂となりぬべし

思へば思へば有難や  
此地の上に住むものは

數限りなくあるとて  
神の形に作られて

神に代りて神業を  
勤むる人と生れたる

吾等は實にも萬物の  
靈長なりと喜びて

誠の神をよく愛し  
善の徳をば蓄積し

皇大神の神格を  
充して下りまします

神素盞鳴大神を

救ひの神と慕ひつつ

誠一つを盡すべし

打てよ打て打てよく打てよ

下津岩根の底までも

龍宮の釜の割れる迄

地獄の橋の落ちるまで

喜び勇む鬨の聲

高天原の天國の

各團體によく響き

百の天人喜びて

此石搗を完全に

仕へまつらむ其爲めに

處狭きまで降りまし

天地神人和合して

此神業に仕へつつ

神の心に叶はなむ

あゝ惟神々々

御魂幸ひましませよ

と音頭をとり、ドンドンと廣き敷地を四方より搗き始めたり。

河鹿山から祠の森を見れば  
ヨイトシヨ  
ヨイトシヨ

すめおほかみ 皇大神の御舎を  
みあらか ドツコイシヨ ドツコイシヨ

ヨイトサ ヨイトサ 誠まことの人ひとが集あつまつて

あせ 汗あせを流ながして御用ごようする  
ヨイトセ ヨイトセ

ハア、ヨイトセー ヨーイヤナー

おほくろぬし 大黒主おほくろぬしの神かみさまは  
ヨイトセ ヨイトセ

ツキ 印度ツキの都みやこに坐ましまして  
バラモン教けうの大棟梁だいてうりやう

ヨイトサ、ヨイトセ ヨイトサ、ヨイトシヨ

おにくもひめ 鬼雲姫おにくもひめの奥おくさまを  
愛憎あいそもなしに追おひ出だして

ドツコイシヨ ドツコイシヨ 天女てんによのやう様な石生能姫いそのひめ

そのほか 其外そのほか數多あまたのナイスをば  
ヨイトシヨ、ヨイトセ

あさ 朝あさから晩ばんまで侍はべらせて  
飲のめよ歌うたへと散財さんざいし

ウントコシヨ、ドツコイシヨ 人ひとの難儀なんぎは、うわの空そら

しちせんよこく 七千餘國しちせんよこくの月つきの國くに  
ヨイトセ ヨイトセ

あびけうくわん 阿鼻叫喚あびけうくわんの聲こゑに充みち  
しゆら 修羅しゆらの巷ちまたとなつて來きた

ヨイトセ ヨイトセ 此様な事が十年も

續いたならば世の中は ヤットコセー ヤットコセー

サツパリ暗になるだらう 如何したらよからうかと思ふたら

ア、ウントコシヨ、ドツコイシヨ 天道さまは吾々を

決して見捨て玉はない ドツコイシヨ ドツコイシヨ

イソの館に天國の 姿を寫して神柱

ウントコシヨ、ドツコイシヨ 救ひの神と現れませる

神素盞鳴の大神の ヤットコセ、ドツコイセ

仁慈無限の神心に 遣はし玉ふ宣傳使

ヨイトサ、ヨイトサ 天地に塞がる村雲も

之にてサツパリ晴れるだる ドツコイシヨ ドツコイシヨ

バラモン教に仕へたる 吾等は神の恵みにて

ドツコイシヨ ドツコイシヨ 三五教に助けられ

祠の森の御普請に ヤットコセー ヤットコセー



使つかうて頂いただく嬉うれしさよ 使つかうて貰もらふた樂たのしさよ

ア、ドッコイシヨ ドッコイシヨ ヨイトセー ヨイトセー

ヨイヤサー ヨイヤサー 打うてよ打うて打うてドンドン打うてよ

地獄ぢごくの釜かまの割われるまで 龍宮りゅうぐうの城しろが揺ゆるぐまで

ドッコイシヨ ドッコイシヨ ヨイトセー ヨイトセー

と一生懸命いっしやうけんめいにバラモン派はの連中れんちゆうが躍起やくきとなつて骨身ほねみを惜おしまらず石搗いしつきに活動くわつどうした。

漸やうやくにして三日三夜みつかみよさを経て基礎工事きそこうじは全まく完結くわんけつを告つげた。

之これより一同いちどうは石搗いしつきの祝いはひとして、四方よもの人々ひとびとより神恩しんおんの感謝かんしゃを兼かね、祝いはひとして奉たてまつりたる酒さけやパン其外珍そのほかめずらしき果物くだものを處狭ところせき迄敷までしき竝ならべ祝宴しゆくえんを開ひらき神恩しんおんを感謝かんしゃしたりける。

(大正一二・一・一六 舊一一・一一・三〇 北村隆光録)

第四章 人情（一二七八）

石搗は漸く無事に済んで地鎮祭も終り、直會の宴に移つた。今日は玉國別の許しを得てさしも酒豪のイル、イク、サール、テル、ハル、ヨルのバラモン組は天にも昇るやうな心地で歌を唄ひ、石などをケンケンと叩きならし、堤を切らして踊り狂ふた。何人も酒に酔ひ潰れた時は小供のやうになるものである。又平素から心にもつて居た不平は残らず喋るものである。

イル「おい、イク、サール何うだ。清春山に居つた時は、朝から晩迄甘い酒を鱈腹呑んで、新來のお客さま伊太公さま迄敵味方の障壁をとつて優遇したぢやないか。それに馬鹿らしい三五教に歸順してから今日迄一滴も呑ましちや貰筈、本當に淋しくて、矢張元のバラモン教の方が餘程よいと思つたよ。貴様等が何時迄もこんな所に引いて【けつ】かるものだから、俺も仕方なしにひつ付いて居たのだ。本當にここの大將はケチン坊だからな。なんだい道公なんて偉さうに監督面を提げやがつて、俺はあの【しやつ】面を見てもむかつくのだ。エーン」

と副守が發動して本音を吐き出した。

イクはイルが大きな聲で不平を云ふて管をまくので道公の監督に聞かれては大變と、一生懸命に左右の手で自分の耳を押へて居る。そしてイルの耳許に口を寄せ、

イク「オイ兄弟、そんな大きな聲で不平を云ふものぢやない。勿體ないぞ。道公の耳へ入つたらどうするのぢや」

イル「ナ、何だ、何が勿體ないのだい。道公の耳へ入るのが、それ程われや恐ろしいのか。何だその手は耳を押へやがつて」

イク「それだつて、餘り貴様が大きな聲で悪口を吐すものだから、監督の耳に入らないやうに「つめ」をして居るのだ」

イル「何さらしやがるのだ。馬鹿だな、耳を押へて鈴を盗むやうな事をしたつて何になる。このイルの仰有る事は、何程金挺聾でも直ぐ耳に「イル」やうに云つて居るのだ。骨と皮との瘦馬を河鹿峠を引いて通るやうに、へエへエハイハイと盲従する奴は、それこそ氣骨のない章魚人間だ。このイルはそんな卑怯な事は

なさらぬぞ。も少し大きな聲で不平を云ふのぢや。否大に怨言非辭を連發するの  
だ。のうサール、貴様もサール者だから、きつと俺と同感だらう』  
サール『馬鹿云ふな、この目出度い地鎮祭に結構な酒を頂きやがって何をグツグ  
ツ云ふのだ。ちと心得ぬかい』

イル『ナ、何が目出度いのだ。何がそれ程結構なのだ。よく考へて見、清春山  
は破壊され、浮木の森の陣營はメチャ、クチャにされ、何うして吾々バラモン勇  
士の顔が立つか、それに何ぞや三五教の神を祭るお宮のお手傳ひをさして貰ひ、  
嬉しさうに嫌でもない酒を強られて何が有難いのだ。勿體ないのだ。フゲタが悪  
いぢやないか、敵に兜をぬいで敵の馳走を頂き、感謝の涙をこぼすやうな者は人  
間ぢやないぞ。俺もかうして表面歸順して居るものの、心の底から貴様のやうに  
歸順して居るのぢやない。かうして大勢の中に紛れ込み、様子を探つた上、大に  
手柄をせうと思ふて居たのだ。白夷、叔齊は首陽の蕨を食つて周の粟を喰はず生  
きて居たぢやないか。夫れだけの氣骨が無くてバラモンの武士と云はれるか。エー

ン』

サール「アハ、ハ、ハ、それ程三五教の飲食が氣に入らぬのなら、なぜ前後も分らぬ所迄酒に喰ひ酔ふたのだ。貴様はいつも悪酒だから困つたものだ。ちと賤まぬと、俺達迄が痛くない腹をさぐられては詰らない。俺達は、貴様のやうな二股武士ぢやない、歸順したと云ふたら心の底から歸順して居るのだ」

イル「俺だつて、松彦や治國別には心の底から歸順したのだ。玉國別や道公で、あんな宣傳使に歸順したのぢやない。第一それが俺は氣に喰はないのだ。よく考えて見よ、天下の宣傳使ともあらうものが、四つ手に目玉を引つかかれるやうで何處に神徳があるか、俺はあの玉國別の面を見るとムツとするのだ。治國別さまのやうな宣傳使なら何程バラモン教の俺だつて歸順するのだけれどな」

道公は、三人が隅の方に片寄り大きな聲で囀つて居るので、喧嘩ぢやないか、もし喧嘩なら仲裁して目出度う納めねばならぬ、肝腎の地鎮祭にケチを付けられでは耐らないと、三人の前にホ口酔機嫌でヒヨロヒヨロと進み寄り、

道公「おいイル、イク、サール、何を夫程喧しう云つて居るのだ。何ぞ面白い話でもあるのか」

イク「ハイ、面白い事があるのですよ。このイルの奴たうとう本音を吹きやがつて仕様もない事を云ふのです」

イル「コレヤ　コレヤ　イク、幾何酒に酔ふても大事の事を云ふてはいけないよ。俺が玉國別が嫌になつた事や、この普請の氣に入らぬ事や、矢張バラモン教の方が結構だと云つた事を決して道公の監督に云つてはならないぞ。そこが友達の交誼だからな」

道公「アハ、、、、や　イルさま、たつて聞かうとは云ひませぬよ。併し皆分りましたからな」

イク「それ見る、イルの奴矢張りお神酒の神徳により、腹の中のゴモクを薩張り吐き出されよつたな。もし道公さま、どうぞイルが何を云つても、あいつは副守が云つて居るのですから聞き流してやつて下さいませ」

サール「道公の監督さま、イルはこんな奴です。併し比較的正直者ですから、玉國別様にはどうぞ仰有らないやうにして許してやつて下さいませ。本當に仕方のない奴でムいます。ウンウンガー、ア、酔ふた酔ふた、ほんとに結構なお神酒を

頂戴致しまして本守護神は申すに及ばず、正、副守護神迄恐悦至極に存じます」  
道公「ヤア三人共心配するな。酒酔の云ふ事を取りあげるやうな俺も馬鹿ぢやないからな」

イル「成程、それ聞いて俺も道公さまが好きになつた。こんな氣の利いた家來をもつて居る玉國別さまも好きになつた。其杯を一つ僕にさして下さい。今日はお神酒に酔つてすつかり腹の中の「ごもく」を吐き出しました。決してイルの肉體であんな事を云つたのぢやありません。腹の中に居つた大黒主の眷族が囁いたのですから、私は本當に迷惑ですよ」  
道公「それやさうだらう。まあ心配したまふな。サア一杯いかう」  
と道公は心よく、イル、イク、サールに杯を與へ、自らついでやり、自分も其處に安坐をかいいて歌を歌ひながら面白をかしく酒を引つかけて居る。  
イルは「兄貴まア一杯」と道公に杯をさし唄ひ出した。

イル「三五教の道公さまが

朝から晩迄ポンポンと

拍手かしはでうつのはよけれども　ヨイトサ、ヨイトサ、  
このイルさまを捉とらまへて　ポンポン云いふのこまにや困こまります  
ヨイトサ　ヨイトサぢや

アハ、ハ、ハ、　まア一杯いっぱい僕ぼくについでくれたまへ、　なア道公みちこうさま、  
云いつて、よく覺おほえて居ゐるだらう　酒醉さけよひ本性ほんしやう違たがはずと

道公みちこうは歌うたふ、

道公みちこうがポンポンと　お前まへに云いふたのは譯わけがある  
朝あさから晚ばん迄酒までさけをのむ　お前まへを瓢箪ひくべと思おもた故ゆゑ  
そして又またお前まへは面つらの皮かは　太鼓たいこのやうに厚あつうして  
サツパリ腹はらが空から故ゆゑに　太鼓たいこと思おもうてポンポンと  
叩たたいて見みたのだイルさまよ　俺おれに怒おこつちや見當あて違ちがひ  
俺おれは役目やくめでポンポンと　石搗いしづきしなくちやならないで



合圖あひづをしたのだと思おもふて呉くれ　　ヨイトセ　　ヨイトセ  
ヤツトコセ、ヨウイヤナ　　アレワイセ、コレワイセ  
サアサ、ヨーイトセㄱ

イク、サールは手てを拍うち、  
イクㄱ ヤア　　ポンポンだ、甘いうま甘いうま、ポンポンながらカンカン乍ながら、このイクさ  
まがひと一つうた唄うたつて見みませう。エヘン、オイ、イルちつと手てを拍うつて噓はして呉くれ、噓は  
がまづいと歌うたが全まくいかぬからなㄱ  
イルㄱ ヨシ噓はやしてやらう、サア云いふたり云いふたりㄱ

イクㄱ 祠ほこりの森もりの神かみさまは　　梵ぼん天てん帝たい釋しやく自くじ在ざい天てん

大國おほくに彦ひこと思おもふたら　　サツパリ當あてが外はれよつて

大國おほくに治ちはる立たち神かみ様さまだ　　今いま迄まで俺おれはバラモンの

神かみ程ほど偉えらい奴やつは無ないと　　思おもふて居あたのにこれや何なんだ

アテが外れて三五教の

いやな神様を喜んで

拜まにやならない羽目となり

不性無精に朝夕に

信者らしく見せかけて

今迄来たのが偽善者の

其行ひと知った故

胸に手を當て考へた

揚句の果は三五教の

教は誠と知った故

心の悩みも晴れ渡り

今は全く三五の

神を信ずる身となつた

ほんとに心の持ちやうで

どうでもなるのが人の身だ

人は神の子神の宮

天地經綸の主宰者と

教へられたる其時は

何だか怪體の事を云ふ

慢心じみた教だと

心に蔑み居つたれど

矢張神は嘘つかぬ

バラモン教では吾々を

塵や芥の固りの

より損ひのよに云ふけれど

矢張人は神の子だ

これを思へば飲む酒も

一入味がよいやうだ

今日こんにちの石搗いしつきお祝いはひに ひとつさりお酒さけを頂戴ちやうだいし

魂たまは浮うかれて天國てんごくの 御園みそのに遊あそぶ思おもひなり

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながら 御靈みたまの恩賴おんゆを慎つつしみて

茲ここに感謝かんしゃし奉たてまつる サア一杯いっぱいいきませう

斯かく四人よにんは一團いちだんとなりて酒汲さけくみ交かはして居ある。一方いっぱうには又またバラモン組ぐみのヨル、ハ  
ル、テルの三人三巴さんにんみつどもゑとなつて跣坐あぐらをかき、管くだを捲まいて居ある。

ヨル「オイ、あのイルを見みよ、彼奴あいつは最前さいぜんから結構けつこうな酒さけに喰くらひ酔よひ、しようもない  
腹はらの中なかの「ごもくた」をさらけ出したぢやないか、彼奴あいつはいつも酒さけくらひやがる  
と何なにも彼かもさらけ出しやがるのだ。何か怪體けたいなものが憑ついて居あるのだよ」

テル「さうだな、可哀かあいさうなものだ。彼は村むらでも怠惰なまけもの者もので仕事しごとが嫌きらひなのだから  
仕方しかたがない。いつも檻褸ぼろを下さげやがつて、人ひとの門口かどぐちに立たち酒さけでも呑のんで居あるやうも  
のなら、汚きたない風ふうをして坐すわり込こむのだから誰たれしも迷惑めいわくして、酒さけを呑のましてやり、少すこ  
しばかり金かねをやつて歸いなしてやるのだ。其それが今度こんどの戦争せんそうで安やすい金かねで雇やとはれた雇兵やとひへいだ。

元來ぐわんらいがノラクものラ者の成上なりあがりだから、一度いちど憐れあはみをかけると云いふと好よい氣きになり、メダレみを見て仕方しかたが無いなものだ。道公みちこうさまがよい氣きであんな奴やつと杯さかづきの取とり交かはしをするなんて餘あまりぢやないか、俺おれにだつて杯さかづきの一杯いっぱい位くらゐさして呉くれたつて損そんはあるまいに、あんな奴やつより下したに見みられちや約つまらないぢやないか」

ハル「オイ、テル、貴様きさまは氣きをつけないと額際ひたひぎわに曇くもりがかかつてゐるぞ。そこが曇くもつて居ゐるのは貴様きさまの未來みらいに取り不祥ふしやうなる事ことが來くるのを教をしへて居ゐるのだ。つまり死ぬしと云いふ事ことを教をしへて居ゐるのだ。深酒ふかぎけを吞のまぬやうにせぬと危あぶないものだ。たとへ身體からだがピンピンして居ゐても人の惡口わるくちばかり云いふて居ゐると、憎にくまれてどんな災難さいなんを買かふやら分わからないぞ。些ちつと慎つつしむがよい」

テル「そんな事ことを聞きくと折角せつかくの酔よひがさめて仕舞しまふぢやないか。俺おれは平常ふだんから顔色かほいろが悪わるいのだ、氣きにかけて呉くれるな。そんな事ことを聞きくと何なんだか俺おれ迄まで氣分きぶんが悪わるくなるからな」

斯かく話はなす所ところへ片手かたてに爛徳利かんどくりを下さげ、片手かたてに杯さかづきを持もち進すすんで來きたのは晴公はるこうであつた。

晴公はるこう「ヨルさま、ハルさま、テルさま、石搗いしづきは大分だいぶん大層たいそうでしたが、先まづ貴方あなたがた  
おかげで無事ぶじ終了しゅうれうし、斯こんな目出度めでたい事ことはありませぬね。お祝いはひに一いっ杯ぱいつがして  
下ください」

と杯さかづきをさし出だした。ヨルはさも嬉うれし氣げに晴公はるこうにつがせながら、一ひと口くちのんで額ひたひをポ  
ンと叩たたき、

ヨル「遠さすがは晴公はるこうさまだ。治國はるくにわけ別わかれさまのお仕込しこみだけあつて道公みちこうさまとは大分だいぶん氣きが  
利きいてゐるわい。晴公はるこうさま、宜敷よろしく頼たのみますよ。吾々われわれはバラモン教けうから歸化きくわした  
所謂いはゆる異邦人いほうじんだから何かなににつけて疎外そくわいせられるやうに思おもはれてなりませぬワ。これ  
も心こころのひがみでせうか。人間にんげんといふものは妙めうなもので貴方あなたのやうにして下くださると  
本當ほんたうに心こころの底そこから打うち解とけたやうで、働はたらくのも何なんだか勢せいが出るやうですわ。ナア、  
ハル、テルさうぢやないか」

テル「さうだなア、人ひとの上うへに立たつ人は餘程よほど氣きをつけて下くださらぬと下したの者ものはやり切き  
れないからなア」

ハル「同おなじハルのついた晴公はるこうさまだから、同どう名めい異人いじんと云いふだけで、やつぱり身魂みたま

が合ふて居るのだよ。それだから晴公さまが俺達の所へ来て下さったのだ。ヨル、テル、晴公様に感謝すると共にこのハルさまにも感謝するのだぞ」

ヨル、テル「ヘーン、何を吐しやがるのだえ、鼻を捻折るぞ」

晴公「常暗のヨルははれけり大空に

月は照るなり星は輝く。

空晴る月「テル」【ヨル】の星影は

いとも疎に見え渡るかな」

ヨル「オイ、テル、ハル兩人喜べ、俺はヨルさま、お前はテル、ハルの兩人、それに晴公さまだから、あのやうに目出度い歌を詠んで下さった。親切と慈愛の徳は曇つた空も晴るるなり、曇つた心の月も照るものだなア」

晴公は両手を合せ、惟神靈幸倍坐世と何を思ふてか、感謝の聲に涙を帯びながら神文を奏上した。三人も手を打つて「惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」と連呼

した。斯くして直會の宴は全く閉ぢ、一同は十二分に歡を盡して寢についた。

（大正一二・一・一六 舊一一・一一・三〇 加藤明子録）

## 第五章 復命（一二七九）

漸くにして石搗も濟み、道公、晴公、伊太公、純公、其外一同は、前後百餘日を費して立派なる宮を建て上げた。而して其遷宮式は節分の夜に行はるることとなつた。四方八方より信者が密集し來り、祠の森のふくらんだ廣い谷も、立錐の地なき迄に信者が集まつて來て、此遷宮式に列することとなつた。澤山の供物が山の如く集まつてゐる。道公始めバラモン組のイル、イク、サール、ヨル、テル、ハルの連中も祭官の中に加はり、イソの館より下附された立派な新調の祭服を身にまとひ、神饌所に入つて、何百臺とも知れぬ神饌の調理にかかつてゐる。ヨル「オイ、今日の祭りは俺のお蔭だぞ。神様を拜むよりも先づさきに俺を拜む

のだな<sup>□</sup>

とお神酒の盗み呑みに、顔を眞赤にしてクダを巻いてゐる。

イル「コラ、ヨルの奴、貴様は何だ、エ、ン、祭服をつけやがつて、神様にお供へもせぬ内からお神酒を戴くといふ事があるか、チツと心得ぬかい<sup>□</sup>

ヨル「コラ、イル、何を吐しやがるのだ。今夜は玉國別さまがヨルの祭だと仰有つただないか、イルの祭だないぞ。それだから俺が先づ毒味をして喉の神様に供へ、其上でヨルの神様をお祭りするのだ。ヤツパリ身魂がよいとみえて、こんな立派なお宮様にヨルの靈を祭つて頂くのだからなア、本當に偉いものだらう<sup>□</sup>

イク「併しこれ丈澤山の金銭物品を供へても、神様はお受取になるだらうかなア。却て御迷惑だらうも知れぬぞ、神様はすべて無形にましますのだから、この様な人間の食ふ有形的供物はおあがりになる筈はないだないか。その證據にやいくら永く供へておいても果物一つ減つてゐないぢやないか、こんな澤山の物供へるよりも、代表的にお三方に二臺か三臺か供へておいて差支なささうだがな。丸で八百屋の店みたやうだ。エ、ー、ヨル、貴様何う思ふ？」



ヨル「貴様はヤツパリまだ神の事が分らぬと見えるワイ。神様は地上に降り玉ふ時はヤツパリ人間の肉の宮を機關と遊ばすのだから、自然界の法則を基として、何事もお仕へせなくちやならぬぢやないか。信者の供物を受取り玉ふ神様は無形にましますが故に、物質的食物は不必要だと云つて、此結構な御祭典に金額物品を備へない奴は神様の愛に居らず又神の恵に浴する事も出来ない偽信者のなすべき事だ。祭典といふ事は祭る法式といふ事だ。祭るといふ事は、人を待つ事だ、所謂お客様を招待するも同じ事だ。善と眞とを衡にかけ、人間の愛と神の愛とを和合する神事だ。それだから眞釣りに「まつる」といふのだ。何程神様に供へたお供へものがへらなないと云つても、肝腎要のお供物の靈は皆おあがりになつてゐるのだ。大根は大根の味、山葵は山葵の味、魚は魚の味と、各自に其味が變つてゐるのは皆神様から造られたものであつて、人間の所爲でもなければ、大根山葵夫れ自身のなし得たる所でもない。同じ土地に同じ肥料をやつて作つても、唐辛を蒔けば辛くなる、水瓜を作れば甘くなる、山椒を作れば又辛くなる、そして其甘さにも辛さにも各特色がある。これ皆神徳の内流によつて出来るものだ。それ

だから地上の人間は神様に結構なものを與へられて、之を感謝せずには居られない。夫れ故神の御恵みを謝する爲に心を盡してお供物をするのだ。此通り澤山なお供物の集まつたのも、假令少しづつでも、これ丈の人間が各自に何なりと持つて來たのだから、塵つんで山をなしたのだ。神は人間の眞心を受けさせ玉ふものだから、菜の葉一枚でも供へてくれと云つて持つて來た者は、皆お供へせなくちやすまないぞ。それが祭の祭たる所以だから、……」

テル「それでも賽錢一文持たず、菜の葉一枚お供へせずして、有難がつて喜んでゐるのもあるだないか。それは何うなるのだ」

ヨル「其奴は夢を見て喜んでる様なものだ。此ヨルさまはヨルの祭だから、供へてくれた人間は皆覺えてゐるが、空參りする奴は空靈だからお蔭はやらないよ。

ヨルの守護の世の中だからなア。何なつと手形を持つて來ないとヨルの神様も信仰が分らないからな」

テル「お前の神様はヨルの神様でなうて、欲の神様だろ」

ヨル「馬鹿云ふな。神を愛し、神に従ひ、假令菜の葉一枚でも、神様に上げたい



ないものでも、息子が買ふて来てくれたものだから、孫が遙々買ふて来てくれたとか、送つてくれたとか、會ふ人毎に話して喜ぶだろう。そして僅二三十錢の物を孫がくれると爺さま婆アさまは臍繰金の十圓も出して、孫にソツとやるだないか。愛は愛と相應し、善は善と相應するものだ。それだから、祭を眞釣合といふのだ。決して爺さま婆アさまは吾子や孫に、土産を買ふて来て貰はうと望まない。……と同様に神様は決してお供へを望み遊ばさない。けれど其子や孫が土産をくれた時の心と、くれない時の心とは、其時の愛の情動の上に於て、非常な差等のあるものだ。それだから神の愛に觸れむと思ふ者は神を愛さなくてはならぬのだ。人間として何程心を盡しても、神様に對する御恩報じは金額物品を以て、其眞心を神に捧ぐるより、外に手段も方法もないだないか。

テル「それでも人間は精神を以て神の爲に盡し、神を愛すれば可いのだよ。なア、イク、サール、貴様、そう思はせぬか」

サール「それも一理あるやうだが、ヤツパリ、ヨルの神様の、云ふやうに、愛の心が起つたならば、キット中途に止まるものだない、終局點迄達するものだ。其

終局しゅうきよくてん點は所謂いはゆる人間にんげんの實地じつちの行おこなひだ。靈れいから始はじまつて體たいに落おち着つくのが眞理しんりとすれば、ヤツパリ神様かみさまに山野河海さんやかかいの珍めずらしき物ものや幣帛料へいはくれうを獻納けんなふするのは所謂いはゆる愛あいと誠まことの表あらはれだと思おもふ

ハル「成程なるほど夫れに間違まちがひない。さうでなければ何どうして玉國別たまくにわけさまや、五十子いそこ姫様ひめさまが、こんな大層たいそうな祭まつりを遊あそばすものか

と神饌所しんせんじよが賑にぎはつてゐる。そこへ伊太公いたこう、純公すみこうの二人ふたり現あらはれ來り、

伊太「サア、是これから被戸はらひどが初はじまる、お前まへたちも準備じゆんびをしてゐなくちやならないぞ。併しかし大變たいへんな參詣者さんけいしやだないか

ヨル「本當ほんたうに立錐りつすゐの餘地よちなき迄まで、參拜者さんばいしやが集あつまりましたなア

伊太「ヤア、今太鼓いまたいこがなつた。サア、神饌しんせんの用意よういは出できたかなア

イル「餘あまり澤山たくさんな供そなへ物もので、實じつは目めをまはす許ばかりの多忙たばうを極きはめて居をります。併しかし大方準備おほかたじゆんびが出できたやうです

伊太「純公すみこうさま、私わたしは之これから被戸はらひどを勤つとめねばなりません。貴方あなたはどうか神饌長しんせんちやうになつて下ください

純公「ハイ承知しました」

伊太公は「皆さま宜しく、拔目のないやうに頼みます」と云ひすて、被戸の館を指して急いで行く。

被戸式、神饌傳供もすみ、玉國別の遷宮祝詞の奏上も了り、それより餅撒きの行事に移つた。被戸主の祝詞や遷宮式の祝詞は略しておく。

晝夜を分たずポンポンと搗いた小餅は五石六斗七升と稱へられた。而して其大部分は五十子姫今子姫の手に固められたものであつた。神饌係のイル、イク、サー、ヨル、テル、ハルを始め、神饌長の純公は高臺の上に登り、一生懸命に四方八方へ餅を撒きつけた。數多の老若男女は波打つ様に餅の落ちる方へ雪崩を打つて、人を踏み越え、つき倒しなどして、一個でも多く拾はむ事を努めた。平素は神の教を聴き、人間は人に譲り、謙らねばならぬと云ふ事を心に承知し且人にも偉相に宣傳し乍ら、かかる場合にはスツカリ獸性を遺憾なく發揮するものである。丁度犬の子がさも親密相にじやれあふたり、ねぶり合ふて遊んでゐる所へ、腐つた肉を放りこんだやうな物である。之を思へば人間は肉體を有する限り、どうし

ても我慢と欲には離れ得ないものと見える。一つでも此餅を戴き家に歸つて家族や近所の者に分け與へて神徳を分たむとすれば、おとなしくして、後の方へ控へて居つても、半分の餅も拾ふ事は出来ない。始めの間はさういふ態度を取つて居つた信者も澤山あつたがグズグズしてると、押し倒され、踏み躪られ、餅は拾ふ事が出来ないので、群集心理とやらに襲はれて、さしも謙遜にして従順なりし男も、ソロソロ鉢巻をしめ出し、手に唾をつけ、邪魔になる奴を押し倒し、そして一つでも餘計に拾ふて懐に捻ぢ込まねば損だといふ氣になり、一時にあばれ出したからたまらない。彼方の端にもキヤアキヤア、此方の隅にもアンアンと子供の泣く聲、俄に修羅道の淺ましき場面と變じて了つた。餅撒きも漸くすみ、餅の爭奪戦も休戦のラツパが鳴つた。それより各信徒は立派に建て上つた新しき宮を伏拜み、欣々として河鹿峠を下り、各家路に日を暮し乍ら、歸つて行く。あとには宣傳使や祭典係の連中と熱心なる信者が十數人残つて居た。

因に神殿は三社建てられ、中央には國治立尊、日の大神、月の大神が齋られ、左の脇には大自在天大國彦命、竝に盤古大神鹽長彦神を鎮祭し、右側には山口の

神を始め、八百萬の神々を鎮祭された。此祭典がすむと同時に玉國別の眼病は全快し、顔の少しく、形まで變つて居たのが、以前にまして益々圓滿の相となり、俄に神格が備はつて來た様に思はれた。茲に玉國別は直會の宴を、社務所の廣間に於て開く事となつた。而してこの席に竝んだ者は、此祭典に與つた役員全部と十數名の熱心な信者とであつた。玉國別は鎮祭無事終了を祝する爲、神酒を頂き乍ら、歌ひ出した。

☞ 神が表に現はれて

善と惡とを立て分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す

三五教の大御神

聖き教を四方の國

開き傳ふる身を以て

少しの心の油斷より

天津御空の日月に

譬ふべらなる兩眼を

獸の爲に破られて



痛<sup>いた</sup>さに惱<sup>なや</sup>み皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>が  
依<sup>よ</sup>さし玉<sup>たま</sup>ひし神<sup>かむ</sup>業<sup>わざ</sup>を

いかにか なして果<sup>はた</sup>さむと 思<sup>おも</sup>ひ惱<sup>なや</sup>める折<sup>をり</sup>もあれ

皇<sup>すめ</sup>大神<sup>おほかみ</sup>の御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>に 深<sup>ふか</sup>き仕<sup>し</sup>組<sup>ぐみ</sup>の  
みましてや

祠<sup>ほこら</sup>の森<sup>もり</sup>に止<sup>とど</sup>められ 皇<sup>すめ</sup>大神<sup>おほかみ</sup>の御<sup>み</sup>舍<sup>あらか</sup>を

大<sup>おほ</sup>宮<sup>みや</sup>柱<sup>はしら</sup>太<sup>ふと</sup>しりて 仕<sup>つか</sup>へまつらせ玉<sup>たま</sup>ひたる

其<sup>その</sup>御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>は今<sup>いま</sup>となり 初<sup>はじ</sup>めて思<sup>おも</sup>ひ知<sup>し</sup>られける

これ<sup>これ</sup>を思<sup>おも</sup>へば吾<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>が 二<sup>ふた</sup>つ<sup>ふた</sup>の眼<sup>まなこ</sup>を山<sup>やま</sup>猿<sup>ざる</sup>に

搔<sup>か</sup>きむしられし經<sup>いき</sup>緯<sup>さつ</sup>は 全<sup>ま</sup>く神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>に

出<sup>い</sup>でさせ玉<sup>たま</sup>ふものなりと 悟<sup>さと</sup>るも嬉<sup>うれ</sup>し今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の宵<sup>よひ</sup>

今<sup>いま</sup>迄<sup>まで</sup>痛<sup>いた</sup>みし吾<sup>わが</sup>眼<sup>まなこ</sup> 拭<sup>ぬぐ</sup>ふが如<sup>ごと</sup>く癒<sup>い</sup>えわたり

眼<sup>まなこ</sup>の霞<sup>かすみ</sup>もよく冴<sup>さ</sup>えて 今<sup>いま</sup>は全<sup>ま</sup>く元<sup>もと</sup>の如<sup>ごと</sup>

清<sup>きよ</sup>き光<sup>ひかり</sup>を放<sup>はな</sup>ちけり あゝ惟<sup>かむ</sup>神<sup>な</sup>々<sup>ながら</sup>々<sup>ながら</sup>

神<sup>かみ</sup>の守<sup>まも</sup>らず神<sup>かみ</sup>の世<sup>よ</sup>は 一<sup>い</sup>切<sup>っ</sup>萬<sup>っ</sup>事<sup>い</sup>神<sup>しん</sup>界<sup>かい</sup>の

御<sup>み</sup>教<sup>のり</sup>に服<sup>まつろ</sup>ひ奉<sup>たてまつ</sup>り 卑<sup>いや</sup>しき人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>もて

何くれとなく一々に

争論うべきものならず

天地の間は一切を

只神様の御心に

任せまつりて従順に

吾天職を守るより

道なきものと悟りけり

五十子の姫よ今子姫

最早吾身は斯くの如

眼の惱み癒えぬれば

汝が命と何時迄も

一つとなりて神の前

仕ふる事は叶ふまじ

われは是より珍彦に

これの館を守らせて

神の依さしの神業に

立ち出で行かむ汝は又

イソの館へ立ち歸り

今子の姫と諸共に

皇大神の御前に

心を淨め身を清め

朝な夕なに仕へかし

珍彦静子晴公よ

汝は吾れに成り變り

祠の森の神殿に

朝な夕なに仕へつつ

神の教を受けむとて

參來集へる信徒を

完全つまらに詳細つばらに説き諭さとし

神かみの御國みくにの福音ふくいんを

普あまねく附近ふきんにかがやかし

曲津まがつ身魂みたまの往來わうらいを

いよいよ茲こゝにせきとめて

イソの館やかたに一步ひとあしも

進しんにふ入ふさせじと村肝むらぎもの

心こころを盡つくして守まもるべし

夜よが明あけぬれば吾々われわれは

これの館やかたを立出たちいでて

ハルナの都みやこに蟠わたかまる

八岐やまた大蛇をろちの征服せいふくに

神かみの恵めぐみを浴あび乍ながら

進すすみて行ゆかむ惟神かむながら

神かみの守まもりを願ねぎまつる

と歌うたひ了をはり、神しんでん殿でんに向むかつて合掌がつしやうする。

五十いそ子こ姫ひめは長袖ちやうしゆとや淑しよかに舞まひ乍ながら、靜しづかに歌うたひ出だしたり。

神かむす素さ盞の鳴を大神おほかみの 神言みこと畏かしこみ背せの君きみは

玉國たまくに別わけと名な乗りまし

獅子しし狼おほかみの吠ほえたける

荒野を別けて河鹿山 風の悩みや山猿の

爲に眼を失ひつ 漸く茲に來りまし

悩みし眼を癒やす内 如何なる神の御恵か

尊き神業を任けられて 百日百夜を事もなく

過ごさせ玉ひ皇神の 瑞の御舎仕へまし

祭も無事に相濟みて 神の恵も灼然に

眼の悩みなをりまし 感謝の涙諸共に

今直會の宴席に 列なり玉ひ珍彦や

其他の司に御社の 守りの役を任せさせつ

只の一日も休まずに 又もや猛き荒野原

雪踏み分けてフサの野を 渡らせ玉ひ月の國

遠き都に出で玉ふ 其功績は皇神の

御稜威に比べまつるべし さはさり乍ら五十子姫

漸く茲に尋ね來て 夫の命の笑顔をば

拜むをが閒まもなくイソ館やかた 神の御前にかみ みまへ歸るべく

宣のらせ玉たまひし言ことの葉はは 實げにも雄を々をしき限かぎりぞと

勇いさみに勇いさむ胸むねの内うち 今いま子の姫ひめもさぞやさぞ

嬉うれしみ玉たまふ事ことならむ 伊いた太た公こうさまよ純すみ公こうよ

其その外ほか百ももの司つかさたち 吾わが背せの君きみにしたがひて

一ひと日も早はやく月つきの國くに ハルナみやこの都みやこに蟠わたかまる

八や岐また大を蛇ろちや醜しこがみ神を 言こと向むけ和やはし大おほ神かみの

依よさし玉たまひし神しん業げふを 完うま全らに委つ曲ばらに盡つくし了をへ

一ひと日も早はやく復かへり命こと 申まをさせ玉たまへ惟かむ神ながら

神かみの御みま前にね祈ねぎまつる 旭あさひは照てる共とも曇くもるとも

月つきは盈みつ共とも虧かくるとも 假たと令へ大だい地ちは沈しづむとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ 誠まこと一ひとつは神しん界かいの

唯ゆゑ一いつの寶たから生せい命めいぞ 皇すめ大おほ神かみを能よく愛あいし

其その神しん格かくを理り解かいして 神かみの御みま前にぜん善とく徳を

積む傍に世の人を

普く愛し導きて

神の司の本分を

遂げさせ玉へ五十子姫

イソの館に勤めつつ

吾背の君や汝が命

其一行の成功を

身もたなしに祈るべし

いざいざさらばいざさらば

勇み進んで出でませよ

妾はこれより河鹿山

雪踏み分けてやうやうに

イソの館に立ち歸り

皇大神に此さまを

完全に委曲に奏上し

百の司の眞心を

洩らさず落さず大前に

申し上げなむいざさらば

明日はお別れ申します

何れも無事でお達者で

神の恵の幸あれや

偏に祈り奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

今子姫は又歌ふ。

旭あさひは照てる共とも曇くもるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむ共とも

變かはらせ玉たまふ事ことあらし

造つくり玉たまひし目も的くてきは

一ひとり人も残のこさず天國てんごくに

天國てんごく淨土じやうどの團體だんたいを

開ひらかせ玉たまひ神國しんごくを

百ももの神人かみびと喜よろこびて

來きたさむ爲ための御經綸ごけいりん

深しん甚じん美び妙めうの神德しんとくに

いつとはなしに晦くろまれ

汚けがしゐるこそはかなけれ

曇くもれる靈みたまを憐あはれみて

ウブスナ山やまや其外そのほかの

月つきは盈みつ共とも虧かくる共とも

神かみの惠めぐみは永とこ久しへに

抑そもそも神かみが世よの中なかを

地ち上じやうに住すめる蒼生さうせいを

救すくはむ爲ための御仕組おんしぐみ

ますます淨きよく圓滿えんまんに

永えい遠えん無む窮きうに建設けんせつし

常世とこよの春はるの榮さかえをば

吾等われらは人ひとと生うまれ來きて

ひたり乍ながらも體欲たいよくに

至粹しすい至純しじゆんの神靈しんれいを

皇大神すめおほかみは吾々われわれの

高天原たかあまはらより降くだりまし

聖地せいちを選えりて神柱かむばしら

立てさせ玉ひ現そ身の

暗黒無明の世界をば

照らさせ玉ふ有難さ

皇大神の神言もて

五十子の姫の侍女となり

メソポタミヤの天恩郷

其外百の國々を

經めぐり神の福音を

餘り大した過ちも

來さず漸く使命をへ

イソの館に相召され

尊き神の大前に

仕ふる身とはなりにけり

ハルナの都の曲津身を

征服せむと出でましし

玉國別の遭難を

介抱せむと神勅を

辱なみて五十子姫

みあとに従ひ來て見れば

思ひ掛けなき御負傷に

一時は胸も轟きて

憂へ惱みあたりしが

神の仕組のいや深く

かかる案じもあら涙

流せし事の恥かしさ

百日百夜を無事に經て

茲に尊き皇神の

瑞の御舎建て了り



くに はる たち  
國 治 立 の 大 神 や  
おほかみ  
月 の 大 神 日 の 御 神  
つき おほかみ ひ みかみ

おほくにひこ  
大 國 彦 の 神 様 や  
かみさま  
其 外 百 の 神 々 を  
そのほかもも かみがみ

いっ  
齋 き ま つ り て 三 五 の  
あななひ  
教 の 道 の 御 光 を  
をしへ みち みひかり

て  
照 ら さ せ 玉 今 日 の 宵  
たま けふ よひ  
あ くれ ば 立 春 初 春 の  
りつしゆんはつはる

あまつひかり  
天 津 光 を う け 乍 ら  
なが  
玉 國 別 は 道 の 爲  
たまくにわけ みち ため

みなみ  
南 を 指 し て 鹿 島 立 ち  
かしまだ  
妾 は 君 と 諸 共 に  
わらは きみ もろとも

ゆきふ  
雪 踏 み 分 け て 河 鹿 山  
かじかやま  
風 に 吹 か れ つ 春 の 日 を  
かぜ ふう はる ひ

かしら  
頭 に いた だ き い そ い そ と  
いさ  
勇 み て 歸 る イ ソ 館  
かへ やかた

すめおほかみ  
皇 大 神 の 御 前 に  
おんまへ  
此 有 様 を ま つ ぶ さ に  
このありさま

かへりごと  
復 命 す る 樂 し さ よ  
たの  
旭 は 照 る と も 曇 る 共  
あさひ て くも とも

つき  
月 は 盈 つ と も 虧 く る 共  
み かつ か とも  
皇 大 神 の 御 惠 は  
すめおほかみ みめぐみ

ちよ  
千 代 も 八 千 代 も 永 久 に  
やちよ とこしへ  
變 ら せ 玉 心 事 あ ら じ  
かは たま こと

たまくにわけ  
玉 國 別 よ 百 人 よ  
ももびと  
勇 み 進 ん で 月 の 國  
いさ すず つき くに

みやこ  
ハ ル ナ の 都 は 云 ふ も 更  
さら  
七 千 餘 國 の 國 々 に  
しちせんよこく くにぐに

幡まりたる曲神を

嚴の言靈打出だし

言向和し神國を

此地の上に永久に

建てさせ玉へ惟神

神の御前に今子姫

謹み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

道公は又歌ふ。

祠の森に宮柱

太しく建てて永久に

鎮まりいます皇神の

御前に謹み願ぎ奉る

皇大神の御道を

四方に傳ふる道公は

玉國別の師の君に

従ひまつり月の國

其外百の國々に

威猛り狂ふ曲神を

神の力を蒙りて

言向和し神國の

聖きよき教をしへを世よに布しきて  
神かみの御前みまへに復命かへりごと

仕つかへ奉まつらむ吾心わがこころ  
諾うへなひ玉たまひ惟神かむながら

神かみの御前みまへに道公みちこうが  
眞心まごころこめて願ねぎまつる

五十いそ子の姫ひめよ今いま子こ姫ひめ  
汝なれが命みことは伊いソ館やかた

いと安やす々と歸かへりまし  
皇すめ大神おほがみの御前おんまへに

此この有ありさまを詳まづ細ぶに  
宣のらせ給たまひて師しの君きみや

吾われ等らが一行いつかうの身みの上うへを  
深ふかく守まもらせ玉たまふべく

祈いのらせ玉たまへ道公みちこうは  
吾わが師しの君きみに從したがひて

吾わが身を碎くだき吾骨わがほねを  
粉こなにするとも厭いとひなく

守まもり奉まつらむ心安うらやす  
歸かへらせ玉たまへ惟神かむながら

神かみの御前みまへに願ねぎまつる  
』

と歌うたつて五十いそ子こ姫ひめに別わかれを告つげた。五十いそ子こ姫ひめは忽たちまち神懸かむがかりじやうたい状態じやうたいとなつた。かからせ

玉たまふ神かみは國照くにてる姫命ひめのみことなりけり。

國くに照てる姫ひめ 皇神すめかみの神言みこと畏かしこみ御舍みあらかを

仕つかへ奉まつりし人ひとぞ尊たふとき。

玉國たまくに別わけ神かみの命みことの惱なやみたる

目めのはれたるも神かみの惠めぐみぞ。

大神おほかみに盡つくす誠まことの顯あらはれて

再元ふたたびもとの眼まなことぞなれる。

道公みちこうは名なを道彦みちひこと改あらためて

玉國たまくに別わけに從したがひて行ゆけ。

伊太公いたこうは伊太彦いたひこ司つかさと名なを賜たまひ

曲まがきたへむと月つきに出いでませ。

純公すみこうは眞純ますみの彦ひこと改あらためて

神かみの教をしへを四方よもに傳つたへよ。

晴公はるこうは道晴みちはる別わけと名なを替かへて

治國はるくに別わけの後あとを追おひ行ゆけ

玉國別たまくにわけ 有難しありがた、國照姫くにてるひめの詔みことり  
項うなじにうけて進すすみ行ゆかなむ

道彦みちひこ 身みも魂たまも曇くもりはてたる道公みちこうに

名なを賜たまひたる事ことの嬉うれしさ。

大神おほかみの惠めぐみはいつか忘わするべき

心こころも身みをも捧ささげ盡つくさむ

伊太彦いたひこ 暗やみの世よにいたけり狂くるふ曲神まがかみを  
言向ことむけ和やはさむ伊太彦司いたひこつかさは

道晴別みちはるわけ 治國別神はるくにわけかみの命みことに従したがひて

歸かへりて見みれば道晴別みちはるわけとなりぬ

今子姫いまこひめ 國照姫くにてるひめ、かからせ玉たまふ五十子いそこ姫ひめ

汝なれは誠まことの神かみにいませし。

美うるはしき尊たふとき神かみの生宮いきみやに

仕つかへ奉まつりしわれぞ嬉うれしき

珍彦うつつひこ 皇神すめかみの瑞みづの御舍側みあらかそば近く

仕つかふる吾われを守まもらせ玉たまへ

静子しづこ 背せの君きみは宮みやの司つかさとなりましぬ  
守まもらせ玉たまへ國くに照てる姫ひめの神かみ」

楓かへで 父ちちは今いま、神かみの司つかさとなりましぬ

母ははと吾われ等らを守まもらせ玉たまへ。

國くに照てる姫ひめの命みことの御み教をしへを

固かたく守まもりて仕つかへまつらむ」

國くに照てる姫ひめ 背せの君きみは宮みやの司つかさとなりましぬ  
成なりたる上うへは天あめに歸かへらむ」

成なりたる上うへは天あめに歸かへらむ」

と歌うたひ玉たまひ、神かむあ上あがり玉たまへば、五十いそ子こ姫ひめは元もとの肉にく體たいに復かへりける。

五十子姫いそこひめ「いざさらば吾背の君わがせきみよ恙つつがなく

神かみの仰あふせをとげさせ玉たまへ。

五十子姫いそこひめイソの館やかたにあるとても

靈みたまは清きよき君きみが御側みそばに」

玉國別たまくにわけ「玉國別たまくにわけ神かみの命みことの眞心まごころを

力ちからとなして神かみに仕つかへよ」

かく互たがひに歌うたをよみかはし乍ながら、大神おほかみの御前みまへに恭うやうやしく拜禮はいれいし、前途ぜんとの光明くわうみやうを祈いのり乍ながら珍彦うづひこ、静子しづこ、楓かへ其外そのほかバラモン組ぐみの六人ろくにんの役員やくゐんや熱心ねっしんな信者しんじゃに後事こうじを托たくし、玉たま國別くにわけは道晴別みちはるわけ、眞純彦ますみひこ、伊太彦いたひこ、道彦みちひこと共に宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながら、潔いさぎよく河鹿峠かしかたうげを、初春はつはるの日ひの光ひかりを浴あびて下くだり行ゆく。

(大正一二・一・一六 舊一一・一一・三〇 松村眞澄録)



第二篇 立春薰香

第六章 梅の初花（一二八〇）

初稚姫はハルナの都に蟠る大黒主の身魂を救ひ、天下の害を除かむため神素盞鳴大神の命を奉じ、供をもつれず只一人征途に上らむとし、百日有餘を空助の宅に奥深く潜みて神の教をよく調べ聖言を耽讀し愈父に別れを告げ征途に上るべくイソの館の八島主に暇乞ひのため面會を乞ふた。此初稚姫は照國別、玉國別、治國別及び黄金姫、清照姫等と同時に出征の途に上る筈であつたが、神素盞鳴大神の命令黙し難く、ここに一百有餘日自宅に於て修業を命ぜらるる事となつたのである。

初稚姫は、イソの館の奥の神殿に進み、神素盞鳴尊の大前に伺候し、八島主神に挨拶すべく訪問した。八島主は喜んで出で迎へ初稚姫を居間に招じて惡魔征討

に對し初稚姫が採らむとする其大略を聞きとり莞爾として打喜び且つ云ふやう、  
八島「初稚姫様、貴女は愈數千里を隔てたるハルナの都にお出遊ばすに就いては、  
最早年頃、獨身者では何かの都合が悪いでせう。どうか今の間に夫たるべき人を  
きめておかなくては、途中に困る事が出来るでせう」  
初稚「妾は年が若うムりますれば夫なぞは持つ氣はありませぬ、又理想の夫が見  
當りませぬから」  
八島「人間が地上の世界にある間は如何しても獨身生活は出来ませぬ。又理想の  
夫を得様等と何程思つても、さううまく貴女の氣に入りさうな事はありません。  
夫たり妻たるものは各其缺點を辛抱し合ふてここに初めて圓滿な家庭を作り、大  
神の神業に参加し得るのです。理想の夫を求めむとし又理想の妻を得むとする欲  
望は到底現界では望み得られませぬ。何事も神様の命に従つて夫婦睦じく暮すよ  
り道はありませぬ。理想の夫又は妻等は到底天國でなければ自然界に左右せらる  
る肉體人は到底駄目です。然し乍ら、三五教の御教がスツパリと天下に行き渡り  
人間の心が理想的に改良される様になつた曉は地上にも亦天國の型が其儘に映り

人間は理想の婚姻をする事が出来るでせう」

初稚「然ば妾は地上にミロクの世が来る迄待つ事に致しませう。高天原の天人と

天人との間に於ける神聖なる婚姻の状態は如何なものでありませうか」

八島「ここ五年や十年に到底理想の世界の出現は難かしいでせう。八岐大蛇の亡

ぶ迄は到底地上に天國は完全に来ませぬ。高天原の婚姻に就て一言お話しすれば、

天人と天女との婚姻あるは猶地上の世界に男女両性の婚姻が行はれてあるやうな

ものであります。そして高天原に於けると地上の世界に於けるとはその婚姻に相

違の點もあり一致の點もあります。そもそも、

一、高天原の婚姻なるものは智性と意志との二つのものを和合して一心となすの

謂であり、智性と意志の二つのものが合一して、動作するものを一心といひます。

夫は智性妻は意志と呼ぶる部分を代表するものであります。

一、此和合は元より内分的に起るものであつて、之が靈身に屬する時、之を知覺

し感覺して愛なるものを生ずる。この愛を婚姻の愛といふのであります。智性と

意志兩者の和合して一心となる所に婚姻の愛なるものが發生するのである。故に

天人は男女一體にして一雙の夫婦は二個の天人でなく一個の天人となすのであります」

初稚「夫婦の間に以上御話の如き親和のあるのは男子女子創造の眞因より來たるものでせうか」

八島「男子の生るるや自ら智的であるから凡ての思索は智性よりするものです。之に反して女子の生るるや自ら情的であるから、其思索も又意志より來るもので

あります。男女の性行より見るも形態より見るも明かな事實です。性情から見る時は男子の行動は凡て理性的で女子は情動的であります。その形態の上から見ても男子の面は女子の如く優美で柔軟でない。男子は身體剛健なれども女子は柔嫩

なものであります。故に男女間に於ける智性と意志や情動と想念との間にも亦これに似たる區別があります。眞と善、信と愛との間にも區別がある。如何となら

ば信と眞とは智性に屬し、善と愛とは意志に屬するからであります」

初稚「天國に於て青年、成人、處女、婦人の區別がありますか」  
八島「靈的意義より言ふ時は、眞を全得すべき智を表はして青年成人となし、善

に對する情動を表はして處女、婦人といふのである。又この善と眞とに對する情動より見て聖場、又は教場を婦人と呼んだり、處女と呼び、變性女子の身魂と呼ぶこともあるのです」

初稚「男子は智性のみ活動し、女子は意志のみ活動するものとの御説は、妾には少しも合點が行きませぬ。女子だつて智性をも有つてゐる様に思はれますが……」

八島「男女の區別なく智性も意志も保有してゐるのです。唯々男子は智性を主とし女子は意志を主とするのみです。人の性格を定むるは、其主とする所如何に由

らなければ成らない。併し高天原に於ける婚姻には偏重する所がない。即ち妻の

意志は夫の意志であり、夫の智性は妻の智性である。男女互に他の思ふ所を思ひ、

志す所を志すが故に、兩者の想念と意志とは互に感應し相和合して一體となるの

です。この和合は實際上の和合だから夫の智性は妻の意志に入り、妻の意志は夫

の智性に入るものです。そしてこの和合は殊に相互間に於てその面を見る時に於

て生ずるものである。高天原には、想念と情動の交通あるが上に殊に夫婦の間に

は相愛深き故、この交通は更に濃厚密接の度が強いからであります。是を見ても

高天原の天人等の婚姻状態は如何にして成立するか。この愛を喚起する所の男女  
兩心の和合とは如何なるものかが明かになつたでありませう。天國のこの愛なる  
ものは相互に自己の有する一切を擧げて他に與へむと願ふ心なることは明かであ  
ります」

初稚「男子の智性と女子の意志との和合して一心一體となり、天國の婚姻が神聖  
に行はれる状態は明瞭に覺る事を得ました。併し智性は何物を攝受し、意志は何  
ものを天國に於て攝受し得るものなるか今一度御明示を願ひます」

八島「神聖なる婚姻をなせる男女の間に此の如き和合一致のある限り彼等天人男  
女は婚姻の愛に居り又之と同時に智慧と證覺と幸福と歡喜とに居るものでありま  
す。一切の智慧と證覺と幸福と歡喜の來るべき源泉なる神善の神眞とは主として  
婚姻の愛の中に流入するものなるが故であります。故に婚姻の愛なるものは神格  
が流入する所の平面そのものである。蓋し同時に眞と善との婚姻だからでありま  
す。眞と善との和合は智性と意志との和合の如くであつて、智は神眞を攝受し、  
これに由つて其智性を成就し、意は神善を攝受し之に由つて其意性を成就するの

であります』

初稚 『智性と意志との和合と、眞と善との和合に如何なる區別がありますか』

八島 『畢竟同一であります。眞と善との和合は天人を成就し、又智慧と證覺と幸

福と歡喜とを成就するものです。如何となれば天人の天人たるは如何なる程度ま

で彼の善は眞と和合し、彼の眞は善と和合したかに在るのです。要するに彼の愛

は信と和合し彼の信は愛と和合した程度の如何に由つて婚姻の行はるるものであ

ります』

初稚 『善と眞との和合の原因は何れより來たるものですか』

八島 『太元神が高天原及び地の世界にある萬物に對して有し給へる神愛より發す

るのです。この神愛より神善を出し、そして此神善は天人と神的諸眞に居る人々

とが享くるものである。善を享くる唯一無二の器は、眞より外に無いのだから、

眞に居らないものは何事も太元神及び高天原より享くることは出来ないのです。

故に人間にある所の諸々の眞にして善と和合した限り、太元神及び天界と和合す

るのです。婚姻の愛の原頭なるものは茲にあります。故にこの愛なるものは神格

の流るる平面そのものです。又高天原に於て善と眞との和合せし状態を、天的婚

姻と云ふのであります」

初稚「高天原の夫婦は二個一體即ち一天人の形式の様に承はりましたが、尚今一度詳細な説明を願ひます」

八島「天人または地上の人間の中に和合した善と眞とは一にして二にあらず。何

故なれば善は眞よりし眞は善よりするからである。この和合は人その志す所を思

ひ、その思ふ所を志す時に成り立つ所の和合の如くにして、この時彼の想念と意

志とは一となつて即ち一心を成すに至る。何となれば想念は意志の欲する所に

従つて象づくり之を形式の上に現はし、而して意志は之に歡喜の情を附與するか

らであります。高天原に於て男女兩者の婚姻せるを一個の天人と呼びなし、兩個

の天人とせないのは之が爲であります」

初稚「元始に人を造り給ひしものは之を男女に造れり。此故に人父母を離れて其

妻に合ふ。二人のもの一體となるなり。されば二つにはあらず一體なり。神の合

せ給へるものは人之を離すべからず。此言は人皆受け納るること能はず、唯賦け



られたるもののみ之を爲し得べし……と聖言に記されたるは天人の居る天界の婚姻ですか」

八島「天界に於ける天人の婚姻であつて是れ善と眞との婚姻、神の結び給ふた婚姻は人が離すことは出来ない。要するに善を眞から離すことは出来ぬといふ意義であります。是に由つて眞の婚姻は何れの處から創まるかを見ることが出来るのです。即ち先づ婚姻を結ぶものの心裡が成り立ち之から傳はつて肉體に下り、此處に知覺ありて之を感じて愛となるのです。凡て肉體の感ずる所、知覺する所は、皆其源泉を人の靈的原力に汲むものなるが故であります」

初稚「いろいろと御理解を仰ぎまして有難うございます。然し乍ら、それを承はらば尚々私は地上に於て婚姻をする事が氣が向かない様です。併し乍ら父にも申して置きましたものですが、ハルナの都の御用が濟んでから貴方様方の御世話に預つて、それ相當の夫と婚姻する事を誓つておきます。決して妾は獨身主義でやり通さうとは申しませぬ。何と云つても年も若く前途も長いのですから、獨立獨歩の活動が致し度うあります」

八島「さう仰有れば強つて申しませぬ。實の所白状致しますが素盞鳴大神より貴女の御精神を試して見よとの仰せでムりました故、斯様の事を申し上げます。其御決心ならばキツとハルナの都の邪神を言向和す事が出来るでせう。夫がお在りになるとすれば實際の活動は出来ませぬからな。八人乙女の方々でも夫を持たれた方は家庭の主婦として自由自在の活動が出来ない様なものです。まだ獨身でゐらつしやる英子姫様悦子姫様等はあの通りの大活動を試みられて居られますからな。それもやはり獨身のお蔭ですよ。時に初稚姫さま、空助さまは貴女の出立を何故お送りにならないのですか」

初稚「父は左様な女々しいものでは御座りませぬ。妾が「父上さま、之より御用のため遙々ハルナの都へ参りますから何卒御壯健で」と申しましたら父は直ちに聲を荒らげ「決して空助の事は氣にかけちやならない。お前はお前の御用があるのだ」と云つたきり門口へ見送りもして呉れませなんだのです。實に親の愛と云ふものは深いものでムります。妾も父の雄々しき心根に對しても飽迄大神様のため、世人のために、活動を致さねばなりません」

八島やしま「成程なるほど、此親このおやにして此子このこあり、イヤもう感じ入かんじいりました。素盞鳴すさのをのおほかみ大神様さまが貴あな女親たおやこ子の御精神ごせいしんをお聞ききになりましたら嘸御満足さぞごまんぞくに思召おほしめすで御座ござりませう。何卒なにとぞ

仕合しあはせよく征途せいとにお上のほり下くださいませ」

初稚姫はつわかひめ「惟神かむながらかみ神の恵めぐみに助たすけられ

ハルナの都みやこに進すすむ嬉うれしさ。

八島主神やしまぬしかみの命みことよ吾父わがちちを

守まもらせ玉たまへ朝あさな夕ゆふなに」

八島主やしまぬし「親思おやおもひ子思こおもふ心こころぞ世よにも尊たふとけれ

神かみに任まかせし心こころぞ尚なほも尊たふとき。

初稚姫はつわかひめイソの館やかたを出いでませば

神かみは汝なれをば守まもりますらむ」

初稚姫はつわかひめ 八十曲津やそまがつ如何いかに伊猛いたけり狂くるふとも

誠まことの劍つるぎに斬きり屠ほふらなむ。

大神おほかみの依よさし玉たまひし言靈ことたまを

力ちからと頼たのみ行ゆくぞ嬉うれしき

八島主やしまぬし いざさらば之これにてお別わかれ申まをすべし

初稚はつわか………八島主君やしまぬしきみ安やすくましまして

と歌うたひ終をり此處ここに兩神人りやうしんじんは袂たもとを分わかつ事こととなりぬ。初稚姫はつわかひめは春はるとは云いへどまだ寒さむき  
風かぜに衣ころもの袖そでを煽あふられ乍ながら、ウブスナ山やまの咲さき初そめし梅うめの花はなの薰かをりに名残なごりを惜おしみ  
つつ、此聖場このせいぎやうを只一人ただひとり草鞋わらぢ脚絆きやはんに身みを固かため扮装みなりも輕かるき蓑笠みのかさ、金剛杖こんがうづゑを突つき乍ながら踏ふ  
みもならはぬ長途ちやうとの旅たびに上のぼるべく勇いさみ進すすみ行ゆく。

(大正一二・一・一六 舊一・一・一一・三〇 北村隆光録)

第七章

剛膽娘（一二八一）

初稚姫 此世の中に人となり 神の恵に救はれて

父の命と諸共に 産土山の聖場に

朝な夕なに仕へたる 吾身の上こそ嬉しけれ

神素盞鳴の大神は 高天原に登りまし

姉大神に疑はれ 高天原の安河で

誓約の業をなしたまひ 清明無垢の瑞御靈

現はれ給ひし尊さよ さはさりながら八十猛

神の命は猛り立ち 吾大神の御心は

かくも尊き瑞御靈 しかるを何故大神は

汚き心ありますと 宣らせたまひし怪しさよ

事理聞かむと伊猛りて 遂には畔放ち溝埋め頻時や

串さしなどの曲業を

はじめたまひし悲しさよ

我素盞鳴の大神は

百千萬の神人の

深き罪をば身一つに

負はせたまひて畏くも

高天原を下りまし

島の八十島八十の國

雪に埋もれ雨にぬれ

はげしき風に曝されて

世人のために御心を

盡させたまひ産土の

伊曾の館にしをばせて

茲に天國建設し

千座の置戸を負はせつつ

五六七の御代を來さむと

いそしみ玉ふ有難さ

妾も尊き御神の

御許に近く仕へつつ

天國淨土の眞諦を

悟り得たりし嬉しさよ

父の命に暇乞ひ

踏みも習はぬ旅の空

出で往く身こそ樂しけれ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠一つの三五の

愛あいと信しんとの御み教しへは 幾いく萬まん劫ごふの末すゑまでも  
 天地てんちと共に變かはるまじ かくも尊たふとき御み教しへに  
 吾わが精せい靈れいを充みしつ 尊たふとき神かみの御み使つかひと  
 茲ここに旅り装よさうを調とへて ハルナを指さして出いでて往ゆく  
 あゝ惟かむ神な々々 神かみの惠めぐみの深ふかくして  
 往ゆく手てにさやる曲まがもなく 身みも健すこやか 此この使し命めい  
 果はたさせたまへ大おほ御み神かみ 石いしの枕まくらに雲くもの夜よ着ぎ  
 野の山やまの露つゆに身みを伏ふせて 假たとへ令いく幾よ夜よを明あかすとも  
 神かみの御み守まもり有ある上うへは 何なにか恐おそれむ宣せん傳でん使し  
 かよわき女をんなの身みながらも 絶ぜつ對たい無む限げんの神しん力りきを  
 保たもたせ給たまふ大おほ神かみの 吾われは尊たふとき御おん使つかひ  
 必かならず神かみの御おん名なをば 汚よごさず穢けがさず道みちのため  
 世よ人びとのためにあくまでも 神かみの御み旨むねを發はつ揚やうし  
 八や岐また大を蛇ろちも醜しこ神がみも 剩あまさず殘のこさず神かみの道みち

救はにややまぬ吾覺悟 立てさせたまへ惟神

神の御前に赤心を 捧げて祈り奉る

神が表に現れまして 善神邪神を立てわける

五六七の御代も近づきて 常世の春の花開き

小鳥も歌ふ神の園 此世は曲の住家ぞと

世人は云へど吾身には 皆天國の影像ぞ

あゝ勇ましや勇ましや 惡魔の征討に上り行く

吾身の上ぞ樂しけれ

と聲淑やかに歌ひつつ、産土山を下り、荒野ヶ原を渡り、漸く黄昏時深谷川の丸木橋の邊についた。此谷川は川底迄殆ど百間許りもある、高き丸木橋である。總ての宣傳使は皆この一本橋を渡らねばならない。併し一本橋とは云へ、谷川の邊の大木を切り倒し、向岸へ渡せし自然橋なれば、比較的丈夫にして騎馬のまま通過し得る巨木の一本橋であつた。初稚姫はこの丸木橋の中央に立ち、目も届かぬ



許りの眼下の谷水が飛沫をとばして囂々と流れ往く其絶景を打ち眺めて居た。

初稚姫はつわかひめ 大神おほかみの恵めぐみは清きよき谷水たにみづの

流ながれて廣ひろき海うみに入いるかな。

闇やみの夜よを明あかきに渡わたす丸木橋まるきばし

妾わらわは今いまや中なかに立たちぬる。

眺ながむれば底そこひも知しれぬ谷川たにがはに

伊いた猛たけり狂くるふ清きよき眞ま清しみづ水みづ。

谷底たにそこを流ながる水みづはいと清きよし

空そら渡わたり往ゆく人ひとは如い何かにぞ。

黄昏たそがれて闇やみの帳とぼりはおるされぬ

されど水泡みなわは白しろく光ひかれる。

伊い曾そ館かた、咲さき匂におひたる白梅しらうめに

暇いとまを告つげて別わかれ來きしかな。

月もなく星さへ雲に包まれて

暗さは暗し夜の一人旅。

かくばかり淋しき野路を渡り来て

黑白もわかぬ闇に遇ふかな。

さりながら神の光に照らされし

吾が御靈こそは暗きを知らず。

唯一人橋のなかばに佇みて

思ひに悩む父の身の上。

いざさらば此谷川に名残りをば

惜みていゆかむ河鹿峠へ

かく歌ひながら暗の小路を足探りしつ々進み往く、遠の初稚姫も暗さと寒さに  
襲はれ止むを得ず路傍に蓑をしき、一夜を此處に待ち明さむと、天津祝詞を奏上  
し、うとうと眠る時しも一本橋の彼方より現はれ出でたる黒い影、のそりのそり

と大股に踏張り乍ら、初稚姫の傍近く進みより、

甲「オイ、臭いぞ臭いぞ」

乙「何が臭いのだ。ちつとも臭くは無いぢやないか。昨夕も失敗し、今晚こそは人の子を見つけて腹を膨らさなくちや、最早やり切れない。何とかして人肉の温かいやつを食ひたいものだなア」

甲「さうだから臭いと云つて居るのだ。何でも此邊に空助の娘、初稚姫と云ふ奴が来た筈ぢや。晝は到底俺達の世界ぢやないが、都合のよい事には女一人の旅、肉はムツチリと肥て甘さうだ。何とかして搜索出して御馳走に預かり度いものだ。

……オイますます臭がして来たよ。何でもこの邊の横つちよの方に休息して居るに相違ない。オイ黒、貴様はそつちから探して呉れい。この赤サンは足許から探しに着手する」

黒「オイ赤、貴様は鬼の癖に目が悪いのか」

赤「何、ちつとも悪くは無いが、此間から人間を食はないので些しうすくなつたのだ。オイ黒、貴様は見えるかい」

黒「見えてかい。イヤ、其處に金剛杖や笠が見えかけたぞ。ヤ旨い旨い今晚は  
エへ、久し振りで、どつさり御馳走を頂かうなア」

初稚姫は不思議の奴が来たものだ、息を凝らして考へて居た。さうして心の  
中に思ふやう、

初稚「妾は天下の宣傳使だ、此位な鬼が怖ろしくて、此先數千里の旅行が續けら  
れやうか。一つ腕試しに此方の方から先をこして相手になつて見よう、否威かし  
てやらう」

と膽力を据ゑ、

初稚「こりやこりや、そこな赤黒とやら申す鬼共、貴様は最前から聞いて居れば、  
大變に腹を減して居るさうだなア。人肉の温かいのが喰ひたいと云ふて居たが、  
茲で温かい肉と云へば妾一人しかいない筈ぢや。年は二八の若盛り、肉もポツテ  
りと肥て大變味がよいぞや。所望とならば喰はしてやらう。サア手からなりと、  
足からなりと、勝手に喰つたがよからう。妾は天下の萬物を救ふべき宣傳使だ。  
吾の御靈は神の聖靈に満されて居る。汝は哀れにも惡靈に取りつかれ、肉體迄が

鬼になつたと見える。妾は今日は宣傳使の門出、初めて聞いた其方の悔み事、之を救うてやらねば妾の役がすまぬ。サア遠慮はいらぬ、吾肉體を髮の毛一條残さず食ふて呉れ。神の神格に満された初稚姫の肉體を喰はば、汝赤、黒の鬼どもはきつと神の救ひに預かり、清き尊き人間になるであらう。妾は纖弱き身なれども、汝の如き荒男に喰はれ、汝を吾生宮として使ひなば、初稚姫の身體は荒男二人となつて神のために盡す非常の便宜がある。サア、早く喰つてもよからうぞ」

赤黒二人は初稚姫の此宣言に肝を潰したか、ビリビリと慄ひ出した。

赤「オイ、ク、黒、駄目だ駄目だ。サ、遠は空助さまの娘だけあつて偉い事を云ふぢやないか。俺はもう嚇し文句が何處へかすつ込んで仕舞つた。貴様何とか云つて呉れないか。歸宅で話が出来ぬぢやないか」

と慄ひ慄ひ囁いて居る。

黒「オイ赤、彼奴はバ、化物だよ。決して初稚姫さまぢやなからう。あんな柔しい女がどうしてあんな大膽の事が云へるものか。彼奴はキット化物に違ひない。グズグズして居ると反對に喰はれて仕舞ふぞ。サア、逃げる逃げる」

赤「俺だつて足がワナワナして逃げるにも逃げられぬぢやないか。ほんとに貴様の云ふ通り彼奴は、バ、化物だ。それだから空助さまに耐へて下されと云ふのに、ちつとも聞いて下さらぬからこんな目に遇ふのだ」

と二三間此方の萱の中に首を突つ込んで慄ひ慄ひ囁いて居る。初稚姫は、初稚「ホ、ホ、何とまあ腰抜けの鬼だこと、そんな鬼「みそ」に喰つて貰ふのは御免だよ。お前の身體に入つて見た所で、そんな「みそ」鬼は仕様がなから今の宣言は取り消しますよ。オイ鬼共一寸茲へ來なさい、少し神様のお話を聞かしてあげる。お前も可愛さうに人間の身體を持ちながら、何と云ふ弱い事だ。妾は初稚姫に違ひありませんよ。決して化物ぢやありません。最前からお前の囁き聲を聞いて居れば、何うやら下僕の六と八のやうだが、夫に違ひはあるまいかな。妾も初めはほんとの鬼かと思ふて身體を喰はしてやらうと云つたが、幽かに囁く話聲を聞けば六と八とに相違あるまい。お父さまに頼まれて私を試しに來たのだらう。サアここに来なさい、決して化物でもありません」

赤と名乗つて居た六は小聲になり、

六「オイ黒八、どうだらう、本當に姫様だらうか？ どうも怪しいぞ。うつかり  
傍へ往かうものなら、頭から噛りつかれるかも知れやしないぞ」  
八「さうだなア、赤六の云ふ通り、どうも此奴は怪體だぞ。それだから今晚の御  
用は根つから氣に喰はぬと云つて居たのだ。あゝ逃げるにも逃げられぬ、どうも  
仕方がない。鬼さま、いや化さまの所へ行つて斷りを云はうぢやないか。喰はれ  
ぬ先にお詫をして九死に一生を得る方が餘程賢いやり方だ」  
赤「ウンさうだな、もしも初稚姫様にお化けなされたお方、實は私は八、六と  
云ふ伊曾館の役員空助と云ふ方の下僕です。實は姫様のお身の上を案じ、且つ試  
す積りで主人の命令をうけ此處迄來たもので△います。決して悪い者ぢやありま  
せぬ。何うぞ命許りはお助け下さいませ」  
初稚「ホ、ホ、ホ、やつぱり六に八であらう。そんな肝のチヨロイ事で何うして  
此初稚姫が試されませう。お父さまもそんな腰拔男を澤山の給料を出してお抱へ  
遊ばすかと思へばお氣の毒だよ。六でもない八助だなア」  
六「もしお化様どうぞ勘忍なして下さいませ。そしてお嬢様は此處をお通りにな

つた筈ですがお前さま喰つたのでせう。喰はれたお嬢さまは仕方がありませんが、併し吾々二人の命だけはどうぞお助けを願ひます」

初稚「これ六に八、妾は初稚姫に間違ひないぞや。些と確りなさらないかい。お前、鞆丸をどうしたのだい」

八「オイ六、やつぱり化州だ。彼奴は鞆丸狙ひだよ。俺の鞆丸まで狙つてけつかる、此奴は堪らぬぢやないか」

六「鞆丸狙ひだつて、俺の金助は餘程氣が利いとると見えて、どこかへ往つて仕舞つた。貴様は八と云つて八疊敷の大鞆丸だから些つと困るだらう」

八「イヤ、俺の鞆丸も何處かへ往つて仕舞つたやうだ。吃驚してどこかへ落したのではあるまいかな」

六「ハ、ハ、ハ、馬鹿云へ、鞆丸を落す奴があるか、大方轉宅したのだらう」  
八「何だか腹が膨れたと思ふたら腹中にグレングレンやつて居ると見える。オイ

一つこんな時には御主人の云つて居られた惟神靈幸倍坐世を唱へようでないか。さうすればきつと曲津神が消えると云ふ事だよ」



六ろく「そりやよい所ところへ氣きがついた。サア一いつしよ所に惟神かむながらだ。カーンナガラ、夕、マチ、  
八へ、マセ」

八はち「カンナンガラ、夕マチ八へマセ。……何なんだか自分じぶんの聲迄こゑまで怖おそろしくなつて來きた。  
アンアンアン」

初稚はつわか「惟神かむながら靈たま幸ちは倍は坐ま世せ惟神かむながら靈たま幸ちは倍は坐ま世せ、吾家わがやの下僕しもべ六、八の二人ふたりの御靈みたまに力ちからを與あた  
へさせたまへ。惟神かむながら靈たま幸ちは倍は坐ま世せ惟神かむながら靈たま幸ちは倍は坐ま世せ」

初稚はつわか姫ひめはうとうとと眠ねむりについた。六、八の兩人りやうにんは初稚はつわか姫ひめの躰いびきを聞きいて益々ますます怖おそ  
ろしくなり、一ひとめ目めも眠ねむらず夜中よなか頃ごろまで互たがひに體からだを抱いだき合あひ、怖おそろしさに慄ふるへて居ゐた。

(大正一二・一・一六 舊一・一・三〇 加藤明子録)

## 第八章 スマート(一二八二)

夜風は寒く吹雪さへ  
まじりて淋しき草枕

露の蓐をやすやすと  
初稚姫は眠れ共

臆病風に誘はれし  
六公八公兩人は

齒の根も合はずガタガタと  
慄ひ戦き抱き合ひ

夜の明けゆくを一時も  
早かれかすと祈りつつ

宙に飛ばした魂の  
据ゑ所なき憐れさよ

暗はますます深くして  
天津空には星さへも

見えぬ許りの黒雲に  
包まれ胸はドキドキと

戦く折しも時置師  
神の命の家の紋

付けた提燈ブラブラと  
一本橋の向方より

此方に向つて足早に  
進み来るを兩人は

眺めてハツと胸を撫で  
これぞ全く時置師

神の命のわれわれを  
救はむ爲に遙々と

イソの館を立出でて  
來らせ玉ふものならむ

卑怯未練な有様を  
見せまいものと兩人は

俄にムツクと立上り  
近寄る提燈打ながめ

貴方は空助御主人か  
六公八公でムります

仰せに従ひ姫様の  
度胸を甘くためさむと

茲まで進み来て見れば  
初稚姫に似たれ共

まだ十七の初心娘  
柄に合はないことを言ふ

此奴ア、テツキリ妖怪奴  
初稚姫の御身をば

うまうま喰ひ吾々を  
騙さむ爲に姫となり

ここにグウスウ八兵衛と  
大膽至極に寝てみます

何卒々々御主人の  
お出でありしを幸に

姫の仇を吾々と  
力を併せ討つてたべ

残念至極でムいます  
私もすでに妖怪の

餌食たらむとせし所  
ウブスナ山の神徳で

貴方を茲に遣はして  
一つは姫の仇を討ち

一つは家來を助けむと お越しなさつた有難さ

早く御査べ下さんせ それそれそこにあの通り

バツチヨ笠をばひつかぶり グウグウ躰をかいてゐる

大膽不敵の化物と いふ聲さへも慄ひつつ

語れば空助打笑ひ 卑怯未練な六八よ

そも世の中に化物と 誠のあるべき筈がない

貴様は餘程卑怯者 其化物はどこにゐる

早く案内致せよと 一聲唳鳴れば兩人は

ハイハイ只今それ其處に 躰をかいて居りまする

貴方は先へ御出張 遊ばしませ腰の骨

何とはなしに慄ひ出し 私の命令を聞きませぬ

自由の身體となつたなら どんなことでも聞きませう

斯かる折しもムクムクと 笠を被つて立上る

片方の長き芒原 初稚姫は優しげに

三人の男に打向ひ

汝等三人の荒男

何用あつて眞夜中に

妾が跡を慕ひ來る

六、八、二人は兔も角も

空助などと佯つて

ここに來れる可笑しさよ

そも空助はイソ館

總務の役に仕へたる

尊き司の身を以て

吾子のことが氣にかかり

神務を忘れてはるばると

慕ふて出て來る向ふ見ず

左様の譯の分らない

妾は親は持ちませぬ

正しく惡魔の變化して

吾等の行手を妨害し

神務を遂行させまいと

企みしものと覺えたり

早々此場を立去れよ

妾は初稚姫神

汝に構つてゐる暇は

なければ是より出でて行く

汝等三人トツクリと

善からぬ相談するがよい

お先へ御免と云ひながら

蓑を被つて杖をつき

スタスタ進み出でて行く

空助後より聲をかけ  
オーイオーイと云ひ乍ら

六、八、二人を従へて  
姫の後をば追ひ来る

初稚姫はトントンと  
天津祝詞を奏上し

神歌を歌ひ進み行く  
夜はホノボノと明けそめて

あたりも明くなりぬれば  
道の片方の岩石に

腰うちかけて息休め  
少時思案に暮れにける。

初稚姫は河鹿峠の坂口の岩の上に腰うちかけ、

「昨夜現はれし怪物は合點のゆかぬ代物だナア。六、八兩人と言ひ、父の空助と

云ひ、合點のゆかぬことだナア。妾が首途の時、あの様に素氣なく云つた吾父が、

妾を慕つて追つかける位ならば、モウ少し優しい言葉をかけさうな筈。大神様の、

妾が心を試さむ爲の御計らひだらうか、何につけても合點のゆかぬことだナア」

と差俯いて思案に暮れてゐる。そこへ突然現はれたのは空助、六、八の三人であつた。

空助「オイ其方は初稚姫だないか、なぜ父があれ程呼び止めるのに待つてくれな  
いのだ。一言お前の旅立について言つておきたいことがあつた。それを忘れたに  
仍つて、後追つかけ、言ひきかしに來たのだ」  
初稚「妾はお前さまの様な卑怯未練な親は持ちませぬ。能く考へて御覽なさい。  
貴方が果して空助とやら言ふお方ならば、なぜイソの館に専心お仕へなされませ  
ぬか。何事も一身一家を捧げて神に仕へるとお誓ひなさつた空助ぢやありませんか  
か。ヤツパリ貴方も年が老つたとみえて耄碌しましたねえ。妾はイソの館の大神  
様より直接使命を受けた、年は若うても、立派な宣傳使でムいます。最早惡魔の  
征途に上つた上は、立派に使命を果す迄、空助さま何かに用はムいませぬ。早く  
御歸りなさいませ。併しお前は本當の空助さまぢやありませんか。其耳は何です  
か、獸の様にペラペラと動いているぢやありませんか。初稚姫がハルナの都に參  
ると聞き、手をまはして出發の間際に妾を邪道に引入れ、目的の妨げを致さうと  
するのだらう。いかなる魔術も初稚姫に對しては一切駄目ですよ。ホ、ホ、ホ、  
マアマア能くも巧に化けましたねえ」

空助「其方は父に向つて何といふ無禮なことを言ふのだ。これ見よ、何程耳が動いても、これは風が吹いてゐるからだ。風が吹けば耳許りか、木の葉でさへも、大木でも動くだないか、流石は子供だなア。親の心は子知らずとはお前のことだ。此空助は何程冷淡に見せて居つても、心の中には愛の熱涙が沸き立つてゐるのだ。左様なことをいはずに人間は老少不定だ。不惜身命的神業に参加するお前、これが別れにならうも知れぬと思ひ、態々ここ迄、夜の目も寝ずに、御用の隙を考へて追つかけて来たのだ。親の心もチツとは推量してくれ、初稚姫殿」

初稚「ホツホ、うまい事お化けなさいますなア。妾は二人の父は持ちませぬ、いい加減にお歸りなさい。何と云つても駄目ですよ」

六「もし姫様、此空助様はさうすると本眞物ぢやムいませぬか」

初稚「本眞物が贗物か、頭の上から足の爪先迄、能く見て御覽」

八「オイ六、姫様の仰有る通り、様子が變だぞ。御主人に本當に能く似てゐるが、何となしに腑におちぬ所があるぢやないか」

六「コ、コラ、モ、空助のバ、化物、ド、何うぢや、姫様の眼力には往生致した



か  
□

空助 □ コラ六、主人に向つて不都合千萬な、化物扱ひに致すことがあるか、八、

貴様も六と同じやうな奴だ。今日限り暇を遣はすから、モウ、イソ館へ歸るには

及ばぬツ  
□

六 □ 貴様の様な化物の乾兒になつてたまるかい。のう八公、さうではないか □

八 □ さう共さう共、本當の空助様の御家來だ。こんな耳の動く奴の家來になつて

たまるかい。コラ化州、何時だと考へてる、モウ夜明けだないか。可いかげんス

ツ込まぬかい  
□

空助 □ アツハ、六、八の兩人、若も此方が本當の空助であつたら何と致す □

六 □ ナア二、本當の空助であつた所が構ふものかい。暇を貰つたら姫様の後に従

いて、何處迄でもお供するのだ。のう八公 □

初稚 □ 六、八の兩人、一時も早く御歸りなさい、妾は飽迄一人旅でゆかねばなら

ぬ。今に此化物の正體を現はし往生さして見せるから、お前さまは早く御歸りな

さい  
□

と云ひ乍ら、天の數歌を唱へ上げた。空助は忽ち、牛の如き怪物となり、

「ウー」

と唸りを立て、目を怒らし、牙を剥き出し、初稚姫を目がけて飛びかからむとし、前足の爪を逆立て、大地の土をかいて、爪を尖らしてゐる。初稚姫は平然として天津祝詞を奏上し始めた。六、八の兩人は此姿をみて、顔色土の如くに變り、其場に打倒れ、チウの聲も得上げず慄ふてゐる。怪獸の顔をよくよくみれば、巨大なる唐獅子である。唐獅子は初稚姫をグツと睨めつけ、猛然として咬みつかむとする一刹那、後の方より「ウー」と又唸り聲、何者ならむと、後ふり返れば、遅しい大きい山犬である。山犬は大獅子に向つて、疾風の如く飛び付いた。獅子は一目散に細くなつて、逃げてゆく、山犬は獅子の跡を追跡する。初稚姫は後見送つて打笑ひ、

「ホツホ、、始めての神様の試しに會うて、お蔭で及第した様だ。ヤア六、八、最早心配は要らぬ、一時も早く吾家へ立歸り、父の空助に、初稚姫は大丈夫だから御安心遊ばせと傳へてくれ、左様ならば」

といふより早く、足早に河鹿峠を登り行く。六、八兩人はヤツと胸を撫でおろし、神言を稱へ乍ら、空助館を指して、又日が暮れては一大事と急ぎ歸り行く。初稚姫は只一人宣傳歌を歌ひ乍ら、河鹿峠を登り行く。以前の猛犬慌ただしく驅來り、初稚姫の前になり、後になり尾を掉つて、嬉しさうにワンワンとなき乍ら、驅けめぐる。初稚姫は漸く坂の頂上に達し、四方の景色を眺め乍ら、少時腰を卸して休息した。以前の猛犬は初稚姫の前に蹲まり、耳を垂れ目を細くし、尾を掉つてゐる。

「其方はどこの山犬か知らぬが、随分敏活な働きをする者だ。これから妾の家來として上げよう。ハルナの都まで従いて來るのだよ。而してお前には「スマート」といふ名を上げませう」

と云ひ乍ら、猛犬を抱へ、首筋を撫でなどして勞はつてゐる。スマートは頻りに尾を掉り、ワンワンと叫び乍ら、感謝の意を表してゐる。初稚姫は此犬を得て非常に心強くなり、宣傳歌を歌ひ乍ら、河鹿峠の南坂を下りつつ歌ふ。

神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わかける

悪あく魔まの征せい途とに上のぼり行ゆく 初はつ稚わか姫ひめの魂たましひを

査しらべむ爲ためか父ちちとなり 或あるひは巨きよ大だいな獅し子しとなり

妾わらわが首かど途とを遮さへぎりて 所しよ存ぞんの程ほどを調しらべしか

但ただしは誠まことの曲まが神かみか 心こころに解げせぬ事ことあれど

只ただ何なに事ことも一いつ身しんを 神かみに任まかせし上うへからは

假た令と如い何かなる事ことあるも 初しよ心しんを曲まげずドシドシと

人ひとにたよらず皇すめ神かみの 神かみ言ことのままに眞まこと心こころを

盡つくして往ゆかむ吾わが心こころ 假た令と曲まが津つは行ゆく先さきに

さやりて仇あだをなすとても 吾われには神かみの守まもりあり

今いま又また神かみはスマトを 吾わが行ゆく先さきの供ともとなし

與あたへ玉たまひし尊たふとさよ 神かみは吾われ等らと共ともにあり

吾われ等らは神かみの子こ神かみの宮みや いかでか恐おそれむ敷しき島しまの

大やま和と心こころをふり起おこし 八みやこルなの都みやこに蟠わたかまる

八岐大蛇を言向けて

神素盞鳴の大神の

誠をあらはし奉り

五六七の御代を詳細に

普く地上に建設し

三五教の神力を

現はし奉る神の道

進みゆくこそ嬉しけれ

あゝ惟神々々

御靈幸ひましませよ

と歌ひ乍ら進み行く。

(大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 松村眞澄録)

第三篇 曉山の妖雲

第九章 善幻非志（一一二八三）

祠の森の神殿は珍彦、静子の夫婦が神司となり、朝な夕なに奉仕する事となつた。而して二日目の夜中頃から娘の楓に神懸が始まり、數多の信者は生神が現はれたりと打喜び、八尋殿に集まり來りて、神勅を請ふもの絡繹として絶間なく、今迄森閑としてゐた此谷間は實に人の山を築き、俄に山中の都會の如くになつて來た。楓の神懸は餘り高等なものではなかつた。されど神理に暗き人々は、神が憑つて直接に一切を教ふると聞いて、救世主の出現の如くに尊敬し、嬉し涙をたらし乍ら、老若男女の嫌ひなく、ここに集まり來り、楓姫の若き娘の口よりいろいろの指圖を受けて、隨喜渴仰するのであつた。

バラモン組のイル、イク、サール、ヨル、テル、ハルの六人は何事も此楓姫の神懸のまにまに盲從して、總ての神務に忠實に奉仕してゐた。ここへ現はれて來たのは、中婆アさまの宣傳使であつた。彼の宣傳使は態と素人らしく装ひ、玄關口に立つて、

婆「一寸伺ひます、此祠の森は三五教の御神殿と聞きましたが、大變に御神徳が立つて結構さまでムいます。どうか私も一つ伺つて頂きたいのでムいますが、お世話になれるでせうか」

受付に控へてみたヨルは氣も輕々しく、

ヨル「ハイ、何なとお伺ひなされませ、それはそれは偉い神さまですよ。つい此間から神懸になられました、いろいろの御託宣を遊ばし、何を伺つても百發百中、それ故此通り大勢の參拜者が朝から晩まで引つづき、此險阻な山奥を物ともせずに参加れます。何と神力と云ふものは偉いものでせう。お前さまも餘程苦勞人と見えますが、サアズツと奥へ通つて、大神様に直接伺ひなさいませ」

婆「ハイ有難う、而して大神様とは何方でムいます」

ヨル「ハイ、楓姫様に日出神様がお憑り遊ばし、それはそれは偉い御神徳でムいます」

婆「ナア二、日出神様？ あ、それは耳よりのお話だ。それぢや一つ伺つて戴き

ませう」

ヨル「オイ、イク、奥の審神室迄案内して下さい」

イク「サア、貴方、大神様の居間迄案内致しませう」

と一人の婆を楓姫の居間に案内した。楓姫は白衣に緋の袴を穿ち、今や神靈降臨の眞最中であつた。而して二三人の信徒が神勅を乞ひ、指圖を受け、有難がつて鼻をすすつてゐる。各自に伺ひがすみ、席を退くと、あとにはイクと婆の二人、

婆は叮嚀に兩手をつき、

婆「一寸日出神様にお伺ひ致しますが、私は何と云ふ者が御存じでゝいますな

ア」

神主「其方は神を試むるのか、無禮千萬な、下りをらう……」

婆「コリヤ面白い、此婆を何と心得てゐる。大それた日出神などと申して、盲聾

を詐つても、此婆は詐る事は出来ませぬぞや」

神主「然らば汝の疑を解く爲に言つてやらう。汝は三五教の宣傳使生田の森の神

司高姫であらうがなア」

婆「成程、高姫に間違ひはない。そんならお前さま、それ程よく分るなら、妾の



伺ふ事うかが 一々こといちいち 答へて下くださるであらうなアア

神主かむぬし 『其方そのほうはイソ館やかたにまします、教主代理けうしゆだいり 東野別あづまのわけの後あとを慕したふて來きた、不心得者ふこころえものであらうがな。何程なにほど其方そのほうが一生懸命いつしやうけんめいになつても、東野別あづまのわけは見向みむきも致いたさぬぞや。左様さやうな腐くさつた神柱かむばしらではない程ほどに、チツと改心かいしんを致いたしたがよからうぞア

高姫たかひめ 『コレ、楓姫かへでひめさまお前は、つい此間このあひだまで何なんにも知しらずに居をつて、俄にはかにそんな神懸かむがかりを致いたしても駄目だめですよ。此高姫このたかひめが現あらはれた以上いじやうは、ドコドコまでも查しらべ上げねばおかぬのだ。義理ぎりてんじやう天上日ひの出神のかみの生宮いきみやは、へん、すまぬが、此高姫このたかひめでムんすぞ

え。お前まへなんぞに、決けつして日ひの出神のかみは憑うつつた覺おぼえはありませぬ、そんな山子やまこを致いたすと、誠まことの日ひの出神のかみが大勢おほぜいの前まへで面つらを曝さらしますぞや。お前まへは山口やまぐちの森もりの大蛇をろちの靈みたまだらう。悪神あくがみにのり憑うつられ、丑うしの時とき参まゐりなんどして、人ひとを呪のろひ殺ころさうとした悪靈あくれいが、お前まへの體からだに残のこつて居をつて、日ひの出神のかみの名なを使つかひ、一旗ひとばた上げようと致いたして居ゐるのだらう。

サア、何どうだ、高姫たかひめの審神者さにはに對たいし返答へんたふをなさるか。メツタに返答へんたふは出來できよまいア

楓姫かへでひめは高姫たかひめに嚴きびしく審神さにはされ、呶鳴どなりつけられたので、まだ年としもゆかぬ乙女をとめの

事こととて吃驚びっくりして了しまひ、憑靈ひようれいは逸早いちはやく脱出だつしゆつして了しまつた。楓姫かへでひめは高姫たかひめの顔かほを見て、打うち

慄ひ、

楓姫「あゝ恐い小母さま」

と泣きゐるのであつた。イクは此有様を見て、ズツと感心して了ひ、

イク「コレハコレハ、高姫様、御神徳には感じ入りました。上には上のあるも

のでムいますな」

と頻りに首をかたげて賞讃してゐる。高姫はイソ館に至り、東助にヤツと面會し、

手厳しく叱り飛ばされ、馬鹿らしくてたまらず、されど何とかして、東助を往生

づくめにしても、マ一度舊交を温めねば承知せぬ、それに就いては、東助が羽

振を利かしてゐるイソ館を何とかして困らせ、自分の腕前を見せて、東助に兜を

ぬがせ、吾目的を達せねばおかぬと、折角改心してみた、靈の基礎が又もやグラ

つき出し、祠の森の神殿に素人許りが仕へてゐると聞いたを幸ひ、信者に化け込

み、一同を往生させ、茲に自分が一旗擧げむと企みつつ、やつて來たのである。

高姫は又もや日出神と自稱する病氣が再發し、頻りに辨舌をふりまはして、珍彦、

静子其外一同を吾掌中にうまく丸めて了つた。而して朝から晩迄脱線だらけの神

憑かりを始め、再び筆先ふでさきをかき始めた。實じつに厄介やくかい至極しごくの代物しろものである。

折角せつかく治をさまつてゐた自問自答じもんじたふの神憑かむがりは再發さいはつして、頻しきりに首くびを振り、精靈せいれいと談話だんわを始め、それを金釘流かなくぎりうの文字もじで荐しきりに書き始めた。すべて精靈せいれいと人間にんげんとの談話だんわは危険きけん至極しごくなれば神界しんかいにては之これを許ゆるし玉たまはぬ事ことになつてゐる。併しかし乍ながら此高姫このたかひめは一種しゆの神經病者しんけいびやうしやであつて、時々精靈せいれいが耳元みみもとに囁ささやき、或あるひは口くちをかつて下くだらぬ神勅しんちよくを傳つたふる厄介者やくかいものである。

凡すべて人間にんげんは精靈せいれいの容器いれものであつて、此精靈このせいれいは善惡ぜんあく兩方面りやうほうめんの人格じんかくを備そなへてゐるものである。而しかして精靈せいれいが憑かかり切きつた時は、其人間そのにんげんの肉體にくたいを自己じこの肉體にくたいと信じ、又其記憶きおくや想念さうねん言語げんご迄まで、精靈せいれい自身の物ものと信しんじてゐるのである。併しかし乍ながら鋭敏えいびんなる精靈せいれいは肉體にくたいと自問自答じもんじたふする時に、精靈せいれい自身じしんに於おいて、自分じぶんは或肉體あるにくたいの中に這入はいつてゐるものなる事を悟さとるのである。而しかして精靈せいれいには正守護神せいしゆごじんと副守護神ふくしゆごじんとがあり、副守護神ふくしゆごじんなる者は人間にんげんを憎惡ぞうをする事最こともつとも劇甚げきじんにして、其靈魂そのれいこんと肉體にくたいとを併あはせて之これを亡ほろび盡つくさむ事ことを願ねがふものである。而しかしてかかる事は甚はなはだしく妄想まうさうに耽ふける者の間あひだに行おこなはるる所以ゆゑんは其妄そのまうしんじや信者しんじやをして、自然しぜん的てき人間にんげんに、本ほん來らい所屬しよぞくせる歡樂くわんらくより自みづから遠とほざか

らしめむ爲である。此高姫は自ら精靈に左右され、而して精靈を神徳無邊の日出  
神と固く信じ、其頤使に甘んじ、其言を一切信從し、且筆先を精靈のなすが儘に  
書き表はすが故に、精靈は決して高姫の肉體を憎惡し又は滅盡せむとせないの  
ある。寧ろ其肉體を使つて、精靈の思惑を遂行し、大神の神業を妨げ、地獄の團  
體を益々發達せしめむと願ふてゐるのである。併し高姫自身は吾れに憑依せる精  
靈を至粹至純なる日出神と信じ切り、一廉大神の神業に仕へてゐる積りで居るか  
ら堪らないのである。併し大神は時々精靈を人間より取りはなし玉ふ事がある。  
これは彼れ精靈をして、人間と同伴せるを知らざらしめむが爲である。何となれ  
ば、精靈なる者は、自己以外に世界あることを知らず、即ち人間なる者が、彼等  
以外に存在する事を知らないのである。故に高姫の肉體に憑つてゐる精靈は日の  
出神と自らも信じ、又高姫の肉體とは知らず、尊き或種の神と言葉を交へてゐる  
様に思つて居つたのである。又肉體に這入つてゐる事を漸くにして悟ると雖も、  
高姫の方に於て其精靈を惡神と知らず、眞正の日出神と尊信してゐる以上は、精  
靈は、決して高姫の靈魂肉體に害を加へないのは前に述べた通りである。すべて

精靈は靈界の事は自分の靈相應の範圍内に於て見ることを得れ共、自然界は少しも見る事が出来ないのである。之れは現實界の人間が靈界を見る事が出来ないのと同様である。

此理に仍つて人間が若し精靈に物を言ひ返すを神が許し玉ふ時は、精靈は自己以外に人間あるを知るが故に、實に危険である。中には深く宗教上の事を考へ、専ら心を之れにのみ注ぐ時は、其心の中に自分が思惟する所を現實的に見る事がある。斯の如き人間は精靈の話を聞き始むるものである。

すべて宗教の事は何たるを問はず、人間の心の中より考へて、世間に於ける諸々の事物の用に仍つて、之を修正せざる時は、其事其人の内分に入り込んで、精靈そこに居を定め、靈魂を全く占領し、斯くして此處に在住する幾多の精靈を頤使し、或は壓迫し、或は放逐するに至るものである。高姫の如きは、實に其好適例である。

空想に富み、熱情に盛なる高姫は常に其聞く所の精靈の何たるを問はず、悉く之を以て聖き靈なりと信じ、精靈の言ふが儘に盲從して、ヘグレ神社だとか、末

代日の王天の大神だとか、ユラリ彦だとか、旭の豊榮昇り姫だとか、出鱈目の名を竝べられ、宇宙唯一の尊き神を表はした如く、得意満面になつて、之を尊敬し、禮拜し、且其妄言を信じて、普く廣く世に傳へむとしてゐるのである。斯の如き諸精靈は其實、僅に熱狂なる副守護神に過ぎない事を知らず、又斯の如き副守は虚偽を以て眞理と固く信ずるものである。故に高姫も亦副守に幾度となく虚偽を教へられ、或は見當外れの嘘許りを書かされて、萬一其筆先の相違した時は、神が氣をひいたのだとか、御都合だとか、自分の改心が足らぬ故に混線したのだとか、いろいろの理窟をつけて少しも疑はず、益々有難く信じてゐるのである。惡靈に魅せられた人間はこんな具合になるものである。又豫て自分が教へ導き、其説を流入する所の人間を、言葉巧に説きすすめ、益々固く信ぜしめむとするものである。而して遂には精靈が肉體を全部占領し、且つ數多の人を誑惑した上、遂にいろいろと理窟をつけて、惡事を教へ、何事も神の都合だから、只吾言に従へ、いひおきにも書きおきにもない、根本の根本の歴史以前の事だから、智者學者が何程きばつても分るものでない、只人間は誠の神の申す事、日出神の調べた事を

聞くより誠まことが分わからぬものだ。故ゆゑに此この筆先ふでさきをトコトン信用しんようせよ……と勸すすめるのである。日の出ひでの神かみと稱しょうしてゐる副守ふくしゆは普通ふつうの精靈せいれいとは變かはつてゐる點てんは、自分じぶんは八岐やまた大蛇をろちの惡靈あくれいであり、金毛九尾きんまうきうびの惡狐あくこであつた、が併しかし、五六七みろくの世よが出て來くるに付ついて、何時いつ迄までも惡あくを立て通とほす譯わけには行ゆかぬから、心こころの底そこから改心かいしんをし、昔むかしから世よを紊みだして來きた自分の惡あくを悔くい改め、而しかして誠まことの神かみの片腕かたうでとなつて働はたらくのであるから、惡あくにも強つよかつたものは又善またぜんにも強つよい、故ゆゑに自分の云ふ事ことは、一切いっさいが靈れい的てきであり神しん的てきであり、且善かつぜんの究極きうきよくである……と信しんじてゐるのである。故ゆゑにかくの如ごとき精靈せいれいは人間にんげんたる高姫たかひめと同伴どうはんし往來わうらいするも、其肉體そのにくたいを害がいする事ことはない。高姫たかひめは其精靈そのせいれいを義理ぎりてんじやうひのののかみおよびあくがみ之これを崇拜すうはいし、其願使そのいしに甘んずるが故ゆゑに、精靈せいれいも又人間またにんげんの體からだに這入はいつてゐる事ことを感じかん知ちし乍ながら、却かへつて之これを自分じぶんの便宜べんぎとなし、愛あいするのである。斯かくの如ごとき精靈せいれいに迷まよはさるる者ものは、愚直ぐちよくな者ものか或あるひは貪欲どんよくな者ものか、精神せいしんに缺陷けつかんのある人間にんげんであることを記憶きおくせねばならぬ。

現今げんこんの大本内部おほもとないぶにも高姫たかひめ類似るゐじの狂態きやうたいが演えんぜられ、癡狂者てんきやうしやや癡呆者ちほうしやや強欲がうよく人間にんげんが

蝟集して、隨喜の涙をこぼし、地獄の門戸を開かむと努めて居る者のあるのは實に仁慈の神の目より見て忍び難き所である。併し乍ら、惡靈に其全肉體と靈魂を占有された者は、容易に神の聖言を受け入るる事の出来ないものである。神の道を信仰する者は、此間の消息を充分翫味して、邪神に欺かれざる様注意を望む次第である。又惡の精靈は決して惡相を以て現はれず、表面最もらしき善を言ひ、且吾膝下に集まり來る人間に對し、或は威どし或は賞揚し、……汝は何々の靈の因縁があるとか、大先祖が何うだとか、中先祖が惡を盡して來たから、其子孫たる汝が、祖先の爲に此神の命を奉じ、充分の努力をせなくてはならぬ……なぞと言つて、誤魔化し、人を邪道に、知らず知らずの間に導かむとするものである。

(大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 松村眞澄録)



治國別は浮木の森のランチ將軍、片彦將軍其他を歸順せしめ道々三五の教理を  
説き諭し乍らクルスの森迄進んで行つた。さうしてお寅に向ひ、  
治國「お寅さま、お前さまはウライナイ教の熱心な肝煎であつたが、かうして三五  
教に歸順し立派な信者となられたのは實に吾々も大慶です。併し乍ら、之から一  
度イソの館へ御參拜になり、大神様の御許しを受けて立派な宣傳使となつてお盡  
しになつては如何です。平の信者となつて行くよりも餘程便宜かも知れませぬよ  
お寅「はい、有難うムります。私の様な婆でも宣傳使にして頂けませうかな  
治國「婆だつて、何だつて貴方の身魂其者は決して老若の區別はありませぬ。老  
人は如何しても無垢な者ですから却て吾々よりも立派な宣傳使になれませう。私  
が手紙を書きますから此を以て河鹿峠を渡りイソの館に參拜し八島主さまに御面  
會の上、百日ばかりも修行して其上立派なる宣傳使となり神界のためにお盡しな  
され。それが何よりの後生の爲めですよ  
お寅「私の様な惡たれ婆でも改心さへすれば貴方の爪の垢位な働きが出来ませう  
かな。それなら之から仰せに従ひ一度參拜をして參りませう」

治國はるくに「そんなら今手紙を書かいてあげませう。之を以もつておいでなさいませ」  
と云いひ乍ながら、腰こしの矢立やたてをとり出し一枚いちまいの紙かみにスラスラと何事なにごとか書き記しるした。其文そのぶん  
面めんによると、

「治國別はるくにわけより八島主命やしまぬしのみこと様に御紹介ごせうかい申まを上げます。私わたしは今いまや途中とちうに於おいて種々しゆじゆぎつた雑多かみの神かみ  
様さまのお試ためしを頂いただき廣大無邊くわうだいむへんの御神德ごしんとくを蒙かうむり、神恩しんおんの深ふかきを感謝かんしゃし乍ながら漸やうやくクルス  
の森迄もりまで安着あんちやく致いたしました。さうしてバラモン軍ぐんの先鋒隊せんぽうたい、ランチ、片彦將軍かたひこしやうぐんは今いま  
ままつたおほかみさまの御神德ごしんとくによつて三五教あななひけうに歸順致きじゆんしました故ゆゑ、何卒どうぞ大神様おほかみさまへ御奏上ごそうじやうの  
程願ほどねがひあげ奉たてまります。何れ之等これらの人々ひとびとはも少し豫備教育よびけういくを施ほどこした上うへ、手紙てがみを以もつて御  
館かたへ參籠致さんろうじさせ修行しゆぎやうの結果けつこ宣傳使せんべんしにお取立とりたて下さる様御願やうおねがひ致いたす考かんがへなれば萬事ばんじ  
よろしく願ねがひます。扨さて此手紙このてがみの持參者ぢさんしやは小北山こきたやまのウライ教けうに牛耳ぎうじを執とつて居あ  
た、もとは浮木うきぎの村むらの女俠客をんなけふかくお寅とらと云いふ婦人ふじんでこぼります。治國別はるくにわけが出征しゆつせいの途中とちうほこら  
の森もりに於おいて片彦將軍かたひこしやうぐんの祕書役ひしよやくたりし愚弟松彦ぐていまつひこに巡り合めぐあひ、彼松彦かれまつひこは直ただちに三五あななひの道みち  
に歸順致きじゆんし小北山こきたやまのウライ教けうの本山ほんざんに參まり蝶いもり蛸わけ別まがひ、魔我彦まがひこ及お寅とらを漸やうやくにして  
御神德ごしんとくのもとに歸順きじゆんせしめたる者ものでこぼります。就ついては此手紙このてがみの持參人ぢさんにん即すなはちお寅とら

さまを宜しく願ひます。稍迷信深く脱線の氣味がムリますれど十分御教育下さるれば相當の宣傳使にならうかと存じます。左様ならば』  
と書き記しお寅に渡した。お寅は得意の色を満面に泛べ肩を怒らし治國別及び一行に別れを告げイソの館をさして只一人進み行く。

途中小北山の傍を通り兔も角一度立寄つて最愛のお菊に巡り合ひ且松姫、魔彦其他に面會し自分の悟り得た教義を云ひ聞かし、小北山の聖場をして益々榮えしめむと、參拜の途中意氣揚々として立歸つた。小北山の聖場は依然として信者が相當に集まつてゐる。然し乍らお寅の見覚えのある顔は餘り澤山に見當らなかつた。何故ならば小北山のヘグレ神社、其他の神々を誠の神と信じてゐたが、ツパリ名もなき邪神たりし事を曝露され、親族朋友知己等より嘲笑さるるのが馬鹿らしさに、前の信者はあまり寄り付かなかつたからである。さうして改革以來何とはなしに前の信者は不平に充たされたからである。今迄尊き神の生宮又は靈魂の因縁を信じ得意になつて信仰してゐたのが、何でもなし邪神であつた事をスツパぬかれ大難を小難に救はれ乍ら何とはなしに心面白くなくなつた者もあるか

らである。

お寅はスツと受付に立寄り見れば文助が依然として一生懸命に畫を書いてゐる。よくよく見れば蕪でもなく大根でもなく黒蛇でもない。傍に日の出の守護と書き記し老松の幹に紅の様な太陽が輝いてゐる。かなり立派な畫を描いて居た。お寅は突然聲をかけ、

お寅「これ文助さま、御機嫌宜しう。相變らず立派な御掛軸が畫けますな。龍神様はモウお止しなされたのですか」

目のうとい文助はお寅とは夢にも知らず、  
文助「ようお詣りなさいませ。誰方が知りませぬが奥へ御通り下さいませ。さうして今迄は此聖地もヘグレ神社や種物神社、其外いろいろの神様が祀つてムりましたが、教祖の蠓螭別さまやお寅さまが逐電されましてから、三五教の大神様を祀り代へました。それで掛軸も亦畫き替へねばなりませんので、大神様のお許しを得て此通り、松に日の出の御掛軸を認めております。貴方も御信仰遊ばすなら上げますから表具をしてお祀りなさい。日の出の世、松の世といつて之さへ祀つ

て居れば家内安全商賣繁昌、靈になつても天國へ行く旅券になりますよ」

お寅「これ文助さま、シツカリしなさらぬか。松に日の出は誠に結構だが、私は

お寅ですよ」

文助「何だか聞き覚えのある方だと思つてみました。ア、お寅さまですか、それ

はマア、よう歸つて下さいました、お菊さまは申すに及ばず皆さまお喜びでせう。

私も何だか氣がいそいそして來ました。それでは松姫さまや魔我彦さまに申上げ

ませう。一寸待つてゐて下さい」

お寅「いえいえお前はここに受付をしてゐて下さい。目の悪い人に動いて貰ふよ

りも此達者なお寅が私の居間へ歸りますから……お菊もゐるでせう。さうすれば

お菊を以て松姫様や魔我彦に通知をさせますから」

と云ひ乍ら自分の居間をさして急ぎ行く。後に文助は首を頻りにかたげて獨言、

文助「あゝお寅さまも大變に人格が上つたものだな。丸で別人の様だつた。物の

云ひ様と云ひ何とはなしに身體から光が出る様だつた。之丈長らくつき合ふて居

つた私でさへも見違へる位だから、神徳と云ふものは偉いものだな。どれどれお

寅さまが歸つて下さつた此嬉しさを神様へお禮申して來う」

と獨語つつトボトボと神殿さして進み行く。お寅は吾居間に歸るに先立ち小北山

のお宮を一々巡拜し、吾居間に歸つて休息せむとする處へ、何時のまにかお寅さ

まが歸つたと云ふ噂が立つたので魔我彦、お菊は慌てて松姫館から走り來り、

お菊「お母アさま、貴方は松彦様と宣傳のためにおいでになつてから、未だ幾何

も日が経たないのにお歸りになつたのですか。又我でも出して縮尻つたのではあ

りませぬか」

お寅「何、縮尻る處か、結構なお神徳を頂いて來たのだよ。お菊、お前も其後機

嫌よう御用をして居たのか」

お菊「はい、機嫌ようしてゐました。何卒私の事は案じて下さいませ。さうし

て萬公さまは機嫌ようしてゐましたかな」

お寅「ホ、、、、、ヤツパリ萬公のことが氣にかかるかな。いや頼もしいお前の

心掛、私もそれ聞いて安心を致したぞや」

お菊「お母さまの……マア嫌な事、直に妙な處へ氣を廻しなさるのだね」

お寅「それだつて、五三公さまは如何だとも、アクさまは如何だとも云はぬぢやないか」

魔我「お寅さま、よう歸つて下さつた。其後は此聖地も極めて圓滿に御神業が發達してゐますから、安心して下さいませ」

お寅「魔我彦さま、どうか脱線せぬ様に此聖場を守つて下さいや。私は、松彦さまの先生の治國別と云ふ立派なお方から添へ手紙を頂いてイソの館へ参り、百日の行をして立派な宣傳使となつて來る積りだから喜んで下さい」

魔我「それは至極結構です。何卒、不調法のない様に修行して立派な宣傳使となつて歸つて下さい。私もお許しさへあれば一度改心の記念に参拜したいものです」

お寅「お前も松姫様の御都合を伺つてお暇を頂き、私と一所に参拜したら如何だい。百聞は一見に如かずと云ふから、ヤツパリ一度ウブスナ山の聖地を拜んで來ねば、満足の教も出來ず、御神徳も貰へませぬぞや」

魔我「さう願へば結構ですがな……」

お菊「お母さま、魔我彦さま、之から私が松姫様に伺つて來ませう。まアゆつくりと魔我彦さまとお茶など飲つて待つてゐて下さい」  
と云ひ捨て足早に細い二百の石の階段を上つて松姫の館へ急ぎ行く。後に魔我彦はお寅に向ひ、

魔我「お寅さま、貴方はスツカリ御人格が變つた様ですな。お顔の艶と云ひ髪の毛迄が黒くなつたぢやありませんか。本當に聲迄が變つてゐるので別人の様ですわ」

お寅「お蔭様で神様の愛の熱に若やぎました。さうして信仰の光に照らされて何處ともなしに身體から光が出る様な氣分ですよ、ホ、ホ、ホ、又褒められて慢心をするると谷底へ落ちますから、もう此位でやめておきませう」

魔我「時にお寅さま、蠚蠚別さまの持ち逃げしたお金は手に入りましたか」  
お寅「魔我彦さま、お金の事なんか、まだ貴方は思つてゐるのかい。此お寅は金なんかは話を聞いても氣持が悪うなります。蠚蠚別さまも生來が淡泊な人だから、あの金をスツカリ人にやつて了ひ、今では無一物ですよ。そしてお民と仲ようし



て居ります」

魔我「何、お民と一所に居りますか。エーエー」

お寅「これ、魔我彦さま、エーとは何だ。お前はヤツパリお民に對し戀着心が残つてゐるのかな。それでは改心が出来ませぬぞや。何がエーだい」

魔我「エー事をなされましたな、と云ひかけたのですよ。エー、エーン（縁）と云ふものは不思議なものですな」

お寅「エー加減な事を云つて誤魔化さうと思つても駄目ですよ。お民も如何やら目が覺めて蠚蝨別さまと、今はホンの教の友として、つき合つてる丈けのものですよ。お民も随分改心が出来ましたからな。何れお前が立派な神徳を頂いたら私が媒介してお前と夫婦にして上げたいと思ふて考へてゐるのよ」

魔我「本當に世話をして下さいますか」

お寅「何、嘘を云ふものか。私はお民と蠚蝨別さまの様子を氣をつけて考へてゐたが、どちらにも未練がない様だ。却て魔我彦さまの方がお民の氣に入つてる様だから、マア喜びなさい」

魔我「エーへッへ、違やしませぬかな」

お寅「最初のエーとは同じエーでも大變に調子が違ますな。オホ、何と現

銀な男だ事」

魔我「お寅さま、お前さまは蝶蜩別さまに對する戀着は、最早、とれたのですか。

何うも怪しいものですな。貴女の御様子と云ひ、何だか嬉し相に若々してゐられ

ます。之は何か嬉しい事がなくては叶はぬ事だ」

お寅「これ魔我ヤン……」

と肩を平手で二つ三つ叩き、

お寅「馬鹿にしておくれな。此お寅はそんな事が嬉しいのではありません。一

旦誠の道に目が覺めた上は……阿呆らしい……戀の、金のと、よい年をして、そ

んな馬鹿げた事が夢にも思へますか。あまり人を見下げて下さいませぬ。お寅は

そんな柔弱な女とはチツと違ひますよ。ヘン、自分の心に引き比べて私の心を付

度しようとは、怪しからぬ男だな」

魔我「こりや失禮致しました。雀百迄雄鳥を忘れぬと云ふ譬もありますから……」

ツイお尋ねしたのです。御無禮の段は何卒、見直し聞直しを願ひます。どうか御機嫌を直して松姫さまの許しがあれば此魔我彦を一度ウブスナ山の聖場へ連れて行つて下さいませ」

お寅「あゝよしよし、井戸の底の蛙で世間見ずでは宣傳使等は出来ないから、一度見聞を廣くするために大神の御出現地へ参拜するのは結構だ」

かく話す處へお菊は松姫、お千代と共に歸り來り、

お菊「お母さま、松姫様がお越しでムりますよ。さア御挨拶なさいませ」

お寅は後ふり返り松姫の姿を見て、さも嬉しげに打笑み乍ら言葉穩かに兩手をつき、

お寅「これはこれは松姫様、日々御神務御苦勞様でムります。お菊のヤンチャがお世話に預かりまして嘸御迷惑でムりませう。私は治國別の宣傳使から御手紙を頂いてイソの館へ修行に參る途中、一寸御挨拶旁神様へ参拜致しました。何卒お菊の身の上、宜しくお願ひ致します」

松姫「お寅様でムりますか、よう御立寄り下さいました。お菊さまの事は御心配

くだ  
下さいますな。貴女が御出立の後はお菊さまも、文助さまも、魔我彦さまも、大  
んきやう  
勉強でムります。其お蔭で信者も日々御参拜なされ御神徳は日に日に上りまして  
まこと  
誠に御結構でムります。そしてお寅さま、貴女は大變にお顔に艶が出来ましたな。  
お髪の色と云ひ一寸見ても二十年ばかりお若うお成りなさつた様にムりますわ。  
ほんたう  
本當に御神徳と云ふものは有難いものでムりますな

お寅 『はい、何分雪隠の水つきでムりますからな、ホ、ホ、ホ、』

魔我 『アハ、ホ、ホ、ホ、さうするとお寅さまは、浮木の森で餘程浮いて來たと見えま  
すな』

お寅 『オホ、ホ、ホ、私わたしは戀人こひびとが出来できました。それ故此ゆゑこのとほ通り若わかくなつたのですよ』

魔我 『アハ、ホ、ホ、何なんだか可笑をかしいと思おもつてゐたて、到頭たうとう本音ほんねを吹ふきましたね』

松姫 『お寅さまの戀人こひびとと云いふのは瑞みづの御靈神素みたまかむすさのをのおほかみさま盞さん鳴なり大神おほかみさま様さまでせう。それは本當ほんたうに  
よい戀人こひびとをお定さだめ遊あそばしましたね。妾わらはも矢張やはり素盞すさのをのみことさま鳴なり尊みこと様さまを唯一ゆゑいつの戀人こひびとと致いたして

居をりますよ、ホ、ホ、ホ、』

魔我 『これは怪けしからぬ、お寅さまはそれで宜よいとして、松姫さまは立派りっぱな松彦まつひこ

さまと云ふ戀人否二世を契つた夫があるぢやありませんか。ちと不貞腐れぢやありませんか

松姫「第一に大神様を戀ひ慕ひ第二に夫を慕つてゐます。それで二世の夫と云ふのですよ」

魔我「ヤア、自惚氣をタツプリと聞かして頂きました。魔我彦も之で満足致します。併し一つお願ひがムりますが、暫く私はお寅さまのお伴してウブスナ山の聖場へ詣り度いのですが許して頂けませぬか」

松姫「それは願うてもなき事、實は妾より一度魔我彦さまに御修行に行つて貰ひたいと思つて居たのです。併し乍ら女の差出口と思はれぢやならないと差控へて居りました。それは結構でムりますが、お寅さま、何卒魔我彦さまをお預けしますから宜しくお願ひ申します」

お寅「はいはい私が預かりました以上はメツタの事はさせませぬ。御安心下さいませ」

魔我「然らば松姫様、暫く御暇を頂戴致します」

松姫「何卒聖地へお詣りになりましたら、松姫が宜しう申上げたと云つて下さいませ」

お寅「はい、承知致しました」

とお寅は暫し休息の上、魔我彦を伴ひ各神社を遙拜し、受付の文助や數多の信者へ挨拶を終り一本橋を打渡り河鹿峠の山口さして老の足もともいと健かに、神文を稱へ乍ら、勢ひ込んで進み行く。

(大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 北村隆光録)

## 第一章 水呑同志(一二八五)

治國別は、クルスの森の古い祠の傍にある社務所に陣取り、ランチ、片彦、ガリヤ、ケース、萬公、お寅、蝶蝮別、お民、龍公、松彦などと、一百日の間講演會を始め、三五教の教理の大體を吹き込み、漸くにしてお寅を、先づ第一着に宣

傳使でんしの候補者こうほしやとなし、添書てんしよを認めしたたてイソの館やかたに向むかはしめた。お寅とらは前ぜん述じゆつの如ごとく、  
小北山こぎたやまに立たち寄より、魔我彦まがひこを伴ともなひ、宣傳歌せんでんかを歌うたひながら、河鹿峠かじかたうげを登のぼり往ゆく。

☞ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

大海原おほうなばらは乾かわくとも 大地だいちは泥どろにしたるとも

誠まこと一つの三五あななひの 神かみの光ひかりは世よを救すくふ

治國別はるくにわけの宣傳使せんでんし クルスもりの森もりに現あらはれて

百日ももか百夜ももよの其間そのあひだ 尊たふとき神かみの御教みをしへを

授さづけ給たまひし嬉うれしさよ お寅とらは茲ここに撰えらまれて

三五あななひ教けうの宣傳使せんでんし 其候補者そのこうほしやと定さだめられ

嬉うれしき添書てんしよを渡わたされて 今いまやいそいそ伊ソ館やかた

聖地せいちをさして進すすみ往ゆく あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの惠めぐみの淺あさからず 體主靈たいしゆれいじう從したがひのありだけを

盡つくし來きたりし吾身わがみをば 愍あはれみまして大神おほかみは

清き尊き御教を

治國別の手を通し

口を通して詳細に

教へたまひし有難さ

斯も尊き神恩に

浴し奉りし吾々は

骨を粉にし身を碎き

皇大神の御爲に

仕へまつらで置くべきや

風も漸くやわらぎて

春の陽氣は立ち上り

梅の梢に一二輪

花咲き初めし春の空

谷の戸あけて鶯の

長閑な聲に送られて

進む吾身ぞ樂しけれ

浮木の森の侠客と

四邊に聞えし此お寅

今は全く三五の

神の教へに鍛えられ

鬼は變じて神となり

我欲の夢もさめ果てて

心の底より生れ子の

身魂となりし氣樂さよ

あゝ惟神々々

神素盞鳴の大御神

従ひませる神司

惡に曇りし吾靈を



研みがきて神かみの御み柱しらと  
ななさしめたまへ産うぶ土すなの

珍うづの聖せい場ぢやうを遙えう拜はいし  
謹つつしみ敬うやまひ願ねぎまつる

河か鹿しか峠うげは峻さかしくも  
吹ふき來くる風かぜは寒さむくとも

神かみの慈じ愛あいに充みたされし  
吾わが身みは春はるの心こ地ちして

心こころの園そのに花はな開ひらき  
小こ鳥とりは謠うたひ蝶てふは舞まふ

長のど閑かな身みとはなりにけり  
小こ北ぎの山やまに頑ぐわん張んばりて

名なもなき神かみに操あやつられ  
金かねと色いろとに魂たましひ

曇くもらせ居ゐたる愚おろかさよ  
魔ま我が彦ひこ汝なれも今いまよりは

お寅とらと共に皇すめ神かみの  
清きよき尊たふとき御み教をしへを

心こころに刻きみ胸むねに染そめ  
誠まこと一ひとつを立たて通とほし

曲まがの虜とりことなる勿なかれ  
心こころも勇いさみ身みも勇いさみ

どことばなしに若わかやぎて  
鬼おにをも挫ひしぐ吾わが思おもひ

力ちからの限かぎり身みの極きはみ  
盡つくさにや止やまぬ神かみの道みち

上のほる吾わが身みぞ樂たのしけれ  
あゝ惟かむ神な々々ながら

御靈幸倍ましませよ」

と歌ひ乍ら、お寅は魔我彦を従へ漸く河鹿峠の上り口についた。谷川の流は激潭飛沫を飛ばし、涼々として心膽を洗ふに似たり。木々の梢は春立ちて芽を膨み、何とはなしに春陽の氣に満たされた。二人は谷川を下り、手を洗ひ、口をそそぎ、天津祝詞を奏上し、暫し溪流の絶景を眺めながら、

お寅「岩走る此谷水のいさぎよさ

瑞の御靈もかくやまसानむ。

吾胸を洗ふが如く覚えけり

谷川おつる水の響きに」

魔我彦「この景色見るにつけても思ふかな

唯ただ二人ふたり小北こぎたの山やまを後あとにして  
進すすみ來きたりぬ神かみのまにまに  
瑞みづの御靈みたまの雄々ををしき姿すがたを。

お寅とら 河鹿峠かしかたつげはいかに峻さかしとも

神かみを慕したひて往ゆく身みぞ安やすき。

獅子しし熊くまや虎狼とらほかみの猛たけぶなる

河鹿かしかの山やまも神かみのまにまに。

登のぼり往ゆく此坂道このさかみちも何なんとなく

樂たのしかりけり嬉うれしかりけり

魔我彦まがひこ 谷水たにみづを掬むすぶ心こころはいそのかみ

古ふるき神代かみよの思おもひせらるる。

言こと依より別わけの神かみの命みことの落おち入いりし

この谷水たにみづを吞のむぞ嬉うれしき。

言こと依より別わけ天津御國あまつみくにに往ゆかむとて

掬むすびたまひしこれの谷水たにみづ。

音おとに聞きく河鹿峠かしかたうげの山風やまおろし

吾身わがみの塵ちりを拂はらふべらなり。

吹ふく風かぜは救すくひの神かみのみいきぞと

思おもへば嬉うれし今日けふの旅路たびぢよ

お寅とら 『いざさらば水みづに名残なごりを惜をしみつつ

進すすみて往ゆかむイソの館やかたへ』

魔我彦まがひこ「いそいそとお寅とらの方かたに従したがひて

吾われも往ゆかなむイソの館やかたへ」

斯かく歌うたひ終をはり又またも歩ほを起おこした。魔我彦まがひこは急坂きふはんを登のぼり乍ながら歌うたひ出だしたり。

「サアサアこれから坂道さかみちだ お寅とらの方かたよ氣きをつけよ

道みちには高たかい石いしがある ウントコドツコイ、ドツコイシヨ

谷たにの流ながれは涼そう々と 琴ことをば弾たんじ笛ふえをふき

吾等われら二人ふたりの往手ゆくてをば 祝しゆくする如ごとく聞きこえ來くる

あゝ惟かむながらかむながら神かむながら々々 高姫たかひめさまに従したがひて

北山村きたやまむらに本山ほんざんを 築きづきて教をしへを開ひらきたる

曲まがつた心こころの魔我彦まがひこも 小北こぎたの山やまの聖場せいぢやうで

松彦司まつひこつかきに救たすけられ 全まつたく迷まよひの雲くもも晴はれ

三あなな五ひけう教きしゆんに歸順きしゆんして 初はじめて進すすむイソ館やかた

今迄神にいろいと

背きまつりし罪科は

假令山程ありとて

仁慈無限の大神は

直日に見直し聞直し

救はせ給ふと聞きしより

創もつ足の吾乍ら

一切萬事神様に

お凭れ申して進み往く

大空渡る月影も

一度は雲に蔽はれて

姿をかくす事あるも

晴るればやはり元の月

四方の山野を照らすごと

神に目醒めた魔我彦の

心の空の日月は

再び茲に輝きて

誠の神をよく悟り

松姫司に許されて

珍の聖地に詣で往く

吾身の上こそたのしけれ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

如何に嶮しき此坂も

神の守護りのある上は

如何でか進み得ざらむや

ウントコドツコイ　ハアハアハア　息いきが苦くるしうなつたれど

こんな所ところで屁へ古こ垂たれて　どうして神業しんげふが務つとまるか

お寅とらの方かたよお前まへさまは　何なんと云いつても年とし寄りだ

未まだ年とし若い魔我彦まがひこが　これ程ほど息いきが苦くるしのに

お前まへは平氣へいきな顔かほをして　それ程ほどドンのぼ登のぼられる

ほんに不思議ふしぎな事ことだなア　是これを思おもへば魔我彦まがひこは

まだ改心かいしんが足たらぬのか　ウントコドツコイ　ハアハアハア

思おもつたよりはきつい坂さか　一方いっぼうは斷崖だんがい屹立いきつりつし

一方いっぼうは千仞せんじんの深ふかい谷たに　一足ひとあしあやまり踏ふみ外はうし

肝腎かんじん要かなめの生命せいめいを　落おとすやうな事ことがあつたなら

私わたしは何なんと致いたさうか　此世このよの中なかに何なに一つ

残のこる事こととてなけれども　折角せつかく人ひとと生うまれ來きて

尊たふとき神かみの神業しんげふに　仕つかへずもろくも幽界いうかいに

往ゆくよな事ことがあつたなら　吾わが一生いつしやうの不覺ふかくなり

守まもらせたまへ大御神おほみかみ

道みちの隈手くまても恙つつがなく

進すすませたまへ惟神かむながら

神かみの御前みまへに願ねぎまつる

ウントコドツコイ ドツコイシヨ だんだん坂さかがきつなつた

調子てうしにのつてお寅とらさま 倒こけないやうにしてお呉くれ

私わたしは心こころにかかります あゝ惟神かむながらかむながら々々

神様かみさま御守護ごしゆごを願ねがひます ウントコドツコイ ドツコイシヨ

ハアハアハアハア息切いききれる ころで一服いつぶくしよぢやないか

云いへばお寅とらは振り返かへり、

魔我彦まがひこさまよ若わかい身みで 弱音よわねを吹ふくにも程ほどがある

左様さやうな事ことで天地あめつちの 神かみの御用ごようがつとまるか

私わたしのやうな年寄としよりが 難なんなく登のぼる此坂このさかが

夫程それほどお前まへは苦くるしいか 合点がてんの往ゆかぬ事ことだなア



お前は矢張り曲神が

お腹の底に潜伏し

聖地に往くの怖がつて

悶へて居るに違ひない

早く心を取り直し

副守の奴を逸早く

體の外に追ひ出して

至粹至純の靈となり

此谷川を流れ往く

清水のやうな靈となり

瑞の御靈を心から

尊信なして一心に

天津祝詞を奏上し

くだらぬ歌を止めなされ

お前はいつも喧しい

口許りの廣い人

嶮しき坂を登る時や

口をつまへて息凝らし

一步先に目をつけて

二階の階段登るよに

静に静に往きなさい

さうする時は如何程に

嶮しき坂も安々と

いつの間にやら登れます

これが第一坂道を

往く旅人の秘訣ぞや

一里許りも往つたなら

祠の森の聖場が

吾等二人を待ち顔に  
清き尊き神司

數多まします事ならむ  
もう一息ぢや魔我彦よ

心の駒に鞭つて  
勇み進んで往きませう

祠の森の神様に  
お頼み申して登るなら

如何なる嶮しき山道も  
平野を分けて進むごと

いと易々と知らぬ間に  
聖地に進み得らるだる

あゝ惟神々々  
神素蓋鳴の大御神

尊き恵を賜はりて  
此魔我彦に力をば

與へて登らせたまへかし  
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひ乍ら辛うじて祠の森の聖場に辿りついた。此處には數多の老若男女が蝟集し一齊に天津祝詞を奏上する聲、谷の木魂を響かして居る。お寅は魔我彦と共に受付の係り【ヨル】の案内にて社の前に導かるる事となりける。

第一二章 お客さん(一二八六)

祠ほらの森もりの玄關げんくわん口ぐちには、例れいの如ごとくヨルが受付うけつけをやつてゐる。そこへ深編笠ふかあみがさを被かぶつた雲くも突つく許ばかりの大だいの男をとこ現あらはれ來きたり、底そこづつた太ふとい聲こゑで、

男をとこ「拙者せつしやはウブスナ山やまのイソの館やかたより參まゐりし者ものでござる。高姫殿たかひめどのはここにゐられる筈はず、一寸ちよつと内々ないないお目めにかかりたいと申まをし傳つたへて下ください」

ヨル「ハイ、申傳まをへぬ事ことはございませぬが、御姓名ごせいめいを承うけたまはらなくては、何なんと云いつても義理ぎりてんじやうひ天上日てんじやうひ出神でしんの生宮様いきみやさまでございますから……」

男をとこ「如何いかにも申遅まをれしました。今少いますこし様子やうすがあつて名乗なり難がたい場合ばあひでございますから、只ただ一口ひとくちといふ名なのつく男をとこだといつて貰もらへば宜よろしい。そしてイソの館やかたの重ぢやう要えうなる

職しやくに就ついてゐる者ものだと御傳おつたへ下くださらば、高姫殿たかひめどのには成程なるほどと合點がてんがゆくでせう」

ヨル「あなたはイソの館の重要な役人様と聞きましたが、私はバラモン教から  
歸順致しましたヨルと申すものでムいます、何分に宜しく御願いたします」

男「あゝヨルといふ男はお前であつたか、五十子姫殿より確に承はつてゐる。そ  
れは御苦勞だ。一度イソ館へお参りなさるがよからう」

ヨル「ハイ、有難うムいます。かうして御用をさして戴いてゐるものの、肝腎の  
御本山を知らいでは話も出来ませぬので、参りたいのは山々でムいますが、日出  
神の生宮様が……まだ身魂が研けないから、此方が許す迄参拜してはならぬと仰  
せられますので差控えてをります。どうぞ早く靈を研いて聖地のお庭を踏まして  
戴きたいものでムいます。聖地も知らずに受付をして居りましては何だか氣掛り  
でなりませぬ」

男「兔も角も、トといふ名のついたものが内證で折入つて話のしたい事があると  
云つて居ると傳へて下さい」

ヨルは、

「承知致しました。暫くここにお待を願ひます」

と云ひすて、高姫の居間に急ぎ、奥の間の襖をソツと開き、見れば高姫は脇息に凭れ、何か思案にくれてゐる最中であつた。

ヨル「もし、日出神様、貴女にお目にかかりたいと云つて、イソの館からトと名のついた大きなお方が見えましたが、内證でお話申し上げたい事があると云つてお出になりましたから、一寸御報告申し上げます」

高姫「ナニツ、イソの館から、大きな男の、トといふ名の付いたお方がお出でになつたと申すのか」

ヨル「ハイ、それはそれは大きな男でムいます。そして聖地の最も高級な職務に仕へて居るお方だと仰有いました」

高姫は嬉しげに打ちうなづき、

高姫「ヤア、ヨル殿、お目にかかると云つておくれ。併し暫く次の間に控えて居つて下さい、今すぐ行つて貰ふと、此方の準備が出来ぬから、私が此鈴を叩いたら、ソロソロと出てゆくのだよ、それ迄控室で煙草でも呑んで待つて居て下さいヨル「ハイ、承知致しました。どうぞ鈴をしつかり叩いて下さい、さうすれば其

音を合圖にお迎へに参りますから……」

高姫「あゝさう頼む。併しヨルや、日出神が許す迄、誰にもトと云ふお方がみえ

たとは云つてはなりませんぞや」

ヨル「エへ、へ、へ、どんな秘密でも申すよなヨルぢやムいませぬ、まづ御安心な

さいませ。貴女は日の出の御守護、私はヨルの守護でムいますから、ヨルのお樂

みも結構でムいますワイ」

高姫「コレコレ、ヨル、いらぬ事を云ふものぢやありません。次の間に、サア早

く控えなさい。そして受付は誰に頼んでおいたのだい」

ヨル「ハイ、ハル公に頼んでおきました」

高姫「ウンよしよし、それで能い、あの男は氣の利いた人間だからなア。お前も

トといふ人がお出でになつたら氣を利かすのだよ」

ヨル「へ、へ、へ、委細承知致しました」

と頭を掻き乍ら、次の間に行つて、高姫の合圖を待つ事とした。高姫はツツと立

つて、そこらの窓を覗き乍ら、一人も人のゐないのにヤツと安心したものの如く、

胸をなでおろし獨言、

高姫「何と云つても、ヤツパリ男だなア、あのよな氣強い事を、東助さまは仰有つたので、チツと許り恨んで居つたが、ヤツパリ大勢の人の前だと思つて、あのよにつれなく言はんしたのである。あゝあ、男の心を知らずにすまぬ事を致しました。なア東助さま、その優しいお心を承はれば、最早高姫はこれで死んでも得心でムんす。ドレ、顔でも作つて髪をなであげ、着物を着替にやなるまい」と俄に白いものをコテコテと、念入りにぬり立て、髪を政岡に結び、着物を新しいのと着替へ、紫の袴をゾロリとつけ、赤い襟を一寸出し、鏡臺の前に立つたり坐つたりし乍ら、

高姫「あゝこれでよい、これでよい、三國一の、言はば婿どのが来るやうなものだ。これで高姫もいよいよ願望成就だ。なア東助さま、ヤツパリ幼馴染はよいものですなア。マア能う来て下さつた。縁あればこそ子迄なした仲だムんせぬかい。本當に枯木に花の咲いたよな心持が致しますぞや。ドコともなしに男らしいお方、さすが高姫の思ふ丈あつて、空助さまの一段上となり、副教主の地位迄進ましや

んしたお方だもの、高姫が氣をもむのも無理はムいませぬわいの。ドレドレいつ迄もおまたせ申してはすまない、モウこれ文化粧した上は、何時お越しになつても差支ない。併し何とはなしに恥かしいやうな氣がして來た。ホ、ホ、ホ、年はよつても何だか昔の事が偲ばれて、顔がパツとあつくなつたやうだ。ホンに女の心と云ふものは優しいものだ。此初心な心を東助様が御覽になれば、キツと御満足なさるだろ、イヒ、ホ、ホ、ホ、あゝコレコレ、ヨル公や、モウ可いから、トと云ふお方に、さういつて來て下さい」

と鈴を叩くの忘れて了ひ、なまめかしい聲で呼んでゐる。ヨルは、モウ鈴がなるかなるかど待つてゐたのに、思ひ掛けない高姫の聲を聞いて、襖を開き恐る恐る首をニコツと出し、

「日出神様、何ぞ御用でムいますか」

と云ひ乍ら、顔をあげて見ると、高姫はうつて變つて、立派な装束をつけ、白いものをコテコテとぬり、頬邊の皺も何もツルツルに埋まつてゐる。ヨルは驚いて、  
「イヤア、これはこれは、日出神様、何とお若うおなりなさいましたなア。ヤア



これでよめました。ヤツパリ神様でも、ありますかいな、へーん、お浦山吹きで  
ムいます」

高姫「コレ、ヨル、餘り冷かすものぢやありませんよ。サ早く、ト様を御案内し  
てお出で」

ヨル「（芝居口調）エツへ、へ、へ、確に……承知……仕りました、急ぎ参上仕  
ります」

高姫「コレ、ヨル、何を云つてゐるのだい、早く行つて來なさいよ。ホんにホ  
んに、氣の利かぬ男だなア」

ヨル「日出神さま、マア使つてみて下さい、中々能う氣が利きますで……」  
と云ひすて、表へかけ出し、大の男に向ひ、

ヨル「これはこれは、ト様、日出神様に申上げました所、一寸少時御思案遊ば  
し、容易に御返事を遊ばしませぬので、此ヨルがいるいと申上げました所、折  
角はるばるお出で下さつたのだから、義理にでも會はねばなるまい。何を云つて  
も、義理を重んずる義理天上日出神だと仰有いまして、奥へ御案内せいと仰せ

……サア私わたしについてお出いで下くださいませ。随ずい分ぶんきれいな方かたでムこいますよ」

男をとこ「ハイ有あり難がたう、併しかし少すこしく内密ないみつの用ようで参まゐつたのですから、被物かづきは此儘このままで願ねがひたい、差支さしつかへムらぬかなア」

ヨル「そんな事ことに氣きの利きかぬようなヨルぢやムいませぬ。ヨルの守護しゆごのヨル公こうでムこいますよ。へッへ、へ、へ、」

男をとこ「アハ、へ、へ、然しからば御案内ごあんない、お頼たのみ申まをす」

とヨルに導みちびかれ、高姫たかひめの居間ゐまに足音あしおと高く、ドシンドシンと進すすみ行く。高姫たかひめは一足ひとあし近付ちかづく足音あしおとに胸むねをドキ……ドキとさせ乍ながら、戀人こひびとの入いり來きたるを、一息ひといき千秋せんしうの思おもひにて待まつてゐた。そして大男おほをとこが襖ふすまを開ひらいた時は、恥はづかしさが一時いちじに込こみ上げあて來きたと見みえ、グタリと俯うつむいてゐた。

男をとこ「御免ごめんなさいませ、高姫たかひめさま、先日せんじつは失禮しつれい致いたしました、定さだめて御立腹ごりつぶくでムこいませうな」

高姫たかひめはやうやう口くちを開ひらき、

東助様とうすけさま、能よう尋たづねて來きて下くださいました。本當ほんたうに女子をなごの至いたらぬ心こころから、お恨うらみ申まを

しまして誠に濟みませぬ……コレお前はヨルぢやありませんか、氣を利かすと云つたぢやないか」

ヨル「ハイ、承知致しました。どうぞ、シツポリとねえ、お楽しみ遊ばせ、ト様と……」

高姫「エ、いらぬ事を云ふものぢやありませんか。お客様に失禮ぢやありませんか」

ヨルは両手で頭を抱へ乍ら、腰を屈めて、スゴスゴとここを立去つた。

高姫「モシ、東助様、どうぞ被物を取つて下さいませ、そして此居間は誰も來ま

せぬから、どうぞ打寛いで、御ゆるりと御話を願ひます」

男「何だか體裁が悪くつて、昔の事を思ひ出し、年がよつても恥かしくなりまし

たよ、アツハ、ハ、ハ」

高姫「モシ東助さま、私だつて、ヤツパリ恥しいワ、エルサレムの山道でねえ、

ホ、ハ、ハ」

男は「高姫殿、御免被ります」と被物をパツと除つた。見れば東助にはあらで、

時置師の神空助であつた。

高姫「ヤ、貴方は時置師神様……マアマア、お腹の悪いこと……」

時置「アハ、東助さまだと宜しいに、誠に不粹な男が参りまして、さぞ御迷惑でムいませう」

高姫「これはこれは能くこそ御入来下さいました。お尋ね下さいました御用の筋は、如何な事でムいます」

時置「實の所は、私はイソの館をお暇を頂き、此處へ参つたのです」

高姫「それは又、神徳高き貴方が、何うして左様な事にお成り遊ばしたのでムります」

時置「お前さまの前で、こんな事は申し上げにくい、實の所は東助様と事務上の争ひから、止むを得ず、拙者は辭職したといふのは表向、實は東助さまに放り

出されたのですよ」

高姫「それはマアマア何とした氣の毒な事でムいませう。東助さまもそんな悪い方ぢやムいませなんだのになア、どうしてそんな氣強いお心になられたのでせうか、人間の心といふものは分らぬものでムいますなア」

時置ときおか「高姫たかひめさま、貴女あなただつてさうでせう。はるばると自轉倒島おのころじまから後あとを慕したつてお出いでなさつた親切しんせつを無むにして、あの通り大勢おほぜいの前まへで肱鐵ひざてつをかまし、恥はぢをかかすやうな人ひとだもの、大抵たいてい分わかつたものでせう。私わたしだつたら、貴女あなたのやうな親切しんせつな御方おかたなら、何どうしてあんな氣強きづよい事ことが出来できませう」

高姫たかひめ「そらさうですなア、本當ほんたうに東助とうすけさまは無情むじやうな方かたですワ。若わかい時ときはあんな水みづ臭くさいお方かただなかつたですがなア」

時置ときおか「あれ丈だけ、東助とうすけさまのやうに澤山たくさん女をんながあつてはたまりませぬワイ。イソ館やかたの今子いまこ姫ひめさまだつて、五十子いそこ姫ひめさまだつて、夫をとのある身みでゐ乍ながら秋波しゅうはを送おくり、其外そのほか聖地せいぢの女をんなは老若らうじやくの嫌きらひなく、箸はしまめな方かただから、皆みなつまんでゐられるのです、それを前まへさまが御存ごぞんじないものだから、あんな不覺ふかくを取とつたのです。私わたしなどは御存ごぞんじの通り不粹ぶすいな鰥鳥やもめどりですから、牝猫めねこ一匹いっぴきだつて、見向みむいてもくれませぬワ。ア

ツハ、ハ、ハ、」

高姫たかひめ「貴方あなたは本當ほんたうにお偉えらいですな。よう獨身どくしんで今迄いままで御辛抱ごしんぼうなさいました。私わたしも貴方あなたのやうな夫をとがあつたら、何程力なにほどぢからになるか知しれませぬがなア、ホツホ、ハ、」

と顔赤らめ、袖で目をかくす。

時置「イヤもう、高姫様にきつう冷かされました。腹の悪い事いつて下さるな、

何だか此時置師も妙な気分になりますワ」

高姫「どうぞ、貴方、今晚ゆつくりとお泊り下さいませ。そして外の間は役員共

が休みますので、不都合でムいます。どうぞ私の居間で、失禮乍ら、おやすみ下

されば、お足でも揉まして頂きます。サ、マア一杯お酒でもおあがり下さいませ」

時置「ヤア、これは有難い、暫く神様のお道に入つて、お酒を心得て居りました

が、今晚はここでゆつくりと頂きませう。高姫様のお酌で、何とマア、こんな結

構な事は近年ムりませぬワ、アツハツハ、」

高姫「モシ時置師様、貴方は三五教の三羽鳥といはれたお方でせう、バカらしい、

東助如きに放り出されて、此後何うなさる積りですか、一寸の蟲も五分の魂とい

ふ事がムりませう」

時置「それで實の所は、ソツと御相談に参つたのですよ。何分生田の森以來、特

別の御昵懇に願つた仲なのですからなア」

高姫「左様左様、私も又貴方のお館の守役となりましたのも、何かの因縁で△いませう。どうぞ空助様、私と力を併せて、東助の高慢な鼻を挫き、三五教の爲に彼を改心さしてやる氣はありませぬか」

時置「さうですなア、貴方と一所に願へば、大變面白いでせう。併し生田の森は何うなさる積ですか」

高姫「ハイ生田の森は、駒彦に一任しておきましたから、私が假令一年や二年歸らなくても大丈夫ですよ。一つ貴方、此處でになり一旗擧げちや何うで△いませうかな」

時置「イヤ此奴ア妙案です。私の様な老ぼれでもお構ひなくば御世話になりませう。併し私には初稚姫といふ一人の娘が△います。それは御承知で△いませう。實の所は娘が可愛いので、繼母にかけまいと思ひ、今迄獨身生活をやつて來たのですが、最早娘も一人前の宣傳使となりましたので、私も神様の御用を勤め乍ら、氣樂に餘生を送りたいのです」

高姫「あの可愛らしい初稚姫さまの……私は假令繼母にもせよ、母となるのは満

足でぞくムこさいます。キツト大切たいせつに致いたしますから、御安心ごあんしん下さいませ』

と妙めうな目めをして、斜はすかに時置師ときおかしの顔かほを睨にらんでゐる。

時置ときおか『サア高姫たかひめさま、一杯いっぱい行きませう』

と杯さかづきをわたし、ドブドブと徳利とくりから注ついでやる。高姫たかひめはえもいはれぬ嬉うれしさうな

顔かほをして、キチンと兩手りやうてに杯さかづきを持ち、鼠ねづみのやうな皺しわのよつた口くちで、グーツと呑のみ、

懐ふところから紙かみを出だして杯さかづきをソツと拭ふき、首くびを二つ三つ振ふつて、杯さかづきを兩手りやうてにささげ、手て

を左右さいうさに體からだグチふり乍ながら、

高姫たかひめ『モシこちの人ひと、返杯へんぱい致いたませう』

とさし出だす。時置師ときおかしは、

時置ときおか『アツハ、ハ、ハ』

と笑わらひながら杯さかづきを受取うけとり、なみなみとつがしてグツと呑のみ、

時置ときおか『せう せうと言いつて鳴なく鳥とりは

鳥とりの中なかでも鰐やもめ鳥とり



あゝコリヤコリヤ」

と調子てうしにのつて手てを拍うち歌うたひ出だした。高姫たかひめは空助もくすけのこんな打解うちとけた姿すがたを見みた事ことは始はじめてである。「なんと面白おもしろい可愛かあいい人ひとだなあ」と思おもひ乍ながら、

高姫たかひめ「三五教あななひけうの大元おほもとで 三羽鳥さんばがらすの空助もくすけさまは

月つきか花はなかよ、はた雪ゆきか 見みれば見みる程ほど美しい

こんな殿御とのごと添そひぶしの 女をんなはさぞや嬉うれしかる

ヨイトナ ヨイトナ ドツコイシヨ ドツコイシヨ」

と手てを拍うつて、調子てうしに乘のり歌うたひ出だしたり。

空助もくすけ「酔よふては眠ねむる窈窕えうてう高姫たかひめの膝ひざ

醒さめては握にぎる堂々だうだう天下てんかの權けん」

と博文もどきに高姫の膝を枕に、足を上げ、手を拍ち打解けて歌ひ出した。

高姫「三五教の其中で私ほど仕合せ者が又あるか

三羽鳥の一人と 時めき渡る時さまを

夫に持つて意地悪い 東助さまの向ふ張り

これから一つ堂々と 旗擧致してみせませう

日出神の義理天上 其神徳は此通り

譯の分らぬ奴共を アフンとさせねばなりませぬ

ホんに嬉しい事だなア こんな結構な所をば

高山彦や黒姫に お目にかけたら何うだらう

何でもかんでも構やせぬ ホンに目出たいお目出たい

サアサア時さま ねよかいな 遠音に響く暮の鐘

埒求める群鳥 小鳥も吾巢へ歸るのに

いつ迄起きてゐたとせうがない ヤートコセイーヨーイヤナ

アレワイセー、コレワイセー  
サツサ、ヤットコセー」

かかる所へヨルは走り来り、

ヨル「モシ、高姫様、お呼びになりましたか、何とマアお樂みの最中を失禮致しました」

高姫はビツクリして頓狂な聲を出し、

「コレ、ヨル、誰が呼んだのだい、彼方へいつてなさい、本當に氣の利かぬ方だなア」

ヨル「ハイ、實の所は次の間に控えて御様子を承はつてみました。あんな事云つて貴方に危害を加へるのぢやあるまいかと、受付はそつちのけにして、イル、イク、サール、テル、ハル、楓さま迄が、次の間で貴方方の御話を一伍一什聞いてみましたよ。マア此分ならば結構でムいますワ、お目出たう」

高姫は燒糞になり、

高姫「此方は私の夫だよ。お前も聞いてをつただらうが、昔からの許嫁だから、

別に隠す必要もないのだ、サア彼方へ行かつしやれ」

ヨル「ハイ、承知致しました。甘い事仰有いますワイ、コレコレ楓さま、イル、イク、サール、ハル、テル、彼方へ行かう、グツグツしてると、高姫様が、事にヨルと、頭をハルと、いふテル……でもない。これから、夜にイルと、高姫さまとトさまのイクサールが始まるのだから、サアサアあちらへ控えたり控えたり、ホンにホんに、仲のいい事だ、お目出たいなア」

と云ひながら、七人は足音高く、ドスドスドスと表へ駆け出した。

高姫「コレ時さま、起きなさらぬかいな、意地が悪い、若い奴といふ者は、物珍し相に仕方のないものですよ。最前から貴方との話を、皆次の間で聞いてゐたのですもの」

時置「アハ、、、、そりや面白い、何れ年が老つて、結婚をせうと云ふのだから、チツと度胸がなくちゃ駄目だ。一層の事いいぢやないか、披露する必要もなく

……：なア、高ちゃん」

高姫「さうですなア、私もトちゃんがお出でになつてから、何だか気がイソイソ

して心強くなりましてワ。サ就寝みませう」

時置「それだと云つて、今すぐに休む譯にや行くまい。御神殿へ行つて御禮を申上げ、そして時置師と高姫が臨時結婚を致しますと申上げて來たら何うだらうなア」

高姫はプリンと背中をそむけ、

高姫「コレ時さま、臨時結婚なんて、厭ですよ、永遠無窮の結婚でなくちや嘘ですわ」

時置「さうだと云つて、さう俄に大層な婚禮式も出來ぬぢやないか、今晚は一寸假結婚としておいて、互に氣に入つたら玉椿八千代迄も契るのだ。想思の男女の事だから、マアゆつくりと楽しんで、婚禮迄に互の長短を調べて、いよいよ兩方から、これならば偕老同穴を契つてもよいといふやうになつたら、それこそ改めて公々然と結婚式を擧げやうぢやないか」

高姫「あてえ今晚は、體の都合が悪うムいますから、御禮はこらへて戴きます、お客さまのある時に神様へ參るものぢやありませんからな」

時置ときおか「月に七日のお客さまがあるといふのかな、ソリヤ假結婚式も駄目だないか」  
高姫たかひめ「ホツホ、合點の悪いお方だこと、お客さまといへば此人だよ」  
と細い目をし乍ら、時置師の肩をポンと叩いた。時置師はワザとグナリとし乍ら、  
細い目をして、  
時置ときおか「エヘツへ、」

こんな話をし乍ら二人は燈火を消して、睦むつまじく一夜を明しける。

(大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 松村眞澄録)

### 第一三章 胸の轟むね とどろき（一二八七）

高姫たかひめは思おもひもよらぬ立派な夫を持ち、ますます鼻息荒く、翌朝よりは義理天上  
日の出神ひの でのかみを又またもや矢鱈やたらにふり廻まはし出した。時置師神ときおかしの かみは朝あさの間早まはうから、神しん殿でんに參さん  
拜ばいすると云いつて出でて行いつた。跡あとに高姫たかひめは火鉢ひばちを前まへにおき、キチンと坐すわり乍ながら長ながい

煙管で煙草をポカポカふかしてゐる、そして鈴をチンチンと叩いた。ヨルはコワゴワ乍ら頭を掻きもつて、襖をソツとひらき、

「へ、御免なさいませ」

と身體を半分つき出し、早くも逃げ腰になつてゐる。

高姫「コレ、ヨル公、何と云ふ恰好だいな。其腰は何だい、みつともない、サツ

サとお這入りなさい」

ヨル「へー、何分夜通し、使つたものですから、とうとこんな腰になりました。

本當に世界中一所によつた様な心持でムいましたよ、エへ、へ、へ、」

高姫「お前は、私たちのヒソヒソ話を聞いてゐたのだな」

ヨル「ハイ、エ、へ、世界中、よつた様だと、貴女が仰有つたものだから、私も

氣が氣でなく、もしもこんな所へ世界中押寄せて來うものなら、貴女の前の夫が

交つてゐるに違ひない。さうすりや大喧嘩が始まるだらうと、捻鉢巻でチヤンと

夜通し控えてゐました、先づ先づ無事で岩戸開きも相すみ、お目出度うムいます、

エツへ、へ、へ、何分ヨルの守護でムいますから、此ヨル公は夜分は寝られませぬ

ので……」

高姫「外の連中は何うして居つたのだい」

ヨル「ハイ、次の間で六人乍ら、竝列致しまして、御招伴に、ラマ教の修業を致して居りました。随分勢のよいものでしたよ」

高姫「エーエ、困つた連中だなア、サ早く御膳の拵へをしておくれ」

ヨル「ハイ畏まりました。併しお膳は一つですか、二つにしませうか」

高姫「そんなこた言はいでも、大抵氣を利かしたら何うだいなア」

ヨル「そんならお二人さまですから、二つに致しませうか」

高姫「エーエ、氣の利かぬ男だなア、二つは即ち一つ、一といへば二を悟る男でない」と誠の御用には立ちませぬぞや」

ヨル「どうぞハツキリ云つて下さいませ。二つか一つかと云ふ事を……」

高姫「エーエ、よいかげんに考へておきなさい。大抵分つて居るだらう」

ヨル「なる程、や分かりました。昨夕は二つでしたな、そんなら二つに致しませう。

据膳くはぬは男の中でないと云ひますから、イツヒ、ゝゝゝ」



と云ひ乍ら、舌をチヨツとかみ出し、腮を二つ三つしやくり出でて行く。

高姫は煙管で火鉢をポンと叩き乍ら、

高姫「あゝ惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世。何卒々々時さまと末永く添はれまし

て、神界の爲に結構な御用が出来ます様に………」

と祈つてゐる。そこへ時置師の神は神殿の禮拜を了り、ニコニコし乍ら歸り來り、

時置「ヤア高ちゃん、えらう待たせました。さぞお淋しいこつてムりませう」

高姫「コレ時置師の神さま、誰が聞いているか分りませぬよ。高ちゃんなんて言つ

て貰ふと、サツパリ威信が地におちます。義理天上日出神と云つて貰はにやなり

ませぬぞや」

時置「ヤツパリ日出神で立て通す積りですか。成程そいつあ妙だ。宜しい、そ

んならこれから日出神様と申上げませう」

高姫「何ですか、改まつた物の云ひやうをして、本當に白々しい」

時置「そんなら、山の神様、何と申したらいいのですか」

高姫「義理天上日出神といふのだよ」

時置ときおか「よしよし、そんなら、これから、さう申しませうかな」

高姫たかひめはツーンとすねて、肩かたをプリツとふり、背せなか中なかを向むけ、

高姫たかひめ「勝手かたてになさいませ。どうでこんなお多福たふくはお氣きに召めしますまいからなア、

へん」

時置ときおか「アツハ、ハ、ハ、芋蟲いもむしの樣やうに、能ようプリンプリンと遊あそばすお方かただなア」

高姫たかひめ「あゝ貴方あなた、耳みみが動うごくぢやありませんか、あらマア不思議ふしぎなこと」

時置ときおか「私の耳みみの時々ときとき動うごくのは、生うまれつきだよ。それだから時ときと云いふのだ。お前まへだ

つて、歩あるく拍子ひやうしに尻しりをふるだらう。夫それ位くらゐな大おほきな尻しりでさへもプリンプリンふ

るのだから小ちひさい耳みみが動うごく位くらゐ、何なにが可怪おかしいのだ。お前まへたちの耳みみは不ふ随ず意い筋きんと云い

つて、思おもふやうに動うごかないのだらう。祝詞のりとの文句もんくにもあるだないか、天あめの斑駒ふちこまの

耳みみふりたてて聞きこしめせとか、小男鹿さをしかの八やつの耳みみふり立てて……とか書かいてある

だらう。すべて神格しんかくに満みたされた大神人だいしんじんは耳みみが動うごくのだよ。國治立くにはるたちの大おほ神かみ樣さまでさ

へも、大變たいへんによく耳みみが動うごいたのだ。それだから、あれ丈だけの大だい神しん業げふが出來できたのだ。

暫しばしく其御神力そのごしんりきを隱かくさせ玉たまふたのを、耳みみをかくし玉たまふと祝詞のりとに書かいてあるのだ。耳みみ

の動くのは大神人の生れ代りたる證據だよ。義理天上さま、此時置師の耳が動くのが厭なら、これきり私は、お前さまのお氣にいらぬに違ひないから、別れませうよ」

高姫「さう怒つて貰つちや困るぢやありませんか。互に打解けた夫婦の仲、耳が動くと言つて褒めた位に、さう怒るといふ事がありますか」

時置「アハ、ハ、ハ、お前が餘りプリンプリンするので、何か一つ返報がへしをせうと思つてた所だ。それで一寸すねて見たのだよ。アハ、ハ、ハ、」

高姫「おきやんせいなア、よい年をしてゐて、みつともない」

時置「エツヘツヘツへ」

かかる所へ楓は襖をソツとあけ、

楓「もし日出神の小母様、御膳が出来ました」

と膳部を持ち運んで来た。

高姫「あゝ御苦労さま、どうぞ其處においといておくれ、そして御膳はたつた一つだなア、早くもう一膳持つて来て下さい」

楓「あの、小母さま、御膳はこれきりのよ、ヨルさまが一膳持つて行けばよいと云ひましたの」

高姫「エ、氣の利かぬ男だなア。コレ楓さま、ヨルを一寸此處へお出でといつて下さい」

楓「ハイ」

と云ひ乍ら此場を立つて行く。

時置「オイ日出神さま、僕はモウお暇する。これ文慮待されちや、居りたくても居られないからな。俺だつて木像ではなし、なんぼ空助だと云つてもヤツパリ食物は必要だ。朝飯もよんで貰へぬやうな所に居つても約まらないから……」

と憤然として立上るを、高姫は慌てて取すがり、金切聲を出して、

高姫「コレ、時さま、さう短氣を出すものぢやムんせぬわいな、昨夕のことを覚えてますか、氣の利かない奴許りだからこんな不都合致しましたのですよ。私がトツクリと言ひ聞かせますから、御機嫌を直して、此お膳を召上つて下さいな」

時置「一人前の男を化物扱ひ致して、耳が動くの何のと侮辱を加へた上、何だ。」

貴様の膳部許り持て来て、俺をてらしよつた。馬鹿らしい、そんな所にのめめと居る時さまぢやないぞ

高姫「お前さまは此高姫の心が分りませぬのかい、……コレコレ、ヨル、一寸お出で」

此聲にヨルは、ソツと襖をあけ、

ヨル「ハイ、何ぞ御用でムいますか」

高姫「お前なせ、お膳を二つして來ないのだい」

ヨル「ハイ、夜前ソツと聞いて居りましたら、二つにせうか、イヤイヤ今度は始めてだから、一つにしておかうと仰有つたぢやムいませぬか、それ故仰有つた通り致しました」

高姫「何と、氣の利かぬ男だなア。コレからキツと二人居つたら、二人前持つて來るのだよ」

ヨル「ハイ、今後は心得ます。實の所は貴女は何時も斷食斷食と仰有るものですから、今朝から斷食をお始めなさつたかと思ひ、お客様の方持つて來たのでムい

ます。楓さまが何と云つたか知りませぬが、此お膳は貴女のぢやムいませぬ。ト  
さまのでムいます」

高姫は機嫌を直し、

「あゝさうかな、さうだらう、さうだらう、そんな氣の利かぬ男は此處には居らない筈だ。併し今朝は私も頂くのだから、どうぞモウ一膳拵へして来て下さい……  
：コレ時置師様、今お聞の通りでムいます、これで御合點が参りましただらう」  
時置「ヤア、濟まなかつた。あ、それを聞いて、私も満足した。高姫、エライ心配をかけてすまなかつた。コレ此通り空助が兩手を合せて、お詫を致します。惟

神靈幸倍坐世」

高姫「オツホ、おきやんせいなア、人を困らせようと思ふて、本當に仕方のない人だ。私に氣許り揉まして、憎らしいワ」

時置「ワハツハ、マア能いワイ。犬も食はぬ喧譁をして居つても、はづまぬからなア」

ヨルは膳部の用意をなすべく、急いで此場を立去つた。漸くにして二人は機嫌

よく朝餉をすまし、時置師は祠の森の境内を、一々巡視すると云つて、只一人瓢然と出て行つた。高姫はソロソロ寄つて来る参詣者に對し、教を傳ふべく装束をキチンと着替へて、日出神と成りすまし、簾を吊つて、鉛の天神さま然と脇息に凭れ乍ら、客待ち顔である。

ヨルは例の如く朝餉をすまし、受付にすました顔で、寶頭盧尊者宜しくといふ態で控えてゐる。そこへスタスタやつて來たのはお寅、魔我彦の兩人であつた。お寅「何でも此處に御普請が出来ると聞いて居りましたが、立派な御普請だなア、十曜の紋の旗が閃いてゐる。イソの館へ参るには此處を通りぬけにする譯にも行くまい。心が急ぐけれど、一つ参拜して参りませうか」

魔我「同じ三五教の神さまぢやありませんか、是非共参拜致しませう」  
と受付にツカツカと進みより、

魔我「モシ、私は元は小北山のウライナイ教の副教主でゐましたが、三五教の松彦様に教を承はり、兩人連れでイソの館へ参る途中、一寸お邪魔を致しました。どうぞ参拜をさして頂きたいものでゐいます」

ヨル「それは能う御参りでムいます。私も斯うして受付を致して居りますが、元はバラモン教の信者でムいました。そしてイソの館へ宮潰しにゆく軍の中に加はり乍ら其神様の御家來となつて、御用をするとは、本當に人間の運命といふものは不思議なものですよ。お前さまもウラナイ教では立派なお方だと承はりますが、さぞ神様はお喜びでせう。ここには義理天上日出神様の生宮様が御降臨遊ばしそれはそれは エライ御威勢でムいますよ」

魔我「エ、何と仰せられます、日出神の生宮様とは……それは何方でムいますか」  
ヨル「ハイ、楓姫といふ若い娘に御神懸り遊ばしてゐられましたが、それはホンの四五日の間で、本當の日出神の生宮、三五教の宣傳使高姫様がお出でになつて居られます、それはそれはエライ御神力でムりますわ」

魔我「ヤア、其奴ア不思議だ。こんな所で高姫様にお目にかかるとは夢にも知らなかつた。あゝあ蠚蠚別さまが居つたら、さぞ喜ぶことだらうに……コレお寅さま、蠚蠚別さまのレコですよ。腹を立てちや可けませぬよ」

お寅「オツホ、コレ魔我ヤン、いつ迄も何を言ふのだい。此お寅は最早そ



んな戀着心は露程も有りませぬぞや。それより早く、高姫様とやらに會はして頂きたいものだ。

魔我「早く高姫様に魔我彦が來たと傳へて下さい。さういへば高姫様は御存じですから。」

ヨル「ハイハイ、承知致しました。何と高姫さまはお顔の廣い人だなア。昨日も高姫さまを尋ねてトさまとやらがお出でになるなり、今日も亦マさまとやらがお越し遊ばす、此奴もヤツパリ、レコだなア。」

と呟きつつ、二人を受付に待たせおき、高姫の居間に慌ただしく駆け込んだ。

ヨル「もしもし高姫さま、マ、マ、マ、ガ、ヒ、コとかいふお方が見えまして。」

高姫「ナニ、魔我彦が來たといふのかい。」

ヨル「ハイ、魔我彦さまと、そして何でも蝶蜷別とか……云つてみらつしやいました、訪問者はお二人でムいます。」

高姫「コレ、ヨルや、魔我彦さま丈、一寸此方へ來て貰つておくれ、そして一人。」

の方は私が會ひに行く迄、都合があるから待つて下さるやうにいつておくれ、餘り急いで行つちや可けないよ、此長廊下の椽板を一枚一枚間違はぬやうに、讀みもつて行くのだよ」

ヨル「椽板は百八十枚キチンと有ります。今更よまなくつても分つて居りますがな」

高姫「エーエ、氣の利かぬ男だな、ボツボツ行きなと云ふのだ」

ヨル「エへ、へ、へ、又其間におやつしの時間が入りますからな、随分貴女も凄腕前ですな、イツヒ、へ、へ、」

高姫「エーツ、此心配なのに、そんな氣樂な事どこかいな。サ、彼方へ往つて下さい」

ヨルは「へーエ」と云ひ乍ら、舌をニユツと出し、頭をかき、腰を蝦に屈め、スゴスゴと出て行く。高姫は窓の外を見まはし、時置師神の姿の見えぬのにヤツと胸撫でおろし獨言、

高姫「あゝあ、蝶蜷別さまも、氣の利かぬ方だなア。モチツと早く來て下されば

可いのに、折角こがれ慕ふて来て下さつても、高姫にはモウ時さまと云ふ夫が出  
来たのだから、大きな顔でお目にかかる譯にもゆかず、あゝ何うしたらよからう  
かな。齒抜婆でも、ヤツパリどこかによい所があるとみえる……とはいふものの  
困つた事だワイ」

かかる所へ、ヨルは魔我彦の手をひいてやつて来た。

魔我「これはこれは高姫さま、久し振でお目にかかります。私もたうとう三五教  
になりました。貴女は偉う御出世をなさいましたなア。イヤお目出度うムいます  
高姫「ヤア魔我彦さま、御機嫌宜しう、久しくお目にかからなかつたが、一體お  
前はどこに居つたのだえ、どれ丈搜してみたか知れやしないワ」

魔我「ハイ、有難うムいます。實の所は貴女が三五教へお入信りになつてから、  
蠓螾別様が北山村を立退き、坂照山に貴女のお筆先を元として、ユラリ彦様や、  
ヘグレ神社様、種物神社、其外の神々を祭り、小北山の神殿と稱して、蠓螾別様  
が教主となり、私が副教主として活動してゐました。そこへ三五教の宣傳使がみ  
えまして結構な教を聞かして頂きました。たうとう歸順致しました。貴女にここ

でお目にかからうとは思ひませなんだ」

高姫「さすが蝶蜷別さまだ。エライものだ、お前も頑固な男だが、高姫の教を假令ゆがみなりにせよ、よう立てて下さつた、マア三五教に歸順すれば之に越した事はない。そして蝶蜷別はヤハリ三五教に歸順されたのかな」

魔我「ハイ、サツパリ、心の底から改心されました、今では治國別さまに従ひ、宣傳に歩いてゐられます」

高姫「今ここへお前さまのつらつて来た、モ一人の方は蝶蜷別さまぢやありませんか」

魔我「ハイ違ひます、蝶蜷別さまの……實は御敷蒲團でゝいます。今にお目にか

けませう」  
高姫「定めて若い綺麗な御方でせうなア、本當に蝶蜷別さまは、何と云つても色男だ、私のやうな者は見限り遊ばすのは無理はない、併し乍ら今となつては却て

結構だ」

魔我「イエイエ滅相もない、六十許りのお寅といふお婆アさまですよ、元は浮木

の村むらの女をんな侠客げかく、白波しらなみの良婆うしろばあさまといふ剛がうの者ものですよ。それがスツカリ改心かいしんして、  
治國はるくに別様わけさまの添書てんしょを戴いたき、これからイソの館やかたへ参拜さんぱいして、宣傳せんでん使しにならうといふと  
こです。此この魔我彦まがひこもお寅とらさまのお伴ともしてウブスナ山の聖場せいぢやうへ修行しゆぎやうに参まゐる積つもりです  
高姫たかひめ「それは誠まことに結構けつこうだ。併しかし乍ながらお寅とらさまとやらにも、お前まへにも、トツクリと  
義理ぎりてん天上じやうひ日出ひ神のかみから云いつておかねばならぬ事ことがあるから、其そのお寅とらさまを此處ここへよ  
んで來きて下ください……コレコレ ヨルや、お前まへ其そのお寅とらさまとやらを、ここ迄まで御案内ごあんない  
申まをしや」  
「ハイ」と答こたへてヨルは受付うけつけを指さして、長廊下ながらうかをドシドシ威喝ゐかつさせ乍ながら走はしり行ゆ  
く。

（大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 松村眞澄録）

第一四章 大妨言だいぼうげん（一二八八）

高姫の居間には高姫、お寅、魔我彦の三人が三角形に座を占め、高姫の説教を耳をかたがて聞いて居る。

高姫「魔我彦さま、お前はイソの館へ詣るのも結構だ。決してとめは致さぬが、まだお前の様な事で到底イソの館へ行つても赤恥をかく様なものだから、此高姫が此から行つても差支ないと云ふ處迄義理天上日出神の御説教を聞いて其上にしなさい」

魔我「それは有難うムりますが、さうグズグズして居れませぬ。何程貴女が偉くてもヤツパリ元は元ですからな。私は祠の森へ参拜するつもりで来たのぢやありません。松姫さまに許されてイソの館に直接に教を聞く事に致して来ましたから、今夜は御世話になるとしても是非明日はイソの館へ百日ばかり修業に行つて参ります」

高姫「これ魔我彦、お前チツと慢心してはゐないかな。何程松姫さまがイソの館へ行くと仰有つても神力のない者が何うして行けますかね。お前は元は高姫の弟子だつた事は誰知らぬ者はありませんませぬよ。お前の様に修業の足らぬ人がイソの館

に行つて御覽、高姫もあんな分らぬものを弟子にして居つたかと思はれちやお前ばかりの恥ぢやありませぬぞえ。忽ちこの高姫の恥になります。それで此處で充分修業して義理天上日出神からお許しを受けたらイソの館へ行つても宜しい」

魔我「それなら、何日ばかり此處にお世話になつたら宜しいでせうかな」

高姫「さうだな、まア早くて百日、おそくて二百日だらうかいな」

魔我「さう長らく居る譯にや行きませぬ。往復の日数を加へて百日の間お暇を戴いて來たのですから、こんな所に百日も居らうものならイソ館へ詣る事が出來ぬ

ぢやありませんか。それでは松姫さまに嘘をついた事になりますから、兔も角明

日はお寅さまと參拜して來ます」

高姫「假令百日かからうと二百日かからうと聖地に上る丈の徳がつかねば如何して行けるものか。私もお前を大切に思へばこそ斯うして氣をつけるのだよ。よう

考へて御覽なさい。中有界に迷ふてゐる八衢人足の身魂が何程天國を覗かうと思つてもまばゆいばかりで却て苦しいものだ、面曝されて逃げて歸つて來ねばな

りませぬぞや。チツと此處で義理天上日出神の筆先を戴いて身魂の因縁をよく調

べて詣れる資格があればお詣りなさい。何は兔もあれ身魂研ぎが肝腎だからな」

魔我「高姫さま、義理天上日出神は私ぢやなかつたのですか」

高姫「さうぢや、暫くお前に表向き、さう云はしてあつたのだが、何時迄も世は

持ちきりには致させませぬぞや。誠の日出神は此高姫ですよ。へん……濟みませ

ぬな」

魔我「身魂の因縁だとか、義理天上だとか、日出神だとか、私はもうこりこりし

ました。小北山で松彦さまが見えて、何もかもサツパリ化けが露はれて了つただ

もの、義理天上日出神と云つてるのは金毛九尾の家來の大きな黒狐ですよ。お前

もヤツパリ其黒狐を喜んで奉つてゐるのですか」

高姫「これ魔我、そりや何と云ふ大それた事を云ふのだい。勿體なくも日出神様

を狐だ等と馬鹿にしなさるな。お前の腹の中に曲津が棲んでゐるのだらう。それ

がそんな事見せたのだ。それでマガ彦と神様が名をおつけ遊ばしたのだよ。左様

の事申すなら何と云つてもイソの館へはやりませぬぞや」

魔我「お寅さま、如何しませうかな。高姫さまがあんな事云ひますがなア」



お寅とら「高姫たかひめさまが何なんと仰有おつしやつても私わたしは治國別様はるくにわけさまから手紙てがみを戴いたいて來たのだから非ひが邪じやでもイソ館やかたへ参まゐり八島主様やしまぬしさまに此手紙このてがみを手渡てわたしし嫌いやでも應おうでも立派りっぱな宣傳使せんでんしとなつて歸かへらねばなりません。お前まへは此處ここに修行しうぎやうに來たのではない。此お寅このとらの付添つきそひだから如何どうしても來きて貰もらはねばなりません。高姫たかひめさま、私わたしが魔我彦まがひこを連つれて行きゆますから又また御世話おせわになります。今度こんどは如何どうしても連つれて行ゆかねばなりません。高姫たかひめ「これお寅とらさまとやら、お前まへさまは治國別はるくにわけとやらに添書てんしよを貰もらつてイソの館やかたへおいでるのかい。そりや措おいたが宜よろしからうぞや。云いふとすまぬがお前まへはまだそれ丈だけの資格しかくが備そなはつて居をらぬ。治國別はるくにわけなんて偉相えらさうに云いつてるが、彼奴あいつは元もとはウラル教けうの龜公かめこうぢやないか。そんな奴やつが手紙てがみを書かいた處ところが……ヘン何なに、八島主様やしまぬしさまがお受取うけとり遊あそばすものか。悪い事わるいことは決けつして申まをしませぬ、此日出神このひでのかみの申まをす様やうになさつたが宜よろしからうぞや」

お寅とら「治國別様はるくにわけさまは立派りっぱな宣傳使せんでんしぢやムりませぬか。さうして第一だいいち天國迄てんごくまでお調しらべになつた結構けつこうなお方かたですよ。其お方そのかたから手紙てがみを下くださつたのだから八島主様やしまぬしさまがお受取うけとりなさらぬ道理だうりがありますか。私わたしは何なんと仰有おつしやつても参まゐります」

高姫「へん、偉相に、龜の野郎、第一天國に行つて來た等と、そんな事が如何してあるものか。彼奴は醜の岩窟の井戸に這入つてドン龜の様に苦しんでゐた男だ。そして自轉倒島に渡り英子姫、悦子姫等の女達の家來になつた男ですよ。お寅さま、そんな男の手紙を貰つて何になりますか。それよりも義理天上日出神様の教を受けて其上でイソの館へおいでなさい。さうしたら屹度八島主が面會してくれらでせう」

お寅「はい、御親切は有難うムりますが何と仰有つて下さつても、私は思ひ立つたのだから参ります。そして貴女様の弟子ぢやあムいませぬ。治國別の直々のお弟子になつたのでムります。おとめ下さるのは嬉しうムりますが、假令イソの館で赤恥をかいても是非行つて参ります。いかいお世話になりました。さア魔我彦、行きますせうぞや」

魔我「高姫さま、折角御親切に仰有つて下さいましたけど、今度はお寅さまの付添ですから是非参つて來ます」

高姫「何と云つてもやらさぬと云つたら、やらしやせぬぞや。此祠の森にお宮さ

まを建てて高姫に番をさしてゐるのは何とお考へでゐる。大神様が高姫の御神力を御信認遊ばし、お前は一方口の祠の森に居つてよく身魂を調べ、よく研けぬ者は一年でも聖地へよこすでないぞよ。汚れた者が聖地に参つたら天變地異が勃發し聖地が汚れるから、よく調べよと大神様の御言葉、それで遙々此處迄参つて身魂調べをしてをるのだ。何程お寅さまが治國別の手紙を持つて行つても此關所の認めがなくては、駄目ですよ。お前一人の爲めに三千世界の大神儀になつたら如何しますか。よい年をして居つてチツとは考へてもよさそうなものぢやありませんか。魔我彦だつてそれ位の道理は分つてゐさうなものぢやないか。之が分らぬ様な低脳兒なら、體よう目なつと噛んで死んだがよいぞや。もう高姫も、如何しても云ふ事聞かぬなら魔我彦と師弟の縁をきるが如何だい」

魔我彦「お前さまに、師弟の縁をきられたつてチツとも痛痒は感じませぬ。私は松彦さまの弟子にして貰つたのだから忠臣二君に仕へずと云つてお前さまにお世話にならうとは思ひませぬ。何卒放つといて下さい」

高姫「エーエ、相變らずの没分曉漢だな。お前もここ迄になつたのは誰のお蔭だ

と思つてるのだい。皆この高姫のウラナイ教で鍛へ上げられたのぢやないか。諺にも師の影は三尺隔てて踏まずと云ふぢやないか。たとへ一年でも教をうけたら師匠に違ひない。師匠の恩を忘れるのは畜生同然だぞえ」

魔我「畜生と云はれてもチツとも構ひませぬわ。貴方だつて偉相に義理天上日出神とすまし込んでムるが、ヤツパリ守護神は劫経た黒狐ぢやありませんか。何程偉相に云つても小北山の御神でチャンと審神がしてあるから……お氣の毒さまだ……そんな事仰有るとお前の守護神はこれこれだと今ここでスツパぬきませうか」

高姫「エーエ分らぬ男だな。どうなつと勝手にしたがい。あとで吠面かはかぬ様にしたがいわ。後になつて高姫の云ふ事を聞いておいたらよかつたのに……と云つてチリチリ舞ひしても後の後悔間に合はぬぞや。神が氣をつける間に氣づかぬと何事があるや知らぬぞよ。何事も神に不足申して下さるな。大橋越えてまだ先へ行衛分らぬ後戻り、慢心すると其通りと變性男子のお筆に出てみませうがな。此祠の森は世界の大門とも大橋とも云ふべき處だ。大門開きも出來ぬ身魂を

以て十里四方の宮の内、イソの館へ行かうとは……オホ、向ふ見ずにも程がある。盲蛇に怖ずとは、よくも云つたものだ。魔我彦さま、之でも行くなら行つて見よれ。目まひが来るぞや。神罰が當つて大地に蛙をぶつつけた様にフン伸びん様にしなさいや。是丈け高姫が氣をつけるのに、如何しても意地の悪い東助の居る……ウ、ウンとドツコイ……意地の悪い……どうしても行くのかい。後は知りませぬぞや。アア高姫さまが親切に仰有つて下さつたのに、あの時、我を張らなけれや、こんな事はなかつたらうにと豆の様な涙を零して嘆いても後の祭、波に取られた沖の舟、とりつく島が無くなつてから、「高姫さま、何卒助けて下さい」と縋りて來ても義理天上日の出神は聞き濟みはありませぬぞや。行くなら行くでよいからトツクリと心に相談をして、うせるがよからう、エツ

へ、へ、へ、へ、

魔我彦「何とマア相變らず達者な口ですこと。そんな事云はれると何だか幸先を折られた様で、氣分が悪くなつて來た。なアお寅さま、どうしませう」  
お寅「御勝手になさいませ。此お寅は一旦云ひかけたら後へは引かぬ女丈夫だ。」

初めから一人詣る積りだつたが、お前がお伴さして呉れえと云つたから、連れて来たのだよ。高姫さまの舌にちよるまかされてお神徳を落さうと勝手になさいませ。私は何と云つても行くと云つたら行きますぞや。女の一心岩でも突き貫くと云つて、つき貫いて見せてやりますぞや」

高姫「これお寅さま、決して高姫は悪い事は申しませぬ。何卒マアお腹が立ちませうが、トツクリと胸に手をあてて考へて御覽なさいませ。祠の森の許しがなくちや折角遙々遠方へ行つても、恥をかかねばならぬから私が親切に忠告するのですよ」

お寅「何と云つて下さつても私は参ります。治國別様から祠の森の高姫さまに許しを得て行けとは聞いて居りませぬ。もしもイソの館へ行つて高姫さまの許しがないから受付けぬと云はれたら、歸つて來ます。其時は又宜しうお願いします」

高姫「神の申す時に聞かねば神は後になりてから、何程ジタバタ致してもお詫申しても、そんな事、取上げて居りたら「きり」がないからあかぬぞよ……とお筆に出で居りますぞや。高姫の承諾なしに行くなら行つて御覽、夜食に外れた梟鳥、

アフンと致して六つかしいお顔をなさるのが日の出神は氣の毒なから氣をつけますのだ。へん、どうなつとお前さまの御神徳は……えらいものだからなさいませ。此日の出神は帳を切りますぞや。帳を切られたら何程地團太踏んでも助かりませぬぞや」

お寅 「お前さまに帳を切られたつて、私は大神様から帳を切られなければ一寸も構ひませぬワ」

高姫 「何處迄も分らぬ人だな。ア—ア—一人の人民を改心させようと思へば神も骨が折れる事だわい。大國常立尊の片腕とおなり遊ばす日の出神の云ふ事を聞かずに如何して思惑が立ちませうぞ。阿呆につける薬がないとはよく云つたものだ。縁なき衆生は度し難しかな。本當に度し難い代物ばかりだ」

お寅はムツとして高姫をグツと睨みつけ少しく聲を尖らして、

お寅 「これ高姫さま、度し難き人物だとは何と云ふ口巾の平たい事を仰有る、此お寅は斯う見えても若い時から浮木の里の女侠客丑寅婆と云ふ女ですよ。鬼でも取挫ぐ婆だ。それが大神様の御意に叶ふて今や宣傳使の修行に參る途中、お前は

私の修業の妨害を致す考へだな、お前は義理天上日の出神と云つて居られるが、日の出神がそんな譯の分らぬ事を仰有いますか。何程お前が偉くともイソの館の八島主さまには叶ひますまい。私は假令神罰が當つても貴方の様な無理云ふ方には教は受けませぬ。放つといて下さい。さア魔我ヤン、行きませう、こんな氣違じみた方に構ふて居つちや堪りませぬわ」

高姫「これお寅さま、強つてお止めはしませぬが、神様は順序ですよ。順序を亂したら誠の道が潰れますから、それを御承知ならおいでなさい。何事も順序と手続が必要でムリますから……」

お寅「ハイ、御親切に有難うムリます。私は治國別様に手続きをして頂き順序を踏んでイソの館へ参るのです。お前さまはイソの館から命令を受けて来たのぢやありませんまいがな。珍彦様が此處の神司となつて治めなさらなならぬ處だのに、お前さまから順序を破つて勝手に義理天上日の出神だと仰有つて此新しいお館を占領してムるのだらう。今私の耳許に守護神が囁きましたよ。お前さまは此お寅がイソの館へ参ると化けが露はれるものだから、何とか云つてお止めなさるのだ



らうが、私も苦勞人だから、人の悪い事は申しませぬから御安心なさいませ。守護神の囁く處を聞くと、お前さまは大山子を張つてイソの館に參る宣傳使や信者を皆お前さまのものにする考へだ。云はば天の賊も同様だ。チツと改心なされ。悪は長く續きませぬぞや。さあさあ魔我ヤン、こんな處に長く居つても駄目ですよ。さあさあ早く行きますせう」

高姫「こんな處とは、……何と云ふ事を云ひなさる。勿體なくも國治立の大神様、日の大神様、月の大神様、大自在天大國彦命様其外御神力のある尊い神様の祀つてある此聖場をこんな處とは……何を云ひなさる。滅多に許しませぬぞや」  
お寅「高姫さま、私は此森の神様を決して悪くは申しませぬ。こんな處と云つたのは貴方の様な没分曉漢のゝる居間をさして云つたのですよ。エーエ耳が汚れる、さあ魔我彦さま、行かう行かう」

と早くも立つて表へ走り行く。高姫はイソの館へ行かれちや大變だと氣を苛ち「ヨル……ハル……テル」と呼ばはつてゐる。ヨル、ハル、テルの三人は「ハイ」と答へて此處に集まり來り、

ヨル「高姫様、イヤ日の出神様、お呼びになつたのは何の御用でムリですか」  
高姫「お前達、何をグツグツしてゐるのだい。あの二人の連中をトツ掴まへて來なさい」

ヨル「何ぞあの人は悪い事を致しましたかな。別に罪のない者をトツ掴まへる必要はないぢやありませんか。イソの館へ參らうと仰有るのを止めると云ふ事がありませんか。お一人でも本山へお詣りする様にお奨めするのが道でせう。それにお前さまは何とか、かんとか云つて參らせぬ様にするのが不思議ですな。私だつて一度詣りたいと云へば何とか、かとか云つて、お止めになる。どうも貴方の仰有る事は腑におちませぬわい」

高姫「勝手にしなさい。もう此處には居つて貰へませぬ。さあトツトと去んで下さい。日の出神の云ふ事に一々反對する人は受付に居ても邪魔になるからな」  
ヨル「大きに憚り様、私は玉國別様と五十子姫様とのお許しを受けて此處の受付をしてゐるのですよ。決して貴方から任命されたのぢやありませんか。此處の館は珍彦さまの御監督、お前さまのグツグツ云ふ處ではありませんか。そんな事云ふと

お寅さまと魔我彦さまに随いてイソの館の八島主さまの處へ行つて一伍一什を報告しますよ。おいテル、ハル、イク、サール、お前達氣をつけて珍彦御夫婦さまや楓姫さまをよく氣をつけてお宮さまを注意して下さい。私は是から一足本山に行つて來ますから……」

と出て行かうとするを、高姫は飛びかかつて首筋をグツと捕らへ、

高姫「こりやヨル、日の出神の許しもなく何處へ出て行くのだ」

ヨル「へー、放つといて下さい。お尋ね迄もなくイソの館へ注進に参りますわ。

さアお寅さま、魔我彦さま、参りませう」

高姫は仁王立ちになり眞赤な顔を膨らして、握り拳で乳の邊りを、反身になつ

て交る交る打ち乍ら、ヤツコスが六方を踏む様なスタイルで玄關に立ちはだかり、

ドンドン云はせ乍ら、

高姫「ヤアヤアヤア三人の四足共、日の出神の命令を聞かずに行くな、サア行

つて見よ。あとで吠面かはくなよ。氣もない中から義理天上日の出神が噛んでく

くめる様に氣をつけておくぞや」

お寅、魔我彦、ヨルは少しも頓着なく尻に帆かけて急坂を上り行く。

（大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 北村隆光録）

## 第一五章 彗星（一二八九）

お寅、魔我彦、ヨルの三人は高姫と散々争ひ、祠の森を立ち出でイソの館に進み行く。懐谷の近傍迄来た時に日はずつぱりと暮れた。不思議や南の天に當つて大彗星が現はれて居る。ヨルは空打ち仰ぎ、

ヨル「もしお寅さま、魔我彦さま、あれ御覧なさい、あの彗星を。ハルナの都の恰度上の方に當つて出て居るぢやありませんか。屹度何かの變事ですうよ」  
お寅「ほんにほんに不思議な彗星ですこと。あれは大方八十年に一度現はれると云ふ、ハレー彗星ぢやありませんまいかな」  
ヨル「さうでせうよ、何でも天下に變事の起る前兆でせう」

魔我まが何なに、あいつは高姫星たかひめぼしだ。どこもかも尻しりで曇くもらし廻まはる妖星えうせいだから、何なんと云いふ  
星ほしか知しらないが、魔我彦まがひこは是これを稱しょうして高姫星たかひめぼしと云いひますわ  
ヨルヨ一つあひとの彗星すいせいについて歌うたを詠よんで見みませう。

地上ちじやうに充満じゆうまんせる

陰鬱いんうつの空氣くうきは

天てんに上のほつて凝結ぎようけつし

忽たちまち彗星すいせいと化なつて

妖光えうくわうを放射ほうしやし怪煙くわいえんを吐はいてゐる。

是果これして何なんの

凶兆きようてうだらうか

彗星すいせいの妖光えうくわうに毒どくせられて

紫微宮しびきうの色いろは

非常ひじやうに變かはつてゐる。

これを思へば

やがて天下に

大難の到来する前兆ならむ。

彼の妖星が

やがては

紫微宮中を犯すであらう。

その時こそは

實に警戒を要する時だ

大黒主の失脚は

歴々として

既に已に

天極紫微宮の中に

今より

現はれて居るやうだ』

魔我まが「ハ、ハ、ハ、ハ、何なんだか、そんな事ことを聞きくと心こころが落おち付つかぬやうだなア。併しかし事じ實つとあれば仕方しかたがないわわ」  
お寅とら「魔我彦まがひこさま、ヨルさまの言靈ことたまを一つ宣ひとり直なほしなさい、何事なにことも神かみの顯現けんげんだからなアア」

魔我彦まがひこ「森羅萬象しんらばんしやうは

悉ことごとく主すの神かみの顯現けんげんだ

人間にんげんの身みは

主すの神かみの聖靈せいれいと神格しんかくとを

攝受せつじゆする時とき

茲ここに初はじめて

萬有ばんいう一切いつさいと

共通きうつうし活躍くわつやくし得うるものであるア」

ヨル「ヤアこれで些つとばかり気がすんだやうだ。一つ此邊で暗くなつた序に休  
息しませうか」

お寅「宜敷からう、夜途に日は暮れませぬからなア」  
と路傍の岩に腰打ちかけ、三人は暫し息を休めた。

お寅「打ち仰ぐ天津御空に彗星  
世の塵拂ふ仕組なるらむ」

魔我彦「打ち仰ぐ空高姫の彗星  
人をごもくのやうに掃出す」

ヨル「夜の空現はれ出でし彗星



空高姫の曲を拂ひつ  
『』

お寅 『八十年に一度出づる彗星』

再び見せよ吾を守りて。

大空も漸くハレー彗星の

力に曲は逃げ失するらむ  
『』

魔我彦 『いざさらば河鹿峠を三人連れ』

イソの館に進みて行かなむ  
『』

ヨル 『夜の道登る吾身は義理天上』

ひのでのかみ  
日出神に別れ告げつつ  
□

か たがひ うた  
斯く互に歌ひ、  
また  
又もや足を早めて急坂を攀ぢながらお寅は歌ひ出した。

はるくにわけ  
治國別の取りなしで  
イソの館に詣でむと

まがひこ  
魔我彦さまを伴ひて  
ほしむ  
祠の森に来て見れば

とえう  
十曜の御旗ひるがへり  
たかあまはら  
高天原に千木高く

おほみやばしらふと  
大宮柱太しきて  
しづ  
鎮まり居ます三五の

げ  
實にも尊き大御神  
やひろ  
八尋の殿も新しく

た  
建て竝べられヨルさまが  
いと厳めしく受付に

きちんと坐り居ましけり  
お寅はすつと立ち寄つて

やうす  
様子を聞けば高姫の  
つかさ  
司が居ますと悟りてゆ

いか  
如何なる方か知らねども  
いままで  
今迄教祖と慕ひたる

ひのでのかみ  
日出神の生宮に  
ひとめあ  
一目會はむと悦びつ

魔我彦さまと諸共に 高姫さまに面會し  
 譯の分らぬ託宣に お寅は全く呆れ果て  
 答ふる言葉も無きままに 二言三言争ひつ  
 愛想もこそも盡き果てて やつと館を飛び出し  
 魔我彦さまと逸早く 旅装を調へ立ち出づる  
 後に續いてヨルさまが 追ひかけ来る夜の道  
 茲に三人の一行は 雲つくばかりの峻坂を  
 神の恵に助けられ 登る折しもあら不思議  
 空に輝く彗星 如何なる事の前兆にや  
 善惡正邪は分らねど 容易ならざる此景色  
 吾等は心を改めて 三五教の大道に  
 一直線に進行し 一日も早く御靈をば  
 みがき清めて神のため 世人のために赤心を  
 盡くさむための宮參詣 イソの館に現れませる

瑞みづの御靈みたまの大御神おほみかみ

何卒なにとぞ吾等われら三人さんにんの

心こころを憐あはれみたまひつつ

一日ひとひも早はやく大神おほかみの

御楯みたてと仕つかへなさしめよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

彗星すゐせい空そらより落おつるとも

海うみはあせなむ世よありとも

此世このよを造つくりたまひたる

皇大神すめおほかみのます限り

誠まことの道みちを進すすむ身みは

決けつして恐おそる事ことあらじ

進すすめよ進すすめいざ進すすめ

魔我彦まがひこ、ヨルさま諸共もろともに

吹ふき來くる風かぜは寒さむくとも

山路やまぢは峻さかしくあるとても

一旦いったん思おもひ立たちし身みは

如何いかなる曲まがの妨さまたげも

撓たゆまず屈くつせず桑くはの弓ゆみ

ひきてかへらぬ吾思わがおもひ

諾うべなひたまへ惟神かむながら

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる』

ヨルは又また歌うたふ。

玉國別の宣傳使 五十子の姫と諸共に

百日百夜の丹精を 凝らして瑞の御舎を

造りたまひし雄々しさよ 心の清き宣傳使

斯る尊き宮を建て いささか執着心もなく

遷宮式を相濟まし 直様後を珍彦や

吾等一同に任せつつ 出で往き給ふ雄々しさよ

楓の姫は忽ちに 神人感應の境に入り

身體をブルブルふるはせて 吾は日の出神なりと

言擧げせしぞ不思議なれ 數多の信者が聞きつけて

蟻の甘きにつどふごと 岩石起伏の山道を

老若男女が厭ひなく 詣で來りて神徳を

撮受し感謝にむせぶ折 高姫司が飄然と

現はれ來り奥に入り 楓の姫の神懸り

審判をなせば忽ちに 楓の姫は元の如

普通ふつうの娘むすめとなりにけり  
後あとに高姫たかひめ傲然がうぜんと

奥おくに居坐あすわり吾われこそは  
日ひの出神でのかみの義理ぎりてんじやう天上

祠ほこらの森もりは高姫たかひめの  
此この生宮いきみやが守護しゆごうする

なぞとそろそろ威張あはり出だし  
金釘流かなくぎりうの筆先ふでさきを

朝あさから晚迄ばんまで書かきつづけ  
是これが誠まことの神勅しんちよくと

宣言せんげんなして吾々われわれに  
拜讀はいどく強しふる苦くるしさよ

いやいや乍ながら吾々われわれは  
全ま tuttaく神かみのお示しめしと

頭あたまを押おさへて讀よみゆけば  
脱線だつせんだらけの世迷言よまひごと

聞きくに耐たへない事ことばかり  
餘あまり合點がてんがゆかぬ故ゆゑ

イソの館やかたに參詣まゐまうで  
審判さにはを乞こはむと思おもふうち

高姫たかひめ吾等われらの心こころをば  
探さぐりしものかイソ館やかた

御靈みたまの研みがけるそれ迄までは  
決けつして參拜さんばいならぬぞと

無性むしやう矢鱈やたらにせき留とめる  
合點がてんがゆかぬと思おもふ折をり

三五教あななひけつのお寅とらさま  
思おもはず茲こゝに現あらはれて

高姫さまとのかけあひに 日の出神の素性まで

魔我彦さまの口をもて 素つ破ぬかれし可笑しさよ

ヨルも漸く胸晴れて 高姫司の化の皮

剥いてやらうと決心し お二人さまに従つて

イソの館に参詣で 御靈を研き神徳を

腕もたわわに蒙りて 此黑白を明かに

示さむものと思ひ立ち 漸くここに來りけり

あゝ惟神々々 産土山の大御神

ヨルが心を憐れみて 御靈の恩賴を賜へかし

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

バラモン教をあきらめて 三五教の御教に

歸順しまつりし其上は 如何でか心の變るべき

恵ませ給へ大御神 祠の森の受付に

仕へまつりしヨル公が 赤心籠めて願ぎまつる

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましませよ

魔我彦は又歌ふ。

北山村を出でしより

日の出神の義理天上

ウラナイ教を開きたる

高姫さまはいづくぞと

心にかけて探すうち

祠の森ではからずも

久方振りにて廻り會ひ

我情我慢の高姫が

心に再び仰天し

遠の魔我彦呆れ果て

話にならぬ有様に

お寅婆さまと手を引いて

長居は恐れと館をば

後に見捨ててヨルさまと

峻しき坂路攀ぢ登り

やつと此處迄來りけり

かうなる上は高姫も

よもや追かけ來るまい

何卒無事に産土の

イソの館の聖場へ



吾等三人をすすくと  
進ませ給へ惟神

神かけ念じ奉る  
もしも高姫後を追ひ

髪ふり亂し夜叉のごと  
來るも測り知られない

その時こそは  
横たはりたる彗星

これをば矢庭にひつ掴み  
朽木に上る蟻の群

手箒もちて落すよに  
拂へばそれですむ事だ

高姫たとへ大空を  
伊馳り地を潜るとも

此世の主と現れませる  
神の力にや叶ふまい

吾等三人は赤心を  
一つになして何處迄も

百の妨げ打ち破り  
初志を貫徹致さねば

男の顔が立ちませぬ  
男勝りのお寅さま

どうぞ確り頼みます  
此處は名に負ふ魔の峠

山猿共が澤山に  
現はれ出でて人の目を

引つ掻きやぶると聞きました  
神力無雙の玉國の

別の命の御目をば 創つけまつる悪い猿

いつ飛び出すか分らない 危険区域と聞くからは

唯一心に神言や 天津祝詞を奏上し

此坂道を登りませう あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひ乍ら、さしも嶮しき夜の坂道、一歩一歩心を配り祝詞くづしの宣傳歌を歌  
ひ乍ら、汗を垂らして登り行く。上の方より柔しき女の宣傳歌が聞えて來た。こ  
れはイソの館よりハルナの都を指して惡魔の征討に上る女宣傳使、豪膽不敵の初  
稚姫であつた。三人は此聲に力を得て殆ど蘇へりたる如き心地しつつ苦しさを忘  
れて登り行く。

(大正一二・一・一八 舊一一・一二・二 加藤明子録)

第四篇 鷹魅糞倒

第一六章 魔法使（一二九〇）

高姫はお寅、魔我彦、ヨルの三人が数千言を盡しての、高姫の勧告を一蹴して、強行的に出立したので、コリヤ大變だと、心も心ならず、吾れと吾手に胸をかきむしり乍ら、

高姫「エーエ、義理天上さまも、何をしてゐる、こんな時にこそ、なぜ不動の金縛りをかけてとめて下さらぬのだい。コレコレ、イル、イク、サール、ハル、テル、何をしてゐるのだ、なぜ早く後を追つかけて行かぬのかいな。エーエもどかしい、荒男が五人も居つて、これ程氣の揉めるのに、なぜ捉まへて來ぬのだい。日出神の命令を聞きなさらぬか」

イル「高姫さま、それより義理天上さまに直接にお聞になつたら何うです、貴女

は何時も三千世界を自由に致すと仰有つただやありませぬか。それ丈神力のある義理天上の生宮が、引戻せぬといふ事がありますか、かふいふ時にこそ貴女の御神力を見せて頂かねば、吾々は心の底から心服するこた出来ませぬワ」

高姫「コレ、イルや、お前は何といふ分らぬ事をいふのだい。日出神様といへば天の大神様だ、大取締りをしてゐるのだよ。つまりいへば總理大臣のやうなものだ、人間を捉へに行くのはポリスの役だぞえ、大臣の位地に在る神様がポリスの役をなさるといふやうな、そんな、道に外れた事がどこにあるものか。それだからお前等五人が、ポリスやスパイになつて、掴まへて来いといふのだよ」

イル「貴女の神様が總理大臣ならば、吾々は知事位なものです。知事がスパイやポリスの役は出来ませぬからな」

高姫「エーエ、氣の利かぬ男だな。神様は變幻出沒自由自在なるべきものだ。大にしては宇宙一切を統轄し、小にしては微塵の内にも隠れ玉ふが神様の働きだよ。そんな事が出来ぬやうな事で、何うして祠の森の御用が出来ますか」

イル「それ程大神様は大小いろいろに變幻出沒なさるのなら、ポリスやスパイに

なつて掴まへに行つたつて可いぢやありませんか」

高姫「それは日出神の生宮、一人の時の働きだよ。かうして五人も荒男があるのに、私許りに苦勞をかけようといふ、お前は不見な人だ。そんな事で神さまの道と云へますか。何もかも日出神が一人でするならば、お前達の様な分らずやを五人も置いとく筈がないぢやないか」

イク「コレ高姫さま、お前達のやうな分らずやをおいとくと仰有つたが、ヘン、すみませぬが、私はお前さまに命令を受けてるのぢやありませんか。お前さまこそ勝手に居候に來たのぢやないか、それ程ゴテゴテ云ふのなら歸んで貰ひませう」

高姫はクワツと怒り、目をつり上げて、矢庭にイクの胸倉をグツと取り、  
「コリヤ、イク、女と思ひ侮つての雑言無禮、用捨は致さぬぞや。勿體なくも義理天上日出神の生宮、三五教の立派な立派な宣傳使、生田の森の神司、琉の玉の守護神、夫れさへあるに、三五教の三羽鳥、イソ館の總務時置師の神空助が妻、マ一度無禮な事を言ふなら、言つてみやれ、腮も何も捻ぢ切つて了ふぞや」

と力ちからに任まかせて、頬ほほをグツとねぢる。イクは、

「アイタ、、、、、カ、堪忍かんにん々々」

高姫たかひめ「餘あまり貴様きさまは頬ほほ桁げたがいいから、此この頬ほほ桁げたも下駄げたの齒はも一本いっぽんもない所ところ迄まで抜ぬいてやるのだ」

と益々ますます抓つかめる。サールは見るに見みかねて、高姫たかひめの後うしろから、兩足りやうあしをグツと攫さらへた、拍ひや子うしに高姫たかひめは筋斗もんどりうつて玄關げんくわんへ飛と出し、饅頭まんじう迄まで天覽てんらんに供きようして、慌あわただしく起おき上あがり、

高姫たかひめ「サ、イクを此處ここへ出だせ、高姫たかひめの足あしをさらへた奴やつは何奴どいつぢや」  
と金切聲かなきりこゑを出だして喚わめき立たてる。そこへ飛とんで來きたのは空助もくすけであつた。

高姫たかひめ「ヤ、お前まへはこちの人ひと、女房にようぼうがこんな目めに會あふてるのに、何なにしてムごつたのだえ」

空助もくすけ「つい、そこら中ぢゆうを散歩さんぽしてをつたのだ。何なんだか義理ぎりてんじやう天上てんじやうさまの聲力こゑ……

【ギ】……【リ】天上てんじやうの喚聲わめきこゑが聞きえたので、スワー大事いちだいじと、慌あわてて來きて見みれば、何なんの事ことはない、斯様かやうな男をとこを掴つかまへての、ホテテング、イヤハヤ呆あきれて物ものが言いはれぬ哩わい、ワツハ、、、、」

高姫「コレ、こちの人、女房がこんな目に會ふてゐるのに、お前は何ともないのかえ」

空助「イヤ、何ともない事はない。併し乍ら元を糺せばお前が悪いのだ、イクの頬邊を女だてら、一生懸命に抓つただないか。そんな事をするに仍つて、自然の成行として、サールが足をさらへたのだ。實の所は椿の木の下から様子を見て居つた。これは公平な判断から見れば、どちらが悪いとも言へぬ。高姫、お前もチツと上氣してゐるから、氣の落着く迄、空助と一所に奥へ行つて、酒でも呑んだら何うだい」

高姫「お前は一體何處へ行つてゐらしたの。お寅といふ婆アや、魔我彦、それに受付のヨル迄が、義理天上の言葉に反對して、無理無體にイソの館へ參拜しよつたのですよ。お前さまが居つてさへくれたら、食ひ止めるのだつたに、あゝあ残念な事をしたわいな。お前さまと私と此處に腰を卸し、イソの館へ行く奴を一人も残らず食止めて、本山をアフンとさしてやらうと思つてゐたのに、困つた事をしたものだ。五人も荒男が居つても、酒を食ふのと理窟を垂れるのが藝當で、チ

ツとも閒【しやく】に合やせぬワ。あゝあ人を使へば苦を使ふとは能う言ふたものだ。私は何程奥へ行つて一杯やらうと仰有つても氣が氣ぢやありません。コリヤ、イク、イル、サール、お前は今日限り、誰が何と云つても、放逐する、サ、何處なつと行かつしやれ。其代り、ハルを受付にして、テルを内事の取締に任命します」

ハル「エツへ、へ、これはこれは實に有難うムります。いつ迄もヨルが頑張つて居ると、拙者の登龍門を閉塞してゐるやうなものだ、あゝ人の禍は自分の幸ひ、有難くお受け致します。オイ、テル、貴様もイルが失敗つたお蔭で、内事の司になつたのだ。早く御禮申さぬかえ」

テル「これはこれは高姫様、特別の御恩命を蒙りました、有難う存じます。サ、どうぞ、シツポリと奥へ這入つて、エへ、へ、へ、一杯あがつて御機嫌を直して下さい。ハル、テル兩人扣へある以上は大丈夫でムいます」

高姫「コレ、ハル、テルや、お前はバラモン教でも随分羽振を利かして居つた男と言ふぢやないか。お前には何か見所があると思ふて居つたのだ。どうだい一つ



出世をさして貰った恩返しに、三人の奴を引戻して来て下さるまいかな。まだ十丁許りより行つて居らうまいから、チツと許り急いだら追着けない事もなからうから、……」

ハル「實の所はバラモン教にて習ひ覺えた、引掛戻しの法がムいます。此ハル、テル兩人が重い役に御任命下さった御恩返しとして、今三人を引戻して見せます。これから暫く自在天様にお祈りをかけねばなりませんから、引戻す術が整ひましたら、お知らせ致します。どうぞ夫れ迄奥へ行つて御休息下さいませ。假令一日が二日、十里向ふへ行つてゐましても、引掛戻の法に仍つて、三人共此處へ引寄せて御覽に入れます。それは御安心下さいませ、確にやつて見せますから……」

高姫はニコニコし乍ら、

「オツホ、お前はどこともなしに氣の利いた男だと思つて居つた。神様がチヤンと、それ相應のお役をあてがうて下さるのだ。これだから義理天上様の御神力は偉いといふのだ。コリヤ、イク、イル、サール、何をグツグツしてゐるのだい。アタ汚らはしい。トツトと歸んで下さい」

イル「それ程喧しう仰有るのなら歸にますワ。又元のバラモン教へ這入つて大活動をなし、今に祠の森を占領して、アフンとさして上げるから楽しんで待つてゐるがいいワ。オイ、イク、サール、ゲンタクソの悪いサア歸なうぢやないか。序にハルとテルの「ドタマ」を「かち」割つて歸らうかい」

ハル「コリヤコリヤ俺の引掛戻しの法を知つてるかい。指一本でもさへやうものなら、忽ちふん伸ばして了ふぞ」

イル「ヤ、恐れ入つた。バラモン教の中でも魔術使の名人だと言ふ事は、豫て聞いてゐた。ヤ、もうお前には降参だ。そんなら三人はこれから歸ります」

ハル「ゴテゴテ吐さずに直に歸つたがよからう。四の五の吐すと爲にならないぞ」  
イル「エツ、仕方がないなア、イク、サール、そんなら浮木の森へ逆轉せうかい」

高姫「オホ、小氣味のよい事だわい。イヒ、」

と腮をしゃくり、貧乏町の家竝のやうな、脱けさがした齒をむき出し、袖の羽ばたきし乍ら空助の居間を指して、欣々と進み入る。

イルはハル、テル兩人の前に又ツと首をつき出し、耳に口よせ、

イル「オイ兩人、甘くやつたねえ。サ、これから蓑笠を出してくれんかい。丁度、お寅に魔我彦、ヨルの、俺達三人がなつて此處を通るから、其時高姫に見せてやるのだなア、ウツフ、、」

ハル「大きな聲で笑ふない。サ、早う早う、受付の溜りに蓑笠が澤山あるから、女のなつと男のなつと、一着づつ持つて、俺が合圖するから、ドーン、と太鼓が鳴つたら五分許りしてから、此坂を下つて來るのだ。それ迄あの谷の曲りで、酒でも呑んで待つとつてくれ」

と忽ち協議一決し、イク、イル、サールの三人は旅装束をなし、僅に一丁許りの上手の山の裾の曲角に姿を隠し、酒をグイグイ呑み乍ら太鼓の鳴るのを待つてゐた。

ハルは三人に用意を命じおき、テルに受付を構はせ乍ら、高姫の居間へ足音高く進んで行つた。受付は澤山の参拜者で、中々雑踏してゐる。テルは今日は神界の都合だと云つて、全部の参拜者を八尋殿に籠るべく命令した。ハルはソツと襖を押しあけ、

ハル「エへ、へ、これはこれは高姫様、お二人、お樂みの所を、御面倒致しました。殆ど準備が整ひましたから、一寸来て下さいませ」

高姫「準備が整つたら、夫れで可いぢやないか」

ハル「貴女に一つ、引掛戻しの藝當を、實地目撃して頂きたいのですから……其代り少し着族に酒を呑まさせませんから其積りで居つて下さいや、何と云つてもバラモン教切つての魔法使ですから、……一度私の隠し藝を御覽に入れますから……」

高姫「空助さま、貴方も御覽になつたら何うですか」

空助「アハ、へ、それ位なこた、此空助だつて何でもないと。併し乍ら少し許り骨が折れるから、ハル、テルにやらしておくがよからう。俺もお前にいぢめられたので眠たいなり、チツと許り、腰が變だから、……アツハ、へ、へ」

高姫「コレ空助さま、みつともない。ハルが聞いてるぢやありませんか」

空助「最早【ハル】が來てるのだから、鶯も鳴くだらう。お前の聲も鼠のやうにもあり、鶯のやうにもあるからな、アハ、へ、へ」

高姫「エー、千騎一騎の場合に、氣樂な男だな……女房の心も知らずに……」  
と呟き乍らハル公の後に従ひ、受付迄やつて来た。

テル「これはこれは日出神様、今スパイが一つ魔法を使つてお目にかけます。それに付いては澤山の眷族を使つて、三人の奴を引戻して来ねばなりません。澤山の魔神を使ふには、何うしても酒を吞ましてやらねば可くませぬから、ドツサリ酒を此處へ出して下さい」

高姫「勝手に勝手にお出しなさい。御馳走が要るなら、まだ夜前の空助様のお祝の残つてゐるから、それを取つて来て、肴にして眷族共に吞まして下さい」

「ヤ有難い」といひ乍ら、ハル、テルは酒肴を中におき、向ひ合ひになつて、グイグイと呑み出した、喉の中から妙な聲が出て来る、丁度笛を吹くやうに聞えて来た。ハルは尖つた口を前へつき出し、

「おれは大雲山の狼だ、一杯吞ましてくれ」と作り聲し、又今度は眞面目な聲で、

「ウン、ヨシヨシ、ハル公の肉體へ這入つて来よつたかな、サ、一杯吞め」

と自分の口へ自分がついで、グーツと呑んだ。腹の中から、

「ウマイ ウマイ、俺は大雲山の狐だ、俺にも一杯呑ましてくれ」

ハル「ウン、よしよし、貴様も一杯呑んで、お寅婆や外二人を喰へて来るのだぞ」  
腹の中「ハイ、承知致しました、酒許りでははづみませぬ、肴も一口入れて下さいな」

ハル「ウン、よしよし尤もだ、遠慮はいらぬ、御苦勞にならねばならぬのだから、ドツサリ食ったがよからう」

テルは又作り聲、喉から聲の出るやうな振をして、

「高姫さま、私は北山村に居った古狐でムいます、お久しうお目にかかりませぬ、今日は御恩報じに、お寅、魔我彦、ヨルの三人を喰へてイソの館へ行かないやうに致します、どうぞ一杯よんで下さいな」

高姫「御苦勞様だ、ドツサリ呑んで働いて下さいや、千騎一騎の場合だからな。

お前さまも首尾よく御用が勤まつたら、又へグレ神社を建てて祀つて上げるぞや」  
テル公の腹の中から、

「ハイ有難うムんす、早く一杯吞まして頂戴ね、序に甘い肴もねえ」

テル「ヨシヨシ、貴様も仕合せ者だ、俺の肉體へ宿をかりよつて、……充分活動するんだぞ、サ一杯吞ましてやらう」

と又自分が注いでグツと呑み、鯛の刺身をムシヤムシヤと頬張り、

テル「あゝあ、何ぼ口を使はれても、皆副守先生が食ふのだから、口のたるいこつちや、甘くも何ともありやせぬワ」

テルの腹の中から「それでも喉三寸越える間は、チツとは甘からうがな」

テル「コリヤ、守護人、偉相に云ふな、喉通る間位甘かつたつて、たまるかい。チツと静にせぬかい、腹の中で騒ぎやがつて……」

テルの腹の中より「臍下丹田で吾々の同志が集まつて、散財をして居るのだ、モツとドツサリ注入してくれないと、根つからお座が持てぬワイ」

テル「高姫さま、困つたものですな、何うしませう」

高姫「コレ、テル、餘り酔はすと、又間に合はぬやうになつちや可けないから天晴御用がすんでから吞ますからと云つて下さいな。御用さへすんだらば何ぼなつ

と呑ま<sup>の</sup>して上<sup>あ</sup>げるから……と

テル「コリヤ腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>の連中<sup>れんちゆう</sup>、御用<sup>ごよう</sup>がすんだら幾<sup>いく</sup>らでも呑<sup>の</sup>ましてやるから、今<sup>いま</sup>それ位<sup>くらい</sup>で辛抱<sup>しんぱう</sup>したら何<sup>ど</sup>うだ」

テルの腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>から「それだと云<sup>い</sup>つて、まだ一杯<sup>いっぱい</sup>づつも渡<sup>わた</sup>つてゐないぢやないか、せめて、杯<sup>さかづき</sup>についだのは邪魔<sup>じやまくさ</sup>臭<sup>くさ</sup>いから、徳利<sup>とくり</sup>グチ、一升<sup>いっしやう</sup>許<sup>ばか</sup>り注<sup>ちゆう</sup>入<sup>にふ</sup>してくれ」

テル「エ……チエツ厄<sup>やく</sup>介<sup>かい</sup>な奴<sup>やつ</sup>だな、嫌<sup>いや</sup>でもない酒<sup>さけ</sup>を呑<sup>の</sup>ましやがつて……チエツ、コラ守<sup>しゆ</sup>護<sup>ご</sup>神<sup>じん</sup>、御苦<sup>ご</sup>勞<sup>らう</sup>と申<sup>まを</sup>せ」

と云<sup>い</sup>ひ乍<sup>なが</sup>ら、徳利<sup>とくり</sup>の口<sup>くち</sup>からラツパ呑<sup>の</sup>みを始<sup>はじ</sup>めた。ハル公<sup>こう</sup>も肴<sup>さかな</sup>を二膳<sup>にぜん</sup>かたしでつかみては頬<sup>ほ</sup>張<sup>は</sup>り頬<sup>ほ</sup>張<sup>は</sup>り、又一<sup>また</sup>一<sup>いっ</sup>升<sup>しやう</sup>徳利<sup>とくり</sup>の口<sup>くち</sup>からテル公<sup>こう</sup>同<sup>どう</sup>様<sup>やう</sup>にガブガブと呑<sup>の</sup>みほした。

ハルは額<sup>ひたひ</sup>をピシヤツと叩<sup>たた</sup>き、

ハル「ゲーエー、あゝ酔<sup>よ</sup>ふた酔<sup>よ</sup>うた、オイ、テル、貴<sup>き</sup>様<sup>さま</sup>も随<sup>ずい</sup>分<sup>ぶん</sup>もう酔<sup>よ</sup>ふただらう、否<sup>いや</sup>貴<sup>き</sup>様<sup>さま</sup>の着<sup>けん</sup>族<sup>ぞく</sup>も酔<sup>よ</sup>ふただらう、何<sup>なん</sup>だか俺<sup>おれ</sup>の守<sup>しゆ</sup>護<sup>ご</sup>神<sup>じん</sup>も腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>でクダまいてけつかるワイ、……コリヤ高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>、昨<sup>さく</sup>夜<sup>や</sup>は何<sup>ど</sup>うだい、……コレ高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>さま、あんな事<sup>こと</sup>いひますワ、仕<sup>しか</sup>方<sup>た</sup>のないヤンチャがをりますわい、併<sup>しか</sup>し乍<sup>なが</sup>らかういふヤンチャでない」と、



お寅婆とらばば引戻ひきもどしの藝當げいたうは出来できませぬからな□

高姫たかひめ「サ早くはやお寅外とらほか三人さんにんを引戻ひきもどして見みせて下ください□

ハルは何なんだか口くちの中なかで文言もんごんを稱となへ、座太鼓ざたいこをポンポンと打うつた。さうする  
とお寅婆とらばばに扮ふんしたイルが、首くびをプリンプリン振り、怪あやしい腰付こしつきをし乍ながら、何物なにものに  
か引張ひっぱられる様やうな素振そぶりをして、受付うけつけの前まへを横切よこぎり、坂さかの下したへトツトツと去あて  
了しまつた。

ハル「サア、何どうでげす、高姫たかひめさま、引掛戻ひっかけもどしの魔法まはふはズイ分ぶんエライものでげせ  
うがな。お寅とらの奴やつ、眷族けんぞくに袖そでをくわへられて、折角せつかく河鹿峠かじかたうげを半分程はんぶんほど上あつたら、た  
うとう引ひっぱりよせられよつた、何どうだす、エーエ□

高姫たかひめ「いかにもアリやお寅とらに違ちがひない、偉えらいものだな。併しかしお寅丈とらだけではつまらぬ  
ぢやないかい、ヨルと魔我彦まがひこが戻もどつて来こなくちや、一人ひとりでも向方むかふへやつたら大變たいへん  
だから……□

ハル「エー、今度こんどはテルの番ばんです、オイ、テル公こう、魔我彦まがひこを引張ひっぱり出だすのだよ□  
テルは「ウーン、ヨシッ□と云いひ乍ながら、鞭むちを取りとり、座太鼓ざたいこをポンポンと三みつ

つ打つた。魔我彦に似た蓑笠を被つた男、金剛杖をつき、以前の如く、首や身體を前後左右に振り乍ら、又前を通り過ぎた。

テル「高姫さま、何うです、妙でせうがなア」

高姫「成程、ヤツパリ神様は水も洩らさぬ仕組をしてゐるワイ、日出神様の筆先にチヤンと出てますぞよ、キチリキチリと箱さしたやうにゆくぞよと現はれてるのは此事だな。何を云つても日出神さまは偉いわい、夫れ相當の守護神をお使ひ遊ばすのだから……時にテルや、ヨルの奴、まだ後へ歸つて來ぬぢやないか」

テル「其奴ア、ハルが今やる番になつて居ります、守護神も【かつため】に休ましてやらんなりませぬからな」

高姫「成程、サ、ハルや、頼んますぞや」

ハルは「エヘン」と咳拂し乍ら、太鼓の鞭をグツと握り、座太鼓の面を仔細ありげに暫く睨みつめ、空中を鞭で七八へんもかくやうな眞似をして、鞭の先を高姫の口へ一寸當てた。

高姫「コレコレ、ハルや、何をテンゴーしてゐる、早く引掛戻しをなさらぬかい

な  
」

ハル「高姫さま、之が三べん、蛇の子と申しまして、業の終局ですから一寸六かしいのですよ、之が甘く行けばヨルが後へ戻つて來ます。此奴を失敗したら大變ですから……日出神様が、要するに、吾々をお使ひなさつてるのです。鞭に仕掛がしてあるのですから、日出神様のお口へ一寸持つて行きました、此次は一寸お鼻へさわるかも知れませぬ……」

高姫「ヤ、業の作法とあれば、何うも仕方ありません、どうなりと御好きなやうにして下さい」

ハルは鞭を前後左右に、靜に振り、

「東方日出神様、西方夕日の大神様、南方星の大神様、北方月の大神様、北極明星、北斗七星大菩薩守り玉へ幸へ玉へ」

と鞭を、益々急速度に働かせ、自分の股倉へつつ込み、高姫の鼻へピタリと當てた。高姫は之れがバラモン教の魔法使の法だ、臭くても辛抱せなくてはヨルが歸つて來ないと思ひつめ、尻に當てた鞭の先を鼻に當てられ、顔をしかめて、待つ

てゐる。

高姫「コレ、ハルや、そないキツク當てると息が出来ぬぢやないか、何と臭い鞭だなア」

ハル「ソリヤ、チツと臭うごんせうとも、何せよあなた、向ふへ行く奴を引戻すといふ魔法ですもの、つまり、尻の匂ひを高い所の鼻迄持運ばなくちや、相應の道理に叶ひますまい、尻の所謂外臭を、又鼻から引込んで内臭に充さなくちや業は利きませぬからねえ、エへ、々々。サ、之から本藝に取りかかりまーす」

と鞭を放しがけに、グツと手を伸ばし、高姫の鼻をついた。高姫は鼻柱をつかれて、ウンと仰向けに倒れて了つた。

高姫は目がクラクラとして、そこらが廻るやうになつて來た。耳のはたで無暗矢鱈に太鼓を叩き出した。高姫は益々逆上て、目がまひ、遂には家も身體も山もグレリグレリと舞ひ出した。サールはヨルに扮して通つて行く、其姿が上になり、下になりし乍らどつかに隠れて了つた。少時すると、高姫は起上り、

「あゝあ御苦勞だつた、お前達は大變な魔法を覺えてるものだな。家を逆様にし

たり、山を自由に動かしたり、何と偉いものだよ。ヤツパリお前は、受付丈の値打はあるわい、テルも内司の司丈の値打は十分あるわい。これからお前等二人を魔法使の大將とし、イソの館に行く奴を喰ひとめ、きかぬ奴は今のやうに山まで動かして、往生させるのだ。これから祠の森を大門神社と改名いたすぞや。サ、お前達御苦勞だつた、悠くり休んで下さい。私は空助さまに、お前達の手柄を按配よう報告しておくから……キツと御褒美が出るだらうからなア」

ハル「どうぞ、お酒をドツサリ戴くように願ひますよ」

高姫「アレ、マアあれ丈澤山呑んでおいて、まだ呑みたいのかい、餘程よい樽だなア」

ハル「高姫さま、ありや皆魔法使の爲に守護神が呑んだのですよ。ハルやテルが呑んだと思はれちやたまりませぬワ」

高姫「あゝさうだつたな、まア一寸待つてみて下さい、御馳走をして上げるから

……」

といそいそと奥に入る。

ハル「アハ、、オイ、テル、甘くやつたぢやないか」

テル「貴様ア、ヒドいぢやないか、エ、ン、自分の尻を高姫にかがしたり、鼻を  
ついて高姫の目をまかしたり、怪しからぬことをするね」

ハル「それだつて、一番しまひに回天動地の實況を見せておかなくちや、疑の深  
い女だから、ああいふ具合にしたんだよ、俺の智慧は偉いものだらうがな」

テル「ウン、感心だ、併し、イル、イク、サールに一杯、改めて吞ましてやらな  
くちやなるまい、ソツと宿舎へ酒肴を持運び、慰勞會でもやつてやらうかな」

ハル「楓さまを、酒注ぎ役として、靜に宿舎で吞むやうにしておいてくれ、餘り  
大きな聲で歌つたり何かすると分るから大きな聲をしない様に注意をしてくれよ」

かく兩人は相談の結果宿舎に三人を忍ばせ、楓姫の酌にてクビリクビリと小酒  
宴を開いてゐる。高姫は居間へ歸り、ニコニコし乍ら、

「コレ空助さま、喜んで下さい。腐り繩にも取柄とかいひましてな、日出神の義  
理天上の目鏡に叶ふた、テル、ハルの兩人は、バラモン教で魔法使と名を取つた  
丈あつて、偉い事をしましたよ。お寅婆を引戻すやら、魔我彦、ヨルまでが引つ

けられて惨めな様で坂を返つて行く可笑しさ、そしてまた不思議な藝當を持つてゐますよ。家をまいまいこんこをさしたり、山をグラグラ動かしたりするので、義理天上日出神もあんな弟子を持つて居れば、正勝の時にや山も何も引くりかへしますワ、あゝあ有難うムいます日出神様、よい家來を御授け下さいまして、……あゝ惟神靈幸はへませ惟神靈幸はへませ」

空助「アハ、ゝゝ、其奴ア偉い事をやつたね、ウン、感心感心。併し乍ら其三人は今どこに居るのか」

高姫「サ、今頃にやモウ山口の森あたり迄逃げて行つたでせうよ」

空助「其奴ア、何にもならぬぢやないか、イソの館へ行かうと思へば、ここ許りが道ぢやない、遠廻りをしてゆけば行けるのだから、彼奴等三人を此處へ引つて十分に説き聞かすか、但はどうしても聞かねば、穴でも掘つて、末代上れぬ事にしておかぬ事にや、お前の謀反は成就しないだないか、賢いやうでも女だなア」

高姫「いかにもそうでムいましたなア、何う致しませう」

空助「それ位な事は朝飯前だ、俺が一つここへ呼んで見ようかな」

高姫 「空助さま、貴方にそんな事が出来ませんか」

空助 「アハ、ハ、ハ、出来でかい、それ位な事が出来いで、今迄イソの館の総務

が勤まらうかい、今此空助が一つ文言を稱へたが最後、望み通の人間をここへよ

せてみせう、其代り高姫、お前もチツと痛い辛抱をせなくちやならぬぞ」

高姫 「お前さまの爲なら、少々痛い事しましても辛抱しますワ」

空助 「ヨシヨシ一寸高ちゃん、ここへお出で、お前は木魚の代りになるのだよ」

と言ひ乍ら、高姫の長煙管を取り、

「ブビヨウ、マフス、ベナ、マカ、お寅婆サンよ、空助如來が、魔法の功德に仍

つて、此場へ來れ、早來れ」

「クワン、グリーン、グリーン、グリーン」と續け打に、高姫の前頭部を五

つ打った。高姫は又もや少しく逆上たと見え、そこらがクルクル見え出して來た。

パツと現はれたのは、お寅ソツクリの姿である。

高姫 「ヤ、お前はお寅ぢやないか、どうだ、義理天上の神力には往生致したか」

お寅 「ハイ、サツパリ往生致し……ま……せぬワイ」



高姫「アハ、何と負惜みの強い婆だなア、サ、もう斯うなる上はビク共動かさぬのだ。義理天上には、ハル、テルといふ立派な魔法使がついて居りますぞや。お寅さま、もう駄目だから、スツカリ我を折つて、日出神の申すやうになさるが、おのしのお得だぞえ」

お寅「ハイ有難うムいませぬ。何分宜しく御願ひ致しませぬ」

高姫「それ見なさい、早く改心すればいいものを、いつ迄も我を張つてみると、此通りだぞえ、ドンあとで首尾悪うすがりて來ねばならぬぞよ……とお筆に現はれて居るぞえ」

お寅「ハイ何分宜しく御願申します。モウこれきり我は出します。どうぞ高姫さまの御弟子にして下さいませぬ」

高姫は握拳を固め、兩腕を力一杯伸し、立あがり、六方をふみ乍ら、雄健びして云ふ。

高姫「三五教に名も高き、高姫さまとは此方の事、若い時から男女と呼ばれたる、變性男子の生宮の腹をかつて、生れ出でたる剛の女、今は祠の森の空助が妻とな

り、山のほでらの茅屋住ひ、先を見てみて下されよ……とをまくつて、大音聲  
と自ら唳鳴り、芝居氣取りになつて、伊猛り狂ふた、其勢の凄じさ。空助は思は  
ず「ワツハツハ、」と吹出し、又もや高姫に向ひ、  
空助「オイ高ちゃん、まだ勇む所へはいかぬ。魔我彦ヨルの兩人を此處へ引付け  
なくちや駄目だよ」

高姫はハツと氣がつき、

「なる程空助さま、魔我彦、ヨルは何うしたらいいでせうかな、モウ頭を叩かれ  
るのはたまりませぬがな」

空助「さうだらう、モウ頭を叩く必要はない。一寸お前が私の云ふ通り、目をつ  
ぶつて舌を出してくれさへすりや、それで呪禁が利くのだ、さうすりやキツと二  
人は此處へ引付けてみせるよ」

高姫「そんな事なら、頭を叩かれるよりもおやすいことです。サア早く呪禁をし  
て下さい」

と云ひ乍ら、目をシツカと塞ぎ、馬鹿正直に舌をニユツと出した。空助は火鉢の

灰を掴んで、高姫の舌へ、口があかぬ程突込んだ。高姫は灰が喉に引かつたとき、  
えて『クワツ　クワツ』と咳をし　あたりには灰を飛ばした。そして兩眼から涙を  
ポロポロと流してゐる。それでもまだ空助がよいといはぬので、辛い業だと思ひ  
乍ら氣張つてゐる。空助は、

空助『オイ高姫、モウ目をあけたら良いよ』

高姫はパツと目を開けば、豈計らむや魔我彦、ヨルが自分の前にキチンと坐つ  
てゐる。高姫は、

高姫『ヤ、魔我彦か、ヨルか』

と言はむとして、口につまつた灰に又むせ返り、クワツ　クワツと、咳し乍ら、  
苦んでゐる。其間に空助は金盥に水を汲んで口をそそがした。鼻も舌も灰だらけ  
になつた高姫は、ヤツとの事で灰を洗ひおとし、口を清め、魔我彦を睨つけて、  
ソロソロと憎まれ口を叩き出したり。

高姫『コレ魔我彦、お前は一體どこへいつとつたのだ、エ、ー。此御神徳には叶  
ふまいがな。それだから、日出神の申す事を聞なさいと、あれ程言ふのに、何の

事だいな、大本の大橋越えてまだ先へ行方分らぬ後もどり、慢心すると其通り…と日出神の眞似の筆先に出て居りませうがな」

魔我「アハ、ハ、ハ、實の所はお前さまにお土産を持つて来たのだよ。餘り何だか食ひた相に舌を出してゐらつしやるものだから、地獄の釜の下から死人の灰を持つて来て、口にねぢ込んであげました、イヒ、ハ、ハ、ハ」

高姫「コレ魔我ツ、何といふ失禮な事を致すのだ。サ、もう了見ならぬ。穴でも掘つて放り込んでやりませう。コレ空助さま、もう斯うなる上は了見なりませぬぞや、魔我とヨルと、穴でも掘つて岩でも被せて末代上れぬやうにして下さいな」

魔我彦の口は俄かに尖り出した。そして大きな耳が生えて来た。ヨルはと見れば、これも耳を生やし、牙を出し、キツキツ猿のやうに鳴き出した、お寅は獅子神樂のやうな口を開けて、體中斑の虎となり、高姫に向ひ、「ウーウー」と唸り出した。三人一度に怪獣となり、山も碎けむ許りに唸り初めた。高姫はアツと叫んで其場に正氣を失つて了つた。怪獣はそのりのそりと四つ足に還元し、玄關口めがけて飛出した。ハル、テルの兩人は両手で頭を抱へ、息をこらして縮

こまり、怪獸くわいじゅうの歸りかへ去るさを待つて居たま。俄にはかに山やまは唸り出しうな、岩石がんせきも飛ぶと様な風やうが吹ふいて來たき。

(大正一二・一・一九 舊一一・一二・三 松村眞澄録)

第一七章 五身玉いづみたま〔一二九一〕

イル、イク、サールは、やさしき楓姫かへでひめに酌しやくをさせ乍ながら四邊あたりを憚りはばかチビリチビリと飲のんでゐたがソロソロ酔よひがまはるにつれて脱線だっせんし四邊あたり構かまはず唄うたひ出しただ。イル『おい、イク、サール、如何どうだ。かう黙だまつてクビリクビリとやつてゐた處ところで酒さけが沈しづんで仕方しかたがないぢやないか。チツト歌うたでも唄うたつたら如何どうだい。エーイ』イク『宜よからう宜よからう一つ唄うたはうかな。

日ひの出での神かみの義理ぎりてんじやう天上

イソの宮みやから降ふつて來きて



だ。糞面白くもない。俺や、モウ自棄だ。之から義理天上日の出神の處へ行つて  
一つ管を巻いて来てやるのだい  
イル「こりや こりや さう八釜しう云ふない。ハル、テルの哥兄が氣を揉むぢ  
やないか」

サール「ナ、何ぢや、木をもむ、そんな事があつて堪らうかい。木をもむ奴  
あ三目錐だ。俺は鉋だぞ。親の脛を削り、腕を削り又高姫の肴を削り、削つて削  
つて削りまはす鉋だ。それだから「かな」がら靈幸倍坐世と云ふのだ。工  
へ、へ、へ、あゝ酔ふた酔ふた。楓さま、おい何だ。イルの方に妙な視線を向けて  
あるぢやないか。チツと俺の方にも向けたら如何だい」

楓「ホ、へ、へ、へ、あまりイルさまは男前のいい、何處ともなしに蟲の好く方です  
から、一生懸命に視線を向けて「イル」さまですよ」

イク「おい、楓姫さま、このイクには如何だい。思召しはムリますかな」

楓「【イク】ら仰有つて下さつてもイク地のないイクさまの方へは私の視線がイ  
ク道理がムリませぬわ。ホ、へ、へ、へ、お氣に障ましたらイクへにもお詫致します」

イク「こりや、あまり馬鹿にすな。イクら女だつて、酒の上だつて、あまりの  
暴言吐くと此拳骨が貴様の頭の上にポカンとイクさまだぞ」

楓「山田の案山子の様なスタイルで、オ、可笑い、これイクさま、彌之助人  
形の踊一つ、して御覽。貴方ならよく似合ふに違ひないわ。丁度澁紙に顔かいた  
様なスタイルだからね」

イル「アハ、面白面白い」

イク「ヘン、馬鹿にしゃがる。楓、覚えてるやがれ。月夜の晩ばかりでないぞ。

暗の晩に首筋がヒヤリとしたら俺だからな」

楓「何とマア氣障な男だ事。あゝ臭さ、臭い臭い。息のかからぬ處に行つて下さ  
い。お前の口はまるで鰯のドーケン壺を交ぜかへした様だわ」

サール「これ、楓さま、此面はお氣に入りますかな」

とニユツと前に出す。楓は頬邊をピシヤツと叩き、

楓「エーエ、好かぬたらしい男だ事。お前はサールの人眞似だよ。惡戯た事をな

サールと、此楓だつて量見はしませぬぞえ」



サール「ヤー、こいつは恐れ入った。如何したら姫さまのお氣に入るのですかな」  
楓「さうだね。私の好きな男は酒を飲まない、さうして色の白い、年の若い、頭の毛の黒い、目のパツチリした、口許のしまつた鼻のツンモリとした男が好きだよ」

サール「さうすると、その條件に合格したのは此サールかな。只缺點は酒を飲むだけの事だ。これ楓姫さま、そんなら今日限り酒は一吸も飲まぬ様にする。そしてたらお氣に入るだらうね」

楓「エー、好かぬたらしい。誰がお前の様なスカンペイに秋波を送るものがありますか。冗談もいい加減にしなさい」

と小さい柔かい手で頬邊をピシヤピシヤと殴る。サールは頗る御機嫌で相好を崩し涎を垂らし乍ら、

サール「エツへ、へ、へ、姫さまのおやさしい手でピシヤピシヤとおいでやしたのだな。憎くて一つも叩かれやうかと云つて、俺にはホの字とレの字だな。おい、イク、イル、羨るい事はないか」

イク「ハ、ハ、ハ、馬鹿だな。子供上りの女に玩弄にされやがつて、何の態だ。それだから高姫の風來者に放り出されるのだ」

サール「放り出されたのは俺ばかりぢやない。貴様等兩人も同様ぢやないか」

イル「何、一寸芝居したのだ。何も貴様、よう考へて見よ。高姫や空助に命令を受けたのぢやない。俺等は此宮を創立遊ばした玉國別御夫婦から任命されたものだ。云はば高姫如きは風來者だ。彼奴は屹度イソの館を放り出されて來たに違ひないぞ。それでヨルや魔我彦がイソの館へ行くのを頻りにとめやがるのだ」

サール「さう聞けばさうだ。高姫に何も遠慮會釋があるものか。俺等は祠の森の常置品だ。之から高姫を擲擄つてやつたら如何だい、面白いぞ」

イル「うん、そりや宜からう。それよりも土堤ぎり、此處で大聲張り上げて唄つて見ようぢやないか。さうすりやビツクリして高ちゃんやんがやつて來るかも知れぬぞ」

かかる處へハル、テルの兩人は走り來り、ハル「おいおい、チツト靜にしてくれぬか。奥へ聞えるぢやないか。それだから

貴様等に酒を飲ますと困ると云ふのだ。なあテル公、困つたものぢやないか」  
テル「うん、本當に仕方のない代物だな。コリヤコリヤ三人の奴、もつと靜かにせぬか」

サール「イヤー、魔法使のハルに、テル、ヤー、先程は御苦勞でムりました。お蔭さまで此通りお寅婆さまも、魔我彦さまもヨルも、夜中も、晝も今日も明日も明後日もお酒を頂きました結構な鞆丸の鞆伸しをさして頂きました」

ハル「鞆丸の鞆伸しはいいが、さう大きな聲を出しちや困るぢやないか」

サール「聲の大きいのは俺の持前だよ。臍下丹田から副守が發動して責めるのだからな。おい、ハル、テルの哥兄、よう考へて見よ。俺等は別に高姫に遠慮する必要がないぢやないか。珍彦様や靜子様、楓さまは申すに及ばず、吾々六人はバラモン組とは云へ今は三五教の立派な信者だ。否祠の森の役員だ。誰に遠慮會釋が要るものか。高姫と空助を、同盟してオツ放り出してやらうぢやないか」  
ハル「成る程、そりや、さうだ。さア之から一杯機嫌で高姫の居間へ乗り込み、一談判やらうかな」

一同 贊成贊成

とヒヨロヒヨロし乍ら、長い廊下を傳ふてドヤドヤと高姫の部屋へ轉げ込んだ。高姫は今やフツと氣がついて火鉢に凭れて煙草をくゆらしてゐる處であつた。四邊を見れば空助の姿は何處へ行つたか影も形もない。高姫は心の中で、高姫「アア、何だか怪體の奴が出て來たので、空助さまも私に恥かしいと見えて、森の散歩でもやつてゐるのかな。大きな圖體をしても氣の弱い男だな。然し義理天上の生宮にはもつて來いだ。あまり男がテキハキすると日の出の神の勤めが仕難うて仕方がない。神様もうまく配劑をして下さるものだ。あゝ有難い有難い、此生宮も何だか肩幅が廣くなつた様な氣がしますわい」

と獨言つつ笑壺に入つてゐる。五人の泥酔者は襖をガラリと開け、居間に雪崩れ込み、捻鉢巻をし乍ら毛の生えた尻を引きまくり、

五人 祠の森に、デツカンシヨ  
デツカンシヨ

デカイお尻据えよつて  
日の出の神とは何の事

元をただせば居候ぢやないか 魔法使と騙まされて

それを誠と思ひつめ 喜んでゐる様な盲神

デツカンシヨ デツカンシヨ サア サア之から出て貰はう

俺等五人は祠の森の 神の任さしの常置品

挺でも棒でも動かない デツカンシヨ デツカンシヨ

さアさア空助、高姫さま 早くトツトとお歸りよ

お前に頼んで来てくれと 云つたぢやあるまい、御勝手に

お出たのだから御勝手に お歸りなさるが宜しかる

ア、デツカンシヨ デツカンシヨ お寅婆さまや魔我彦や

ヨルの三人今頃は 河鹿峠を鼻唄で

ア、ウントコドツコイ ドツコイシヨ 三五教の宣傳歌

歌ふて渡つてムるだる やがて四五日経つたなら

八島の主の神さまの 屹度使が見えるだる

其時やアフンと高姫が 肝玉潰すに違ひない

思へば思へば氣の毒だ  
これこれもうし高チヤンよ

お前の足許明い中  
空助親爺と手を曳いて

ここをば立つて下さんせ  
之が吾等のお願ひだ

之程優しう頼むのに  
四の五の吐して出て行かな

俺も男だ腕まかせ  
直接行動に出まするぞ

さアさア早く返答を  
聞かしてくれよ義理天上

賸の日の出神さまよ  
アハ、、、、アハ、、、

ホんに心地のよい事だ  
高姫夫婦を放り出した

あとは珍彦静子さま  
天女のやうな楓さま

智慧も器量も優れたる  
イル、イク、サール、ハル、テルの

五人の男が頑張つて  
祠の森の神徳を

四方八方に輝かし  
大神さまのお恵みを

世界のものに施して  
三口成就の神業に

立派に仕へて見せませう  
アハ、、、、アハ、、、、。

おい、高姫、如何だい。もういい加減に尻をからげたら宜かりさうなものだな。  
ヨルがもし歸つたら化けが現はれるのだから、其前にトツトと歸んだ方がお前の  
身のためだぞ」

高姫は目に角を立て煙管をグツと握り、

高姫「こりや、五人の耄碌共、何處へ行つて、けつかつたのだ。日の出神の義理

天上を何と心得てる。假令イソの館の八島の主が何と申さうとも、彼奴は人間だ。

誠の生神は日の出神様だぞや。大國治立之命の片腕とおなり遊ばす日の出神の生

宮を粗末に申すと、神は堪忍袋が切れるぞや。そしてイル、イク、サール、お前

は一旦暇を出したのぢやないか。盆すぎの佛の様に、ド甲斐性のない、又、歸つ

たのか。一旦放り出した以上は歸んでくれ歸んでくれ、日の出神が一秒時間だつ

て置かぬと云つたら置きはせぬぞや」

イク「アハ、ハ、ハ、吐したりな吐したりな。こりや高姫、此方を誰方と心得てる。

イルイクサールの神、又の名はハルテル彦の命だぞ。五つの身魂が一つになつて

守護致す、五身魂の神を何と心得てる。グツグツ致して居ると目から火の出神と

してやらうか。さアさア早く歸んで貰はう、被ひ給へ清め給へ」

高姫「何とまア、もとのバラモンのガラクタだけあつて、分らぬ男だこと。そんなら暫らく放り出すのだけは猶豫して上げようぞ。その代り徹頭徹尾高姫の云ふ事を聞くのだよ」

イク「ヘーン、うまい事仰有いますわい。イルイクサールの神又の御名はハルテル彦神さまに對し、家來扱をすると云ふ事があるか。チツと階級と云ふ事を考へて貰ひたいものだ」

高姫「おい五人の役員さま、父死して牆に鬩ぐ兄弟、相親しむと云ふ事があるぢやないか。肝腎の玉國別さまが留守なのだから日の出神の云ふ事を聞いて、私は教の親となり、お前等は兄弟となつて仲よく御神業に奉仕したら如何だい」

ハル「ヤー、高姫さま、お前さまの方から、さう柔かく出りや此方も文句はないのだ。其代りお神酒のお下りを何程飲つても、滅多に干渉はせぬだらうな」

高姫「ア、仕方がない。暫らくはお前らに任して置かう。其代り日の出神の仰有る事は何事も聞くのだよ」





人の奴が甘く歸つて来たと思へば、何奴も此奴も、猿や熊や古狸のやうなものだし、テルやハル公の魔法使もサツパリ幻影だつたし、此儘で居たなら、此義理天上もここ五日と居れぬぢやありませんか。彼奴等三人がイソの館に往きよつたら、きつと、一伍一什を云ふに違ひない。さうすればキツト立退き命令を喰はされる事は知れた事、何うかして、此處に居坐りたいがお前さま、とつときの智慧を出して考へて下さるまいかな」

空助「アハ、ハ、ハ、ハ、日の出神様の考へでも往きませぬかな。矢張り何程神力のある神でも悪い事は駄目だと見えるのう」

高姫「善悪不二、正邪一如だから義理天上は悪に見せて善を働くのだから、キツト神様も許して下さるだらう。イル、イク、サール、ハル、テルの五人の奴が云ふのには、「吾々五人は嚴の御靈だ。玉國別さまに命令を受けた祠の森の常置品だから、お前達に左右される者ぢやない。グツグツ云ふのなら出て往つて呉れ」などと、最前も酒に喰ひ酔つて責めて來るのだから困つたものだ。私はこの先どうなるかと思ふて、心配でなりませんわ」

空助 「此館は珍彦夫婦が全權をもつて居るのだから、珍彦の命令なら、彼奴等五人を放逐するのは何でもない事だ」

高姫 「それはよい所へお氣が着きました。成る程珍彦さまが全權を握つてゐるのだから、珍彦さへ此方の藥籠中のものとして置けば大丈夫ですな。併し珍彦が此方の云ふ事を聞かなかつたらどうしませうかなア」

空助 「そんな心配が入るか。變身の術を使つて空助は珍彦に化け、お前は靜子に化けたらよいのだ」

高姫 「夫だと云つて、顔形迄がさう甘く往きませうかなア」

空助 「いかいでか、チツトも違はないやうに化けて見せる。お前も化けさせてやる」

高姫 「同じ館に二人も珍彦、靜子姫があつては露顯のもとぢやムいませぬか」

空助 「何さ、甘く兩人をたらし込んで酒や飯の中に毒を入れ、そつとして了ひ、さうして高姫空助の體に二人を變じ、甘く葬式を營み、後に吾々兩人が、珍彦

靜子と化け變るのだ、さうすれば安心だらう」

高姫 「空助さま、お前は正直の方だと思つて居たが、随分悪い智慧が出ますなア」

空助 「極つた事だよ。今の世の中は善の假面を被つて悪事をするもの程、立派な

人間と云はれるのだ。お前も空助の女房となつた以上は、も一段改悪せなくては

駄目だよ。鬼の夫に蛇の女房と云ふぢやないか」

高姫 「それだと云つて餘り非道いぢやありませんか。お前はまるで悪魔のやうな

事を云ひますな」

空助 「アハ、ハ、ハ、悪をやるならばお前のやうな中途半は駄目だ。徹底的に悪を

やるのだ。中途半の善悪混交的悪なら、止めた方が餘程氣が利いて居るよ。此空

助は到底お前のやうな善人とは意志が合はないから、今の中に別れようぢやない

か。お前では到底私について來る事は出來ない。改悪が足らぬからなア」

高姫 「空助さま、もう斯うなつた以上はどこ迄もついて行きます。どうぞ私を末

長う可愛がつて下さいませ」

空助 「ヨシヨシそんなら私の云ふ通りにするなア」

高姫 「ハイ、どんな事でも厭とは云ひませぬ」

空助「それなら今之をお前にやるから、酒の中や御飯の中へこの粉を振り撒くのだ。これは毒酸と云つて印度の群魔山に出来た果物の實をもつて製造した毒だから、サア是をお前に與へて置く、うまく兩人を此處へ引つ張り出し、御馳走してするのだなア」

高姫「ハイ承知致しました。きつとやつて見せませう、併し二人はした所であの楓はどうしたらよいのでせう」

空助「あの楓か、あれや放つて置いたらよいのだ。珍彦は空助の肉體に變形して死に、静子はお前の肉體と變形し、さうして死體を土中に埋めて了へば、後は立派な珍彦、静子となつて納まり返つて居られると云ふものだ。さうすれば齋苑の館から何程立退命令が來ても大丈夫ぢやないか」

高姫「成る程、これは妙案奇策、日の出神の義理天上の生宮も感心致しましたよ。オホ、、、、、何と魔法と云ふものは都合のよいものですなア」

空助「サア早く御馳走の用意にかかつて呉れ。グツグツして居ると露顯の恐れがある。謀は早いがいかなア」

高姫 ♪ ア、忙しい事だ。御飯もたかねばならず、煮もせなならず、空助さま、

お前さまお酒の爛だけ手傳つて下さいな。是で珍彦、静子兩人を甘く片付けて仕

舞へば天下泰平だ。お前と私が祠の宮に永久に鎮まつて、三五教の向ふを張り、

表向は三五教とし、實はウライナイ教を開かうではありませぬか

空助 ♪ アハ、ハ、ハ、お前も俺に大分感化されたと見えて、餘程改心が出来たわい

高姫 ♪ 誰かに珍彦夫婦を呼びにやらせませうかなア

空助 ♪ 珍彦夫婦は何と云つても此處の主人だ。お前は準備をちやんと整へたら、

辭を低うし、ちやんと叮嚀にお前が迎へに往て來ねば、もしも嫌だなんて云はれ

ては大變だよ

高姫 ♪ ア、それやさうです。そんなら早く御飯の準備へをして置いて私が参りま

せうかなア、願望成就時節到來これが甘く往けば大丈夫です。惟神靈幸倍坐世、

義理天上日の出の神様、何卒この計略が甘く往きますやうに

とポンポンポンと四拍手して、暗祈黙禱を始めた。

空助 ♪ アハ、ハ、ハ、よく聞いて下さるだらうよ

高姫 「さうです。悪の事は悪神に頼めばいいぢやありませんか」

空助 「それやさうだ。餅は餅屋だからな、甘く悟られない様にやつて呉れよ」

此時襖の前の廊下に小さい足音がして表の方へ消えて仕舞つた。高姫は其足音を耳に插み、

高姫 「ア、空助さま、足音がしたぢやありませんか。此秘密を誰かに聞かれたの

では△いますまいかなア」

空助 「何あに、あれは猫か狎の足音だよ」

高姫 「狎も猫も此處には居ないぢやありませんか」

空助 「山中の事だから山猫や山狎が澤山居るから、餘り御馳走の香がするので嗅

ぎつけて來よつたのだ。そんな事は心配するに及ばない」

高姫 「それでもねえ、何だか氣掛りですわ」

(大正一二・一・一九 舊一一・一二・三 加藤明子録)

第十九章 神丹（一二九三）

珍彦、静子は火鉢を中に圍み、話に耽つて居る。

静子「もし珍彦さま、吾々親子はバラモン教の擄となり、危い所を治國別様に助けられ、御恩の返しやうもない其上に、こんな結構な宮番迄さして頂き、何とも冥加に餘つた事ぢやありませんか」

珍彦「さうだ。お前の云ふ通り山海の大恩を受け、其上、神様の事も分らないのに、此館の主人を仰せつけられ實に身に餘る光榮だ。併し吾々は神のお道には全くの素人だから、餘り荷が重過ぎて迷惑だ。日の出の神の義理天上とか云つて、生神様がお出になり、主人顔をして御座るが、何と云つても生神さまだから、維命維従ふより外はない。主人とは云ふものの有名無實で吾々の思ふやうには一寸もなりはしない、神様のお道と云ふものはこんなものかなア」

静子「それでも、六人の役員さまは矢張り私のやうな者でも主人と立てて下さるのだから結構ぢやありませんか。楓のやうな何も知らぬ娘をお嬢さまお嬢さまと



尊敬そんけいして下さくだるのだから有難ありがたいものだ、これと云いふのも全まったく神様かみさまのお蔭かげだわ」

斯かく話はなす所ところへ楓かへでは襖ふすまをそつとあけて入り来きたり、

楓かへで「お父とうさまお母かあさま、今いま高姫たかひめさまが、貴方あなた方に御馳走ごちそうを上げたいと云いふて呼よびに來こられたらお出いでになりますか」

珍彦うづひこ「夫それは折角せつかくの思召おほしめし、無むにする譯わけには往ゆかない。又また無下むげに斷ことわればお心こころを悪わるくしてはならないからなア」

楓かへで「お母かあさまも往ゆく積つもりですか」

静子しじこ「珍彦うづひこさまが往ゆかれるのに、女房にやぼうの私わたしが往ゆかぬ譯わけには往ゆきますまい。我がの強つよい女をんなだと義理ぎりてんじやう天上様さまに思おもはれてはなりません。空助もくすけさまと云いふ立派りっぱなお方かた

がお出いででになつて居ゐるのだから、御挨拶ごあいさつに一度いちどは往ゆかうと思おもふて居ゐた所ところだ」

楓かへで「それならお母かあさま、お父とうさま、お出いでなさいませ。就ついては私夜前夢わたしやぜんゆめに文珠菩薩もんじゅぼさつ

がお出いでになりまして、神丹しんたんと云いふ薬くすりを下くださいまして、「お前まへの兩親りやうしんの上うへに危急ききふが迫せまつて居ゐるから、これをひとつぶ一粒つぶづつ飲のましておけば大丈夫だいぢやうぶ」と渡わたして下くださいました。

有難ありがたういますとお辭儀じぎをしたと思おもへば夢ゆめは醒さめました。目めがさめましてもこん

な立派な薬が三粒、手の上に残つて居ました。これを三人が一粒づつ頂きませう、さうすれば食當りも何もありませんからなあ」

珍彦「それは有難い全く神様のお恵だ。何は免もあれ頂いて往かう。オイ静子お前も頂きなさい」

楓「このお薬は私の手から口へ直接に上げなくては利かないと文殊菩薩が仰有いました。サア口をお開けなさいませ」

珍彦、静子二人は楓の命ずるままに口をパツと開けた。楓は一粒づつ兩親の口へ放り込んだ。忽ち得も云はれぬ香が四邊を包み胸は爽かになり、身體から光が出るやうな心持になつた。楓も亦押頂いて自ら服用した。三人は俄に面色美しく、其美は益々美を加へた。斯かる所へ高姫は満面に嫌らしき笑を湛へながら入り來り、襖をそつと開けて、

高姫「御免なさいませ。珍彦様、静子様、此間から参りまして、餘り御神業が忙しいのでとつくり御挨拶も致しませず、誠に濟まない事でございました。ついては夫空助が心許りの御飯を差上たいと申しますので、義理天上日の出神が手づから

拵へましたる料理、お口に合ひますまいが、御夫婦お揃ひなさつて御出下さるま  
いか、御酒の爛も出来て居ますから」

珍彦「左様でムいますかな、私の方から一度御挨拶を致さねばならぬのに、貴方  
の方から却つて御馳走をして頂くとは誠に濟まない事でムいます」

静子「日の出の神の生宮様、左様ならば御遠慮なう夫婦の者が御馳走に預かりま  
せう」

高姫は仕済ましたりと内心打ち喜び、態と艶つばい聲を出して、

高姫「これはこれは早速の御承知、日の出の神身にとり満足に存じます。空助殿  
もさぞや喜ぶ事でムいませう。是にてお互に親睦の度を加へ御神業に参加しま  
すれば、御神徳四方に輝き、従つて此館の主人公たる珍彦様の御名譽も世界に響  
き、結構な事でムいます。サアどうぞ私についてお出下さいませ」

珍彦「ハイ有難うムいます。併し乍ら袴もつけなくてはなりませんから、何卒一  
足お先にお歸り下さいませ。直に参りますから」

高姫は、

「何卒早く来て下さい、お待ち申て居ります」

と云ひ捨て吾居間に立ち歸る。後に珍彦、静子に楓の三人は手を洗ひ、口を滌ぎ、

「神素盞鳴の大神様、何卒此危難をお救ひ下さいませ」

と祈願し、素知らぬ顔して高姫の居間に現はれた。

珍彦「唯今は、態々尊き御身をもつて私夫婦の如きものをお招きに預かり有難う

ムいます。お言葉に甘え、御辭退致すも如何と存じ夫婦の者が罷出ましてムりま

す」

高姫「夫は御苦勞様でムいましたなア。何もムいませぬが、丁度お爛がよい加減

に出来て居ます。サア一つお過し下さいませ」

珍彦「有難うムいます」

と云ひながら地獄の釜の一足とび 毒と知りつつ仰ぐ杯……神素盞鳴尊、守りた

まへ……と高姫の注ぐ杯をグツと一口に飲み乾した。

空助「ヤア珍彦様は日の出の神の生宮に酌をして貰ひました。男に女、よい配合

だ、それでは私は静子さまに注がして頂きますせう、アハ、ハ、ハ、男と女とは何と

はなしに配置のよいものですわ」

静子は「ハイ有難う」と手を慄はせながら杯を差出した。空助は浪々と注いだ。

静子は一生懸命に神を念じ「神丹の効を現はしたまへ」と小聲に念じながら、グ

ツト呑み乾した。それから高姫に飯を盛られ、種々の煮物を盛られ、夫婦は十二

分に腹を膨らした。されど二人の身體には些しの變化も無かつた。空助高姫は、

案に相違して不機嫌な顔をして居る。珍彦は態と言葉を設けて、

珍彦「御兩人様、餘り澤山頂きましたので、何だか頭がグラグラ致し、目が眩ひ

さうでムいます。そして腹が痛うなりました。何卒これで失禮して吾居間でとつ

くりと休まして頂きます」

静子「ア、私も何だか胸が悪くなりました。あまりどつさりお酒を頂いたもので

すから、失禮ながら御免を蒙ります」

高姫「ハイお鹽梅が悪うムいますかな。夫はお氣の毒様、どうぞ御勝手に居間

に往つてお休み下さいませ」

兩人は、

「ハイ有難うムいます。左様なればこれにて失禮」  
と態とに足をヨロヨロさせながら自分の居間に引きとり、布團を澤山かぶり、假病を装ひ居たりける。

後見送り高姫は、長い舌を出し、腮を二つ三つしやくつて居る。

空助「アハ、ハ、ハ、願望成就時節到来だ、南無惡魔大明神、守り給へ幸はひ給へ」  
高姫「エへ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

(大正一二・一・一九 舊一一・一二・三 加藤明子録)

## 第二〇章 山彦(一二九四)

初稚姫はスマートを伴ひ、河鹿峠を宣傳歌を歌ひ乍ら降つて来る。途中に於てお寅、魔我彦、ヨルの一行に出會ひ祠の森に高姫や空助の居る事を聞き、訝かしさの限りよと心に思ひ乍らも、さあらぬ態を装ひ、三人に別れを告げて、祠の森

をさして急ぎ下り行く。

話變つて、高姫、空助兩人は又もやヒソビソ話に耽つて居る。

高姫「空助さま、世の中に智慧位偉大なものはありませぬな」

空助「うん、さうだ。何といつても智慧だな。もう斯うなる上は珍彦夫婦も、や

がて倒死だらう。さうすれば彼が息をひきとると共に、變身の術を以て、お前と

私は珍彦夫婦にならねばならぬ。何時知れるか分らぬから今から、用意にかから

ねばなるまい」

高姫「其用意とは如何すれば宜いのですか」

空助「ア、さうだ。すこし嫌の事だけど、私は珍彦の放いだ糞を飯粒一つ位舐ね

ばはらぬ。お前は静子の糞を一掴位舐るのだ。さうすれば直に變身の術が行はれ

る」

高姫「何ぼ何だつて糞が舐られますか。外に何か方法がありさうなものですな」

空助「何と云つても此奴あやらなくては駄目だ。やがて毒がまはつて倒れるに間

もあるまいから、早く身代りを拵らへて置かなくてはならぬ。高姫、實の處は此

處に兩人の糞を或方法を以て取寄せて置いたのだ』

と竹の皮包みを懐から取り出した。

高姫 『アア、嫌だわ。まるで犬見た様な事をせなくてはならないのかな』

空助 『犬でさへも糞を食へば目が見えると云ふぢやないか。糞からはアンモニヤ

と云ふ薬をとり、之等で種々の薬を造り、パンだつて饅頭だつて之で膨れるのだ。

變身には之程利くものは無いのだ』

高姫 『アア、仕方がありませんわ。之もヤツパリ義理天上日の出神様のためだと

思へば、辛抱して頂きませうかな』

空助 『實の所は嘘だよ。お前の氣を引いてみたのだ。もつと外にいい薬があるの

だよ』

高姫 『アア、やつと安心しました。本當に腹の悪い人だな。腹の蟲が食はぬ前

から、厭がつてグレングレンしてゐましたよ』

空助 『これが……さア妙薬だ……之さへ飲めば、變身の術は即座に行はれるのだ』

と懐から又もや皮包を出す。



高姫「空助さま、そりや何ですかい」

空助「之は猿の肝だ。猿膽と云ふものだ。チツとは苦いけど、之を飲めば直に變身術が出来る」

高姫「お前さまは、さうして何を飲むの」

空助「此空助は懐に持つてゐるが、此祕密を女に覺られたら、出来ぬのだから暫く発表を見合して置かう。さア早く之を飲みなさい。いざと云ふ時に私が文言を唱へるから、之を合圖にパツと化身するのだ」

高姫「如何も有難うムります。そんなら頂きませうか」

空助「さあ早う飲んだり飲んだり」

高姫は目を塞ぎ苦さを耐へて猿膽をグツと飲んで了つた。その六かしい苦相な顔は殆ど形容が出来ぬ様だつた。

空助「ハ、ハ、如何も六かしい顔だつた。三年の戀も、あれを見ちや一度に冷める様だ。まるつきり猿の様な顔をしたよ」

高姫「そら、さうでせうとも、猿の肝を飲んだのだもの。然しお前さま、三年の

戀が一度に冷めるなんて、そんな薄情な事を思ふてゐなさるのかい」

空助「ハ、ハ、ハ、如何も恐れ入りました。山の神様の逆鱗には智勇兼備の空助も

降服仕る。南無山の神大明神、義理天上日の出神許させ玉へ、惟神靈幸倍坐世」

高姫「これ、空助さま、私が斯んな苦い目をして苦しんでゐるのに、陽氣な事を

云つてゐらつしやるのだな。女房の意思は夫の意思、夫の智性は女房の智性、雙

方相和合してこそ、夫婦の和合ぢやありませんか。それ程私が苦しんでるのが面

白いのですか」

空助「ハ、ハ、ハ、世の中に何一つ恐い事のない此空助も義理天上さまには恐れ入

ますわい。南無お嬢大明神、許させ玉へ、見直し玉へ、アツハ、ハ、ハ、ハ、」

高姫「空助さま、よい加減にチヨクツて置きなさい。千騎一騎の場合ぢやありま

せぬか。貴方は世の中に怖いものはないけど、私が怖いと云ひましたね。それ程

怖い顔なら何故女房になさつたのですか」

空助「ハ、ハ、ハ、さう短兵急に攻めかけられては聊か迷惑だ。拙者の怖いものは犬

位なものだよ」



様だ。俺は暫く森へ姿をかくすからお前行つて、うまく初稚姫を歸なしてくれな  
いか。おい、イル、初稚姫に空助さまはお留守だと云つてくれ」

イル「ハイ、承知致しました。然し乍ら折角娘さまがお訪ねなさつたのだから、  
會つてやつて下さつたら如何ですか」

空助「いや、却つて甘やかしちや娘のためにならぬから、此處は會ふてやらぬ方  
がよいだらう。それが親の情だ。高姫、オイお前も表に出て初稚姫に得心さして  
くれ」

高姫「はい、承知致しました」

と大きな尻をプリンプリン振り乍らイルを伴ひ、玄關口へ驅け出した。其間に空  
助は化物の正體を現はし、スマートが怖さに巨大なる唐獅子となつて裏の森林へ  
飛び出し、山越に何處ともなく姿を隠しける。初稚姫が伴ひ來れるスマートは、  
俄に「ウーウー」と呻り出し、足掻きをし乍ら一目散に森林をさして驅け入りぬ。  
初稚姫は不審の眉をひそめてスマートの行衛は如何と案じ煩ふ折もあれ、スマー  
トは前足に少しく傷を受け乍ら足をチガチガさせ初稚姫の前に歸り來たり、「キ

「ヤーキヤー」と二聲三聲泣き乍ら、一生懸命に足の傷を舐て居る。初稚姫は高姫のどどむるも聞かず、無理に奥へ進み行つた。スマートは足をチガチガさせ乍ら、廊下を傳ふて初稚姫の後に従ひ行く。高姫は吾居間に歸つて見れば空助の姿が見えないので聲を限りに「空助サーン空助サーン初稚姫さまが見えましたぞや」と怒鳴り立ててゐる。向ふの谷間から木魂の反響で、山彦が「空助サーン空助サーン初稚姫さまが見えましたぞや」と答へて居る。雪の混つた初春の寒い風が遠慮會釋もなく屋外を渡つて行く。

（大正一二・一・一九 舊一一・一二・三 北村隆光録）

靈界物語 第四九卷 眞善美愛 子の巻

終り